

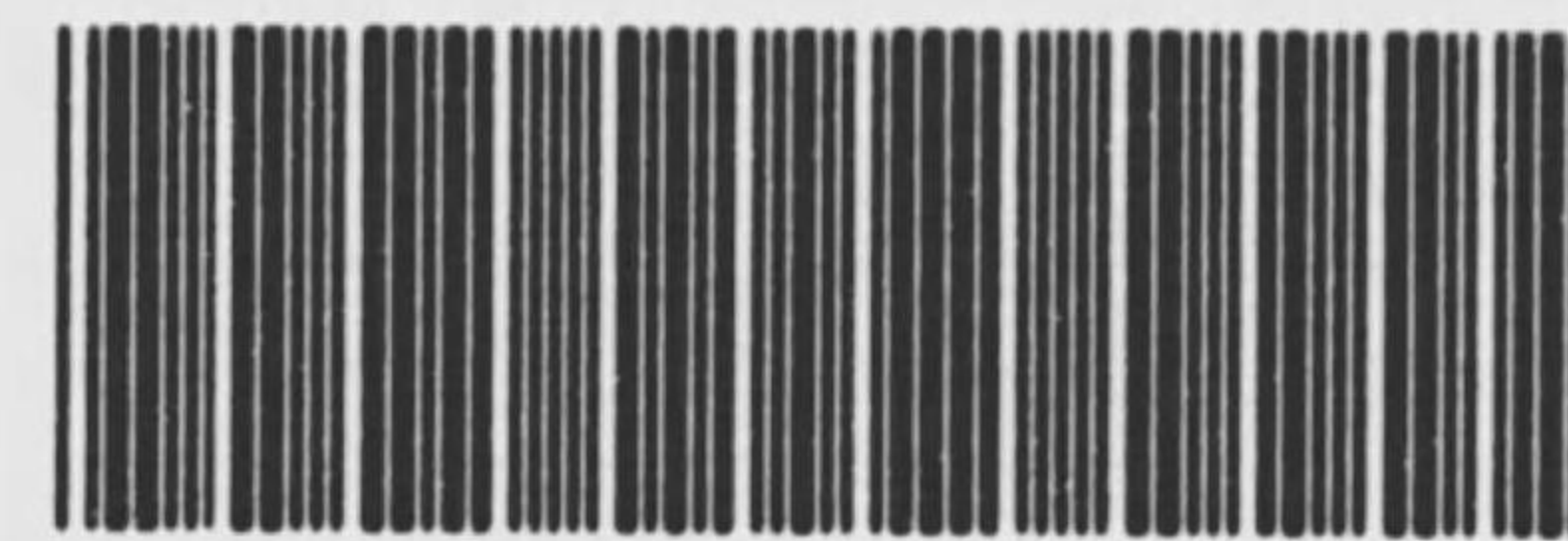
390



國家主義運動の理論と現況

喜入虎太郎著

東京新光閣發行



* 0034273000 *

0034273-000

特204-721

國家主義運動の理論と現況

喜入虎太郎・著

新光閣

昭和9

AGC

特204
721

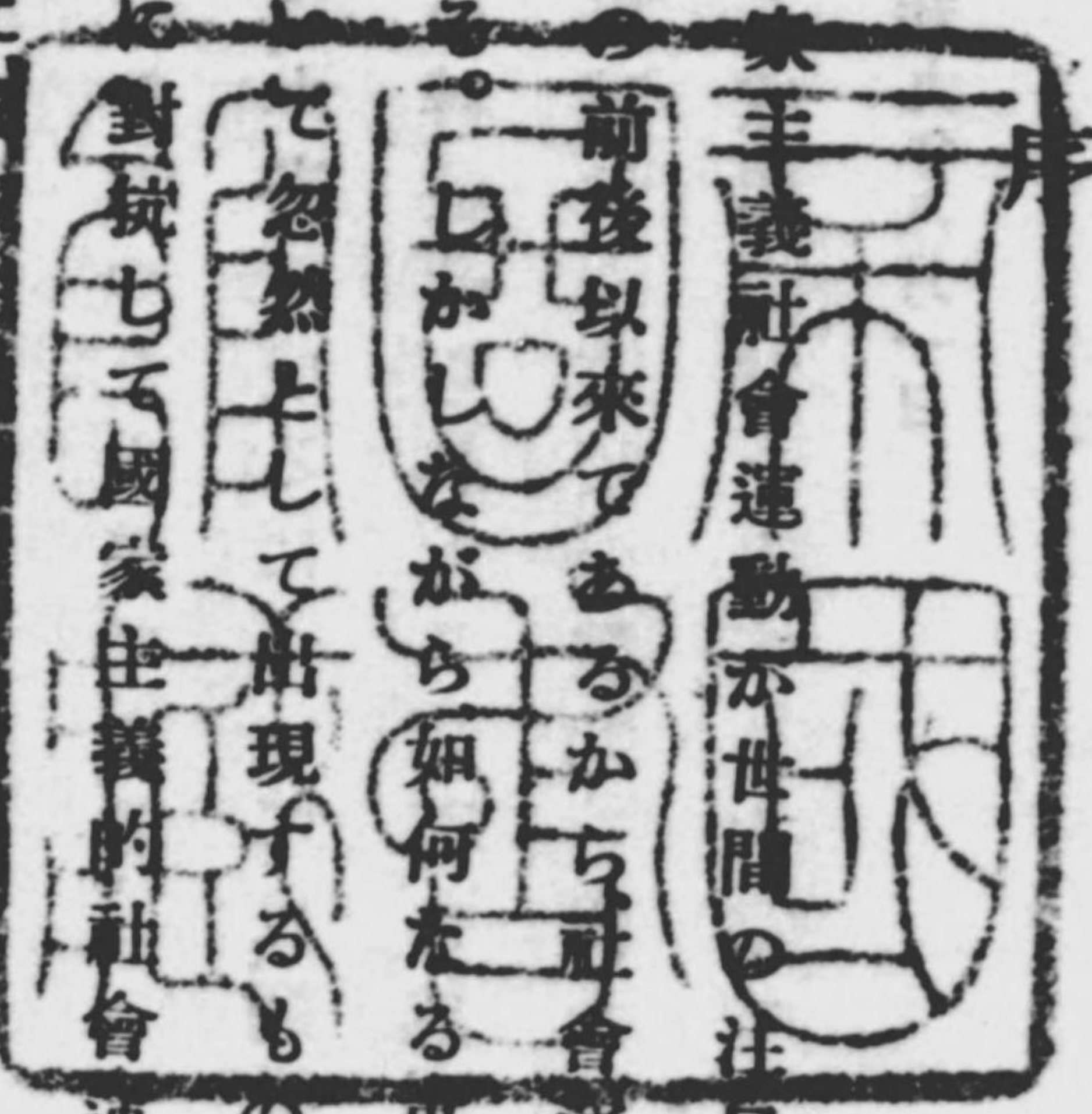
1874
JAN 10
NEW YORK

1874

欠

MISSING

國家主義社會運動が世間の注目を引くようになったのは、例の五・一五事件の前後以來であるから、社會運動史の上からは極めて最近の事象に屬する。しかしながら如何なる事象もそうであるように、ある一定時間において忽然として出現するものでは決してない。社會主義的な社會運動は對抗して國家主義的社會運動が有力に擡頭するに至つた理由と同時に國家主義的社會運動そのものも亦それ自身の緣由を持つてゐることを無視することは出来ないのである。



從來の社會運動史には、國家主義社會運動の部分が缺けてゐた。少く

とも極めて不十分であつた。運動そのものが極めて微力であつた時代にはそれも誠に尤もであるが、今やこれを無視することは客觀的に不能である。しかも近來雨後の筍の如く輩出してゐる有意義無意義の類書に、筆者は尙ほ満足すること能はず、偶々新光閣主人の懇懇に會して喜んで筆をとつた次第である。

尙ほ、本書の成るについては、岡見齊氏の「國家主義運動大觀」(新光閣發行)を始め裨益せられたる諸著に感謝しなければならぬが、それと共に友人蒲池篤誠君の直接の援助を得たること至大なるものがある。併せ記して厚く感謝の意を表する次第である。

昭和九年八月一日

著者識

目次

| | | | |
|-----|--------------------------|-------|----|
| 第一章 | 國家主義社會運動の基礎理論 | | 一 |
| 第一節 | 社會改革運動の原理としての國家社會主義と日本主義 | | 一 |
| 第二節 | 國家社會主義のマルクス主義批判 | | 二 |
| 第三節 | 政黨政治排撃論 | | 一七 |
| 第四節 | 統制經濟論 | | 二四 |
| 第五節 | 農本自治主義の概要 | | 二九 |
| 第二章 | 國家主義社會運動の沿革及發展 | | 三三 |
| 第一節 | 國家主義團體の沿革的分類 | | 三三 |

(1) 對外問題に關聯して發生した民族闘争主義の團體……………三三

(2) 社會主義運動反對を任務として發生したる團體……………三四

(3) 社會主義的社會運動から轉換したる團體並に軍部に於て發生したる
フアツシヨ的グループ……………三五

第二節 國家主義運動發展の三段階……………三六

第三節 前期Ⅱ資本主義初期の時代……………三七

第四節 資本主義完成期に於ける運動……………三八

1 反社會主義團體の發生……………三九

2 老 壯 會……………四〇

3 猶 存 社……………四一

4 行地社の誕生……………四二

5 國家社會主義運動の發生……………四三

6 建國會の創立……………四四

7 教化運動の擡頭……………四五

8 愛國學生運動の擡頭……………四六

第五節 後期Ⅱ恐慌期に於ける運動……………四七

1 國家主義社會運動のフアツシム化……………四八

2 急進愛國黨並に急進愛國労働者總聯盟の結成……………四九

3 日本國民黨の結成……………五〇

4 愛國勤勞黨の結成……………五一

5 全日本愛國者共同闘争協議會……………五二

6 大日本生産黨の結成……………五三

7 神武會の誕生……………五四

8 日本社會主義研究所……………五五

9 日本國家社會主義學盟の誕生とその改組……………五六

10 無産黨の分裂と日本國家社會黨……………五七

11 日本國民社會黨準備會(新日本國民同盟)…………… 八六

12 新日本建設同盟、社會自由黨…………… 九〇

13 國難打開聯合協議會、國體擁護聯合會の誕生…………… 九一

14 大同俱樂部…………… 九三

第六節 國家主義と農民運動…………… 九四

第七節 國家主義的勞働組合運動…………… 九七

第八節 軍部關係の革新派…………… 一〇一

第三章 國家主義社會運動の現状…………… 一〇三

1 大日本生産黨…………… 一〇七

2 神武會…………… 一三三

3 國體擁護聯合會…………… 一二四

4 新日本國民同盟…………… 一二六

5 明倫會…………… 一二八

6 皇道會…………… 一三三

7 日本農民組合…………… 一二三

8 國民協會…………… 一二七

9 青年日本同盟…………… 一三〇

10 日本遞信從業員組合…………… 一三三

11 愛國政治同盟…………… 一三四

12 維新青年隊…………… 一三六

13 日本産業軍…………… 一三七

14 勤勞日本黨…………… 一三九

15 日本勞働同盟…………… 一四二

16 大日本國家社會黨…………… 一四三

17 遞友同志會…………… 一四六

18 日本産業勞働俱樂部…………… 一四八

目
19 國維會……………三二
20 國本社……………一四

第一附錄

國家主義團體現勢一覽表……………一五七

第二附錄 (別紙)

國家主義團體系統要圖

國家主義運動の理論と現況

第一章 國家主義社會運動の基礎理論

第一節 社會改革運動の原理としての國家社會主義と日本主義

國家主義は元來國際主義に對して區別されたものである。だから、例へば、明治維新以前の我國の様に、封鎖的な社會生活の行はれた場合には、國家主義といふものはそこに存在する餘地はない。何故なら、國家はそれに對立する要素を持つて居らないから、國家の統一を強調する意味がない。

尤も、國家主義を意味するナショナルリズムといふ言葉は、同時に民族主義といふ意味を持つてゐる。そしてそれには又、歴史的な理由がある。すなはち、ヨーロッパでは近代國家の成立は、同時に民族の統一を意味してゐた。民族統一の運動は、一方では分權割據し

てゐた封建諸侯國の統一運動であり、他方では異民族の統治者に對する民族獨立、民族解放の運動であつた。たとへば獨逸國家の成立を見よ。プロシヤが獨逸帝國統一の大業を完成するまでには、ザクセンとかバイエルンとかバーデンとかその他大小多くの封建諸侯國を聯ねる關稅同盟から出發し、これら諸侯國を支配して皇帝の稱號を冠したオーストリアと一戰を交へねばならなかつたのである。イタリアの國家統一事業も亦同じである。

ヨーロッパでは民族主義即ち國家主義である。特にそれは、世界大戰後民族自決の原則によつて創設された小國、例へばポーランド、チエコスロヴァキヤ、リトアニア、フィンランド、ハンガリー等々の、かつて被壓迫民族として民族解放運動の盛んであつた國々を見ると、一目瞭然である。

これは諸外國、特にヨーロッパの國家主義である。我國の國家主義は、しかし、これとは全く様子が違ふ。

我國には古來民族鬭争といふものがなかつた。國內には支配的民族もなければ被壓迫民族もなかつた。だから民族主義といふ考へ方は元來甚だ現實味が少かつたのである。明治維新の前後、所謂黒船の渡來以後、鎖國の夢を破られて、國際間の熾烈な國家對立、國家競争の場裡に投げ込まれ、通商條約の締結であるとか、修好使節の交換であるとかの平和的折衝から始まつて、支那又はロシアとの現實の武力鬭争に當面するに及んでは、國家の生存鬭争、即ち國家主義が昭然として國民を鼓舞せざるを得なかつたのである。

従つて、我國の國家主義は、ヨーロッパ流の民族主義ではない。歐米諸強國の壓力に對する自己防衛といふ意味は多分にあるけれども、民族解放といふよりもむしろ、日本帝國を強化し、歐米諸強國と肩を並べ、世界列強の一員としての地位を確保したいといふ積極的な意思の方が多分に含まれてゐたと言はねばならない。

しかしながら、今我々が問題にしようとする國家主義は、かういふ意味の國家主義ではない。今日國家主義が社會的に注目されてゐる點は、そういふ點ではなくて、それが社會運動の指導原理となつてゐるといふ點である。國家主義の本質は依然として持つてゐるな

がら、同時にそれが國內改造、社會改革の原動力として働いてゐるといふことである。

社會改革運動といへば、即ち廣い意味の社會主義である。社會主義とは何ぞや、といふことになれば、それはまたそれで一つの大きな問題であるが、かりにこゝでは、ツガン・バラノフスキー(註)に従つて、「社會主義とは人に依る人の搾取を排し、萬人をして勞働に従事せしめ、萬人をしてその勞働の果實を享受せしめんがために、生産機關の公有を實現せんとする主張である」といふ定義に従つて置くことにしよう。

註 ツガン・バラノフスキーは革命前のロシアの大學教授で經濟學者であるが、マルクス主義の經濟理論を根本的に批判したので有名である。

このツガン・バラノフスキーの定義そのものが、實はマルクス主義からの借物であることによつても容易に推知し得る通り、社會主義の理論として最も整備してゐるのはマルクス主義であり、また社會運動として世界中に最も有力な實際勢力を持つてゐるのもマルクス主義の社會運動である。しかるにマルクス主義は、こゝに解説の要はないのであるが、

在來一切の歴史は階級闘争の歴史であり、現代資本主義社會は資本家階級と勞働者階級との相敵對する二つの基本的階級から形成され、資本家は勞働者を搾取する權力機構として國家體制を形成するのだと説明してゐる。従つて、マルクス主義によれば、社會主義の實現、勞働者の解放といふことは、先づこの國家機構の否定を前提とする。マルクス主義にとつては、勞働者階級は國境を越えて國際的に團結し、以つて資本家階級の打倒に進まねばならぬ。「萬國の勞働者、團結せよ、得るものは全世界にして、失ふべきものは鐵鎖のみ。」——これがマルクス主義の合言葉である。

勿論、國家主義は、かゝるマルクス主義に對して、正面から挑戰する。國家を否定するものは、國家主義にとつて不倶戴天の仇敵たること、いふまでもない。

一方、現實の社會を見る時、そこには凡ゆる不平不滿の種がある。現代社會は、一方の秤皿に富貴と權勢を載せ、他方の秤皿には貧困と窮乏とを載せた天秤である。資本家は勞働者の搾取によつて巨億の富を蓄積しながら、路傍のルンペンには唾もひつかけない。資

本家的社會秩序の確立した今日に於ては、天秤棒一本から叩き上げた大倉喜八郎や安田善次郎の立志傳は、桃太郎の鬼ヶ島征伐ほどの現實味しかない。百姓の子、労働者の子、小商人の子は、ついに「立身出世」の雲の梯子を捉へる機会はないのである。しかも擄取の上には顯官紳士の收賄があり、贈賄があり、演職がある。

殊に最近に於ける大資本の獨占進行は、中小商工業者を底なしの泥沼に叩き込み、況んや農民の生活を絶望の底に沈めました。

擄取なき社會の實現——それこそは望むところのものである、しかし、國家を認め、國家主義の上に立つて、この社會改造を斷行することは出来ないのか。

出来る、と先づ答へたのが故高島素之氏である。高島氏は、マルクスの原理に基いてマルクス主義の國家論を批判し、國家の永久性を主張した。國家を基本とし、國家主義の上に立つ社會主義、即ち我國の國家社會主義の理論は、高島氏によつて創設されたといふことが出来る。

高島氏が自ら明言してゐる通り、國家社會主義はマルクス主義の修正である。

「マルクス主義の現實主義的、宿命的、惡魔的、性惡觀的傾向を採り入れて、而もその到達すべき最終の歸結に徹底せしめるものは、即ち我々の機能的國家社會主義である。社會主義思想の現實主義的傾向は、我々の國家社會主義に於いて、その豫定されたる究極の運命に到着したものとひ得る。」

國家社會主義なる原理が、社會改造運動の原理として正當であるかどうかといふ議論は別として、それは社會改造といふ點、社會主義といふ點に、全力點を置いてゐることを認めなければならぬ。マルクス主義に對する直接の批判として出て來たものである以上、それは何も不思議とするに足ることではないのである。國家社會主義に於いては、國家はその價值が認められ、永久性が承認されてはゐるが、その國家主義はむしろ社會主義に調和せしめられてゐるといつてもよい。國家社會主義に於いては、國家主義そのものは、社會改造運動の原理としては殆んど意義を有してゐない。高島氏の如きは、社會改造運動の原理

としてマルクス主義を殆んどそのまま採り入れたことをむしろ誇りとしてゐるかのやうに思はれるのである。

純粹の國家主義は、國家の意義がその程度にしか認められないことに對して、非常な憤激を感じる。だから、「國家社會主義は共產主義のカムフラージュである、共產主義にたゞ國家のシャツポを冠したにすぎぬ云々」といふ非難の生ずる所以である。これに反し、純粹の國家主義——所謂日本主義または皇道主義は、たゞ國家を認める、もしくは國家を中心とする、といふだけで終れりとしめない。日本國家そのものの本質が資本主義と矛盾すること、國家主義そのものが搾取なき社會の實現を含むことを強調する。

「日本主義とは何か。

萬世一貫の皇統を中心として、皇運の天壤無窮を確信し、政治的には君民同治、一君萬民の本義に則りて、個人主義と暴壓政治とを排し、經濟的には一國一家の原則に準據して搾取と不平等とを同胞の間に絶無ならしめ、萬代不變億兆一心に斯の國體の精華を

内に發揚すると共に、外に光被せしめ行く決意並に實踐のすべてを指して日本主義といふのである。」（津久井龍雄「日本主義の基礎理論」）

「我等が則る天は純乎として純なる日本の理想である。日本の理想を行ふべき地は、いふまでもなく日本國である。然るに現實の日本國家は、斷じて日本の理想の具體的現實でない。それ故に、吾等は是の如き國家の改造革新に拮据する。従つて行地運動は國家改造運動である。」（大川周明「行地社の辭」）

行地社の正嫡神武會の綱領中に曰く、「一君萬民の國風に基き、私利を主として民福を従とする資本主義經濟の搾取を排除し、全國民の生活を安定せしむ可き皇國經濟組織の實現を期す」と。

資本主義的搾取を排除する所以は、國家社會主義が勞働者的立場に立つに反して「一君萬民の國風」すなはち日本主義そのものに基づく。日本主義が因で、搾取の排除が果である。國家が主で、社會改革が従である。

何故か。

國家主義は、國家の内部的結束、全體的調和を國民各個人の自由の上に置く。國家の全體的調和を紊すものは、斷乎として彈壓されねばならぬ。たとへそれが個人の自由を極度に束縛し、個人の權利を制約するものであつても。しかるに、資本主義の本質は個人主義であり、そして個人の自由主義である。資本主義社會の原則は、自由人の行動は結局國家全體の調和に一致する、といふにある。しかし、その原則はあてにはならぬ。現に調和は破れてゐる。そこで國家主義は、國家の全體的結束といふ立場から、社會改革の運動に出發するのである。

國家社會主義も、實は、詮じ詰めれば、この點に於ては一致するのである。後に述べる様に、國家社會主義は、資本主義批判に於てはマルクス主義を採り入れてはゐるのだが、マルクス主義の精髓ともいふべき階級闘争理論、プロレタリア的立場といふものはこれを排斥し、國家の全體的立場といふものをその立論の土臺に持つて來るからである。要する

に國家社會主義は、名詮自性、國家主義と社會主義との折衷に外ならない。

第二節 國家社會主義のマルクス主義批判

國家社會主義はマルクス主義に對する修正として出て來たものである。しからば、國家社會主義のマルクス主義批判は、どんな風に行はれてゐるか。

第一に來るのは、いふまでもなく、マルクス主義國家論の批判である。エンゲルスまたはレーニンの説く所によれば、國家の本質は搾取といふことにある、従つて労働者が政治權力を掌握してその搾取關係を廢止すれば、國家は死滅するといふのであるが、しかしこの國家論は無政府主義的、ユートピア的社會主義の殘滓であつて、まだ眞に科學的であるとはいへない。その證據には、現にプロレタリアが政權を掌握してゐるソヴェート聯邦に於て、共産黨は新たな支配者群となり、その他の國民は舊ブルジョアたるとプロレタリアたるとを問はず、すべて被支配者群であり、それは事實上嚴然たる國家ではないか。その

プロレタリア國家が「死滅して行く」といふことは、お人好しの樂天主義者の空想ならば知らぬこと、實際には少しもその徴候は現はれてゐないではないか。

これが先づ疑問の提出である。次いで、更に一步前進して、それはその筈である、國家は死滅する筈はないのである、何故なら、國家の本質は搾取といふ點にあるのではなくて、支配といふ點にあるからだ、といふ積極的な國家理論を建設してゐる。高島氏は次の如く言つてゐる。

「我々は國家の第一本質を支配に求め、第二本質を支配機能の分化獨立に求める。……

國家とは、分化獨立せる公的權力によつて統制された一つの地域社會である。」

人間は本來利己的なものであるから、社會が統一的な組織として存在するためには、そのエゴイズムを抑制し調節する支配機能が必要である。これは凡ゆる社會にとつて共通する本質的なものだ。然るに社會が分化し複雑化するにつれて、この支配機能が公權力として分化獨立する。これが國家の本質である。勿論、現實の歴史上の國家は、種族闘争によ

つて征服種族がこの公權力を獨占して支配階級を形成し、また搾取關係と結合してこの公權力を搾取のために役立たせましたのである。しかしながら、その階級對立とか搾取とかいふことは、國家の本質とは何にも關係のない偶然的なものであつて、だから、その偶然的なものが廢止されたからとて、國家そのものが變動するわけではない。搾取が廢止されたら、國家はむしろその本然の、純粹の面目たる政治的支配關係が確立されることになるのである。

第二は、従つて、インターナショナルイズムの批判である。赤松克麿氏は「新國民運動の基調」といふパンフレットの中で、社會主義のインターナショナルイズムを痛烈に批判してゐる。即ち曰く、マルクスは資本主義が自由主義的發達を遂げつゝある時代に生きてゐた。だから彼は單一世界經濟の到來といふことを夢想し、社會主義が一國だけで實現することはあり得ないと考へたのである。然るに現實は如何。單一世界經濟の到來といふが如きは畢竟夢想に止まつてゐる。今日の資本主義はすでに獨占資本主義で、自由貿易主義は

すでに死滅し去つた。世界經濟は單一化されずして、幾つかの國民經濟の對立抗争を現出してゐる。

獨占資本主義の激烈なる國際競争の結果は、各國の國民生活水準を不平均にした。強大民族の生活水準は弱小民族のそれよりは高度となつた。イギリスの労働者階級は植民地搾取の分前に與つてゐるから、國內的には資本家と對立抗争してゐようとも、對外的には資本家と國民的運命を共にする。例へば印度問題である。印度の獨立は印度の國民生活を向上せしめるであらうが、イギリスにとつては致命的であらう。資本家だけでなく労働者にとつても致命的である。だから、英國の労働者もインドの労働者も、おのおの國民主義的とならざるを得ない。そこにはインターナショナルイズムは何にもない。

もしも我國の社會運動が、相も變らず國際主義の立場を墨守するとせよ。マルクス主義者のいふ様に、日本は帝國主義國家だ、支那は被壓迫民族だ、だから我國は、滿蒙からも、朝鮮からも、臺灣からも一切手を引いてしまつたらどうなる。資源の貧弱なる我國

は、如何に資本主義を打倒して社會主義を建設したところが、労働者の生活向上どころか國民は乞食の生活をしなければなるまい。

第三の點は階級闘争の批判、所謂プロレタリアートのヘゲモニーに對する反駁である。

マルクス主義は生産者の立場から出發する。そして現代社會の基本的階級として近代資本家階級と賃銀労働者階級とを擧げてゐるが、國家社會主義の消費者的立場からすれば、この兩者は決して國民の多數を占めるものではなく、従つてまた決して基本的なものでもない。特に我國に於ては、この兩者は極めて僅かな數しかなく、それ以外に、農民、俸給生活者、獨立小營業者等極めて老大な國民群が生活してゐる。マルクスは、資本主義が崩壊に達する前に、凡ゆる國の凡ゆる生産——農業も含んで——が資本主義化し、國民の大多數がプロレタリア化することを豫定してゐる。なる程、マルクスがその研究の對象としたイギリスではさういふ過程が進行したが、しかしそれは決して世界史的な進行ではなかつた。現にその最も典型的な駁論の材料となるものは我國である。資本主義が輸入されて

殆んど半世紀を經過した今日に於ても、國民の過半數を包容する農村に於ては、農業の資本主義化は少しも進行しない。國民人口のプロレタリア化は殆んど目に見えない程度にしか行はれない。それにも拘はらず、資本主義そのものは、もはや完全に行詰つてゐる。これはマルクスの階級理論の最も大きな破綻の一であるといはねばならぬ。のみならず、マルクスは、資本主義を打倒するものはたゞプロレタリアのみだと斷定してゐるが、事實は、各國社會民主黨の中堅勢力である労働貴族は、すでに闘志を失つて資本家と妥協してゐる。反對に、サラリーマン、農民、窮乏せる中小工業者の急進化が著るしく目立つてゐるではないか。プロレタリアートのヘゲモニーといふことは、今日ではマルクス主義の理論的破綻の悲鳴と化してゐる。

逆に獨占資本主義時代の基本的對立は、一方では金融資本、他方では——全國民である。マルクス主義が依つて立たうとするのは國民の少數者たるプロレタリアであるが、國家社會主義が基礎とするのは全國民——少數の財閥を除く——である。こゝに國家社會主義の強味がある。

第三節 政黨政治排撃論

國家主義的社會運動は、沿革的に考へても、マルクス主義に對する反對、左翼労働運動に對する反對として起つて來たものだが、昭和六、七年以來大衆的な支持を得る様になつて來たについては、既成政黨に對する批判排撃が與つて力がある。

帝國憲法の解釋論としては、政黨政治論に對する反對は極めて古い淵源を持つてゐる。穂積八束博士以降上杉愼吉博士に至る帝國憲法の正統的解釋論は、山縣有朋公以後の官僚軍閥の政治論であつた。そういふ意味では甚だ古めかしいものである。最近の國家主義運動の政黨排撃論もそれと全く關聯がないといふことは言へない。——例へば赤松克麿氏の著「日本憲法と政黨政治」を見よ。しかしながら、現今の政黨政治排撃論は、すでにデモクラシーに對する批判が完了した時代であるといふこと、それに先行して一聯の政黨腐敗

の事實が続出したといふこと、國家主義者に對する政黨の挑戦があつたといふことだけを見て、古めかしい超然主義とは著しく性質を異にするといふことを推知し得るであらう。

前述津久井龍雄氏の「日本主義の基礎理論」によると、政黨政治は次の如く排撃されてゐる。

「政治を見よう。淺薄かつ欺瞞的なデモクラ主義に基調した政黨政治の獨裁がそこにはノサバリ返つて、上は不埒にも天皇の大權を輕視し、下は國民大衆の康寧を蹂躪してゐる。天皇の最も重大なる大權事項たる統帥權は近頃次第に輕視され來り、黨人の陸海軍大臣制まで高唱され來つてゐたが、ついに一昨年（一九三四年）のロンドン會議に於いては完全に統帥權、帷幄上奏權が××されおはつた。加藤軍令部長の悲壯なる引退、草刈少佐の割腹等はことごとく斯の不詳事件に基因せるものであつて、五・一五事件その他最近の少壯軍人の動きはすべてロンドン會議までさかのぼることなしには、その真相に觸れることは

出來ない。

政黨政治とは、利權漁りと政權爭奪とがその全内容である。國家のあらゆる機構と事業とが彼等の魔手によつて蠶食濫用され、ついに、陛下至高の名譽を象徴する位記勳章までが、黄金によつて賣買せられてあやしまれざるにいたつた。

議會に多數を制するもの政權を獨占し、陛下の意志寸毫も政權の推移に介在すべからずとする「憲政常道論」が、いまや政治上の第一公式たらんとするに至つて、國體の無視蹂躪また極まると云はなければならぬ。天下の志士切齒慷慨して政黨政治打倒のために起てるのもまことに當然のこととせねばならぬ。

天皇と國民との間に介在して、政權を弄斷し、國政を蠶毒する既成政黨を打倒せよ、而して一君萬民の本義を基礎とする皇政維新を斷行せよ！

五・一五事件の勃發によつて、政黨政治排撃の氣風は、陸海軍青年將校の間にも浸々乎として浸潤しつつあることが判明したのであるが、その原因が、政黨による軍備縮少、就

中ロンドン會議の海軍比率に關して政黨内閣當事者と海軍軍令部との間に紛争を生じ、ために統帥權干犯といふが如き事態を惹起したにあることは、今日すでに明瞭となつてゐる。若槻首相が加藤軍令部長の同意を得て讓歩の訓令を發したか、それとも加藤軍令部長は全く同意を與へなかつたか、といふことは、今日に至るまで、解き難き謎である。又ロンドン會議を成立せしめたことが我國の國家政策として、果して正しかつたか、もしくは誤つてゐたかといふことに關しても議論の餘地はある。しかしながら、たゞこの一事だけは明白である。海軍部内にはロンドン條約反對の氣運が著しく強く漲つてゐた、しかるに政府——即ち政黨を意味する——は、手續の正不正、政策の良不良は別としてこの海軍部内の反對論を押し切つたといふこと、少くともそう見えたといふこと、これである。青年將校の政黨排撃の根本には、この事實——政府が軍備縮少を強行したといふ事實が横はつてゐるのである。

以上の如く、日本主義もしくは純然たる國家主義の政黨政治排撃論は、帝國憲法の穂積

的もしくは上杉的解釋に基くものでなければ、統帥權干犯であるとか、利権漁りであるとか、——小橋一太、小川平吉、三木武吉等政黨の最高幹部が、政民の何れを問はず、醜惡極まる疑獄事件に連座したなまなましい記憶を想起せよ——に對する憤激に基いてゐるのである。従つて、もしも政黨政治家が清廉潔白の國士であり、政黨が私黨でなくて眞の公黨であるならば、問題は解消しなければならぬ。また、帝國憲法の解釋として、政黨政治でなければならぬといふ立論は無理であるとしても、それと全く同じく、政黨政治であつてはならぬといふ議論も無理なものとなつて来る。帝國憲法が議會による政治の運用を明記してあることは争ふ餘地がない。内閣大臣の任命は、これ大權の發動であるが、首相が政黨首領でなければならぬといふ原則が明記されても居らず、習慣として確立されても居らぬと同じく、政黨首領であつてはならぬといふ原則も憲法には明記されて居らない。それは全く大權の發動あるのみである。とすれば、以上の日本主義もしくは純然たる國家主義の政黨排撃論は、政黨政治に對する根本的排撃論であるとはいへないのである。従つ

て、それは、議會機構の上に立つての既成政黨排撃といふことになり、それを簡単に卒直に表現したのは、明倫會の綱領だといふことになるのである。

しかるに國家社會主義の政黨排撃論は、それだけに止つてゐない。勿論、君民一如、もしくは君民同治、一君萬民といふ根本思想から發足して、政黨をその中間に於て政治を壟斷する政黨であるとなす考へ方もないではないが、更に一步進んで、議會そのものに對する根本的批判がなされてゐる。

かつて存在してゐた「日本社會主義研究所」——現在の大日本國家社會黨の前身——の機關紙「日本社會主義」によれば、議會主義はプチ・ブルジョア生産様式に適合したものであり、従つて資本主義の擡頭期に於ては、議會に全ての權力が集中され、議會は國家權力のヨスガとなつてゐた、しかし、大工業——金融資本主義時代の到來と共に、議會的立法權よりも執行權の方が強くなり、今まで議會をヨスガとしてゐた國家權力は議會から脱け出してしまつた、換言すれば、執行權力こそ國家權力と目さるべきものとなり、それは

全く金融資本の手中に收められてゐるのだ、といふ。も一度換言すれば、議會は、もはや實際政治上の力ある制度ではなくなつてゐる、従つて議會を改革しようとか、議會によつて社會改革を行はうとかいふことは、この考へ方によれば、全く馬鹿げたことになつて來るのである。

これは議會制度に對する考へ方の根本的批判である。自分自身でも言つてゐるように、それはたしかにレーニン主義の擴張再生産である。(だから日本主義者が、國家社會主義を目してエセ共產主義だといふのである。)

日本主義者の考へ方からすれば、獨裁といふ考へ方は理論的には出て來ない。——論理的に出て來なくとも、非常時の權道として軍政府の樹立とか、戒嚴令の布告とか、乃至憲法の一時停止とかといふことは相當まじめに考へられてゐたものらしい。五・一五事件被告の公判に於ける陳述を新聞で讀んでも、その點は明白である。例へば、海軍の古賀中尉は、「我々が戒嚴令を布かれるが如き状態に持つて行けば、荒木陸相を首腦とする軍政府

が樹立され、改造の段階に入るものと信じた」と陳述してゐる。(昭和八年七月二十六日の東京朝日新聞より)けれども、この非常手段は、畢竟するに非常手段に止るものであり、又もしこの點を強調することが餘りに強ければ、却つて日本主義者の側から、強力論者として非難されなければならない運命になつて來るのである。

第四節 統制經濟論

國家主義的社會運動の政治上の原則は、積極的には國家主義——これは一面には國際主義に對立し、他面には階級主義に對立する——の原則であり、消極的には、或ひは當面の任務としては政黨政治の排撃である。その内容に於ては、前述の様に、或ひは保守的、或ひは急進的の相違があるけれども、根本的には一致するもののあることを承認しなければならぬ。しかしながら、今日の如く社會の分業が發達した段階に於いては、國家も、政治も、保守も改革も、いづれも經濟生活を外にしてこれを論ずることは絶対に出來ないの

である。もしも國民の經濟生活もしくは國家の經濟政策を外にして國家改造或ひは社會改革を説くものありとすれば、それは痴人夢を説くの類であらう。

そもそも國家主義が社會運動として發足するに至つた所以は、一般社會運動と全く同じく、資本主義經濟に對する反抗としてであることは、これ明白な事實である。高島素之氏は、「眞の國家主義者は社會主義者たらざるべからず」といふことをモットーとしてゐたのである。従つてそれが、資本主義の無政府的、無計畫的經濟原則に對して、また資本家の利己的營利主義に對して、國家による統制經濟の原則を對置したといふことは、何等不思議とするべきものはない。統制經濟といふ言葉は、本來社會主義經濟といふ言葉と同義語に用ゐられたのであるから。

しかし、國家主義者は、では何故社會主義經濟といふ言葉を使はないで統制經濟といふ言葉を好むのであるか。これを裏からいへば、統制經濟といふ意味を、國家主義者は、社會主義經濟といふ場合とは違つた意味に使つてゐるのではないだらうか。

社會主義の統制經濟といふ場合には、そこには勞働者の生産管理といふ考へ方が必ずはいつてゐる。ところがこれは國家主義者の最も排斥する考へ方である。赤松克麿氏は「日本精神と勞働運動」なる小冊子に於いて、マルクス主義者が「勞働組合の産業管理」を主張することは、ブルジョアジーの産業支配權に對して正反對の立場に立つものであるが、此の兩者はいづれも部分主義であつて全體主義でなく、國家産業の本質を全體的に理解しないものであるとなし、經營者も技師も勞働者も、凡てが正しき産業人としての自覺に立ち、一致協力して天皇の産業大權を輔翼し奉る産業形態が、理想的な産業形態であると主張してゐる。この考へ方は、日本精神の精髓であるといつていゝであらう。

勿論國家社會主義者は、その場合には、金融寡頭制（財閥）を打倒することが、その理想形態に到達するための前提條件としてどうしても必要であることを主張する。そしてその點で、日本主義の統制經濟論と、國家社會主義の統制經濟論とは雲泥の相違のあることを主張し、従つて前者即ち日本主義はブルジョア・ファツシヨに外ならぬと斷定するので

ある。しかし、それもそうとばかりは言へないだらう。金融寡頭制は、日本主義の諸君から見ても、これは非愛國者といふことになつてゐるのだが、それがもし、眞に全體的な、國家的な立場に立つとすれば、即ち利子奴隸制を廢止するとすれば、それをも加へた統制經濟は決して不可能ではない筈である。もしまた、國家社會主義の側が、搾取の存するところがあくまでいけないと主張するのであれば、金融資本の搾取だけを廢して産業資本の搾取をそのままにして置くといふことは自己矛盾である。國家社會主義の主張する如く、今日の階級對立の最大なるものは、金融資本と全國民との對立であるといふ定言をかりに承認するとしても、副次的な對立ではあるかも知れぬが、産業資本が産業勞働者を搾取するといふ事實は、金融寡頭制の打倒によつては少しも解消されないからである。

今日までのところ、如何にして統制經濟を組織するかといふ、具體的な計畫は成熟してゐない。一二提出された私案はあるけれども、それはあくまで私案にすぎない。

たゞ、世界情勢を見ると、各國帝國主義の經濟戰はもはやかつての自由貿易の原則を

許容しない。ソヴェート・ブロック、大英帝國ブロック、アメリカ・ブロック等々の對立は、獨立國家をしていよいよ益々自足經濟の方向へと驅り立てざるを得なくなつてゐる。今日まで、その資源の關係に於て、その市場の關係に於て、國際經濟體系に可なり著しく依存して居り、また依存せざるを得なかつた我國が、かゝる世界のブロック經濟化傾向の進行に際して、いかに大なる犠牲を拂はざるを得ないか、この事實は、國家主義者であらうとなからうと、ひとしく認めざるを得ない事實である。

國際經濟の對立の激化は、勢ひ國際外交の危機を意味する。況んや一九三五年前後には國際軍縮條約の改訂期が近づく。

社會主義の立場からではなく、國家存立の立場から、非常時國策として、統制經濟樹立の必要がヒシ／＼と痛感されて來る。況んやその際、國內に社會不安がありとするならば、舉國一致の大事業を可能ならしめるためには、先づ國內改造、社會改革が前提條件として要求されざるを得ないのである。

第五節 農本自治主義の概要

國家主義的社會運動は、社會運動といふ立場から見ると、理論的には、所謂日本主義も、所謂國家社會主義も、根本的な相違といふものは發見し得ない。當事者は相互に、いたく相排斥し合つてゐるが、これは同極相斥ける電氣の原理と類似する。

しかるに權藤成卿氏に淵源を發する農本自治主義は、以上に述べたものと全くその類を異にする。正確には、國家主義的社會運動の範疇には屬しないのであらうと考へられるのであるが、國家主義的社會運動の最も精彩ある場面を受持つた人々の中に、權藤氏の影響を受けた多くの人々があり、また現に一つの社會運動として可なり影響力を持つてゐる長野朗氏等の農村自治協會がある以上、これを無視するわけには行かないのである。

農本自治とは、生民共存の成俗を基調として、郷民結束の力により衣食住物資を調査するものであるといふ。權藤氏には特有のテクニクがあつて甚だ難解であるが、生民共存

とは、一言にしていへば労働民衆の社會聯帯である。成俗とは、社會生活に基づく社會の習慣、傳統、不文律である。成俗は、決して社會の外部から加へられる強權によつて左右せられるものではなく、自然にして治まるのである。權藤氏によれば、我國では太古以來成俗に基く自治制度が行はれ來り、大化の革新の如き大變革と見ゆるものでも、實は成俗に適應するところ極めて多いのであるが、天武天皇の時代始めて官治制度が創設された。「官治制とは、都て官に依り國政を統制するものにして、至上權を天と倣し、官司を公正最善の者として、生殺與奪都ての支配に任じ、其至上權を代行せしむるものである。彼の近世の獨逸式國家組織の簡單なる者とも見らるゝ。故に自治制の、專斷を誡め、朝野相親しみ、官民の共治を以て主眼とするものとは、全然別種別質である。」これは權藤氏自身の説明であるが、従つて、官治制は、有司役人にその人を得ればそれはそれなりによろしいのであるが、稍々もすると民衆の成俗と背離し易い。所謂官僚主義の弊である。天武朝以後我國の政治は全て官治制を基本とするに至り、百弊ために生ずるに至つた。

しかしながら、大衆の成俗はついに亡滅せられず、國內の諸地方にはそのまま持續せられて近代にまで及んでゐる。權藤氏は、従つて國家の強權主義、國家による強力統制、換言すれば所謂國家主義もしくは國家社會主義には絶対に反對である。その意味からして、農本自治主義を國家主義の範疇に入れることは間違つてゐる。

權藤氏の理論は、同じく國家主義は國家主義でも、スパルタの專制ではなくてアテネのデモクラシーである。權藤氏は成俗の起源を太古にとるが故に、太古の生産としては唯一のものであつた農業を本旨とすることは止むを得ない。これその説が極めて復古的に見える理由である。しかしながら、成俗の理論は何も農業、農民にのみ限られることはないのであつて、農業から商業へ、更に近代的工業へと、労働民衆の生活が遷化すると共に、成俗も亦その遷化するところに移らざるを得ないわけである。農本自治主義といへば、復古的であり、固定的であり、保守的であるが、實は民衆生活そのものを基礎とするところの日本的デモクラシーに外ならぬ。

この立場から見ると、政治は君民共治でなければならぬ。哲人政治であつてはならぬ。況んや暴君政治であつてはならぬ。有司專制であつてはならぬ。しかも我國の皇道政治は、本來成俗に同化したところのものであつたといふことを、權藤氏は論證してゐるのである。——政黨政治、財閥專横は、固より自治ではない。血盟團、五・一五事件の當事者が權藤説に共鳴した所以はこゝにあるといふことが出来るであらう。

第二章 國家主義社會運動の沿革及發展

第一節 國家主義團體の沿革的分類

労働組合運動にもせよ無産政黨運動にもせよ、一切の社會運動が、政治經濟諸情勢の變動——客觀的情勢の動きを無視しては正當に理解され得るものではない。國家主義運動も亦、決してこの公理から逸脱し得るものでないことは言ふまでもない。

現在我國に於て一般に國家主義團體と呼稱されてゐる團體の數は、後掲の如く百以上にも上つてゐるが、之等の團體は理論的にも實踐的にも決して規を一にせるものではなく、その中には、従來「反動團體」の名を以て呼ばれてゐたものから、最近、滿洲事變前後から擡頭し來つた急進的改造意見を保有するものまでが、一しよくに包括されてゐるのである。

國家主義團體の現状は、組織的にみればかく雜然たるものであるが、夫々の團體について、それのもつ指導精神乃至は、それが如何なる社會情勢の下に發生したものであるかを觀ると、自然その本質も明かになる。

要するに、我國に於ける國家主義團體の分野をその發生事情によつて分類すれば、大體次の三つに分ち得るであらう。

(1) 對外問題に關聯して發生したる民族闘争主義の團體

此の種の團體は、沿革的に見れば我國國家主義運動の最前期に屬するもので、明治維

新直後我國資本主義發展の基礎工作がなされつゝあつた時代に於て發生した。資本主義國として起ち遅れた我國は、當時死活の問題として支那市場の獲得、並びにそれを確保するための軍事的重要支點として滿蒙を確保することに努めつゝあつた。

玄洋社、黒龍會等の團體は、此の時期に於て、「大亞細亞主義」を掲げて起つた。

(2) 社會主義運動反對を任務として發生したる團體

歐洲大戰は我國資本主義の飛躍的發展を促した。而して、その結果は、ロシア革命成功の影響と共に我國に於ける社會主義運動、共產主義運動を急速に促進せしめた。かゝる社會主義思想の進展に刺戟されて起つたのがこの種の團體で、何等の政治的綱領も有せず、資本家の用心棒的、既成政黨の便衣隊的役割を務めたもので、その構成分子は多く壯士、博徒、土方、人足等の封建的ルンペン的要素であつた。國粹會、大和民勞會、正義團、赤化防止團、建國會等の團體がこの部類に屬する。

然しこの時代に於ては右の外尙二つの種類の團體が發生した。その一は、意識的にブ

ルジョア教化の目的を以て作り上げられた「教化團體」であり、他の一は、第(1)類の如き性質と同時に國內改造の意圖を以て生れた猶存社等の團體である。

國家社會主義の運動も亦此の時期に胚胎した。

(3) 社會主義的社會運動から轉換したる團體並に軍部内に於て發生したるファツシヨ的グループ

資本の獨占的寡頭支配が進行するにつれプロレタリアの階級的組織は強化され、資本主義機構の圓滑なる運轉は困難となるが、このことは同時に中間社會層の生活を脅かさずにはおかぬ。かくて、中間層は没落し、農民、プロレタリアの貧窮化は極度に深化する。

國內情勢のかゝる進展と並行して、否、むしろそれより先行して、國際的にも資本の獨占化が進行する。國際經濟ブロックの對立は多分に政治的軍事的色彩を濃厚にして表はれてくる。かくて、次第にナショナリズムの思想が醸成されてきた。

叙上の如き政治的、經濟的バックをもつて表はれてきたものがこの第(3)類に屬する團體である。日本國家社會黨、新日本國民同盟等がそうであるが、廣義に解釋すれば皇道會、明倫會等も亦この内に含まるべきであらう。

以上の如き分類は無論明確に限定され得るものではない。然し、前にも一寸述べた様に國家主義運動も決して政治的經濟的情勢の動きから游離して存在するものではないといふことだけはハッキリと認識されねばならぬ。このことは、次の「沿革」に於て一層明瞭になつてくるであらう。

第二節 國家主義運動發展の三段階

前述した如く、我國に於ける國家主義運動發展の過程は、そのバックをなした政治的經濟的事實の變化に従つて三つの段階に分たれ得る。即ち、資本主義發展の初期に於ける運

| 年 代 | 客 觀 的 情 勢 | 發 生 事 實 | 團 體 名 |
|------------------------|---|--|---|
| 明治初期から世界大戰勃發まで、(明治三年迄) | 新興資本主義國たる日本は、支那市場の確保、滿蒙の經略に懸命であつた。 | 新興日本の發展を妨害せんとする歐米各國の壓迫に抗して、大亞細亞主義を前提して發生した。 | 玄洋社、黒龍會 |
| 世界大戰の發端より、(大正三年頃) | 歐洲大戰の結果、日本資本主義は飛躍的發展を遂げたが、それと相伴つて、デモクラシーの思想と共動が急速に進展した。 | (1) 社會主義運動の進展に對しては、立脚するもの少く、社會主義的性質を以て創設された。 | 大日本國粹會、正義團、浪人會、大和民勞會、赤化防止團、等、其他反動的學生團體、 |
| 昭和二年頃迄) | | (2) 多數の社會主義的性質を以て創設された。 | 猶存社、行地社、大化會(經綸學盟)、 |
| | | (3) 行せんとする社會主義的性質を以て創設された。 | 教化團體一般(修養團、希望社、報德會、等) |

動、資本主義完成期に於ける運動、恐慌の時代に於ける運動、の三段階である。このことは既に上述せる如くであるから、わかり易くする爲表示すると大體次の如くである。

に生起した。そのうち最も著名なものは福岡玄洋社と黒龍會であるが、玄洋社は西郷南洲が征韓論に破れて歸山したのと相前後して平岡浩太郎、頭山滿氏等によつて大陸政策と内政改革を標榜して創立されたものであつた。黒龍會はこの玄洋社の一系統で、北清事變が済んで間もなく、日露の關係が次第に險惡な傾向に向ひつゝあつた明治三十四年、「帝國の皇謨を恢暢し、亞細亞民族の振興を圖る」目的を以て創設され、内田良平氏をその主幹に戴いた。

内田氏は、すでにこれより以前、明治二十七年に韓國東學黨の亂が起つた際には「天佑俠團」なるものを組織し、その首領と肝膽相照し血盟したり、アギナルドの比律賓獨立運動や孫文の革命運動を援助したりしてゐたが、黒龍會を創立するや直ちに會報及機關紙「黒龍」を發刊し、これに據つて極力對露開戦論を強調した。かくて、日露戦争が開始されるや、明石元次郎氏と共にその裏面に活躍し、日韓合併に際しても伊藤公の意をうけて大いに劃策するところあり、殊に明治四十四年支那革命運動が起るや、同志と共に「有隣

會」を組織して之れを扶け、その後引きつづき支那革命、滿蒙問題、等の爲めに活躍を續けた。

叙上の如く、玄洋社にもせよ黒龍會にもせよ、その運動は明治初期から中葉にかけて、國內問題よりむしろ日本の大陸進出政策と並行して發展した。此の時期は、言ふまでもなく、我國資本主義成立の初期に相當するが、資本主義國として立ちおくれた日本は、市場の獲得、確保のため、支那並に滿蒙へ進出することは經濟的に軍事的に決定的重要性をもつてゐたことと言ふまでもなかつた。玄洋社、黒龍會等の運動は實にこの線に沿ふて發展したと觀るべきである。明治末期に至り、資本主義體制が漸く整備され、議會政治も殆んど完全されるに至つて、この種國家主義運動が沈潜した事實は、このことを明瞭に裏書するものであつた。

第四節 資本主義完成期に於ける運動

1 反社會主義團體の發生

叙上の如く、資本主義發展の初期に於ける國家主義運動は、民族主義的意識と愛國主義的排外意識を昂揚せしめ、民衆の注意をこの點に集中せしめることによつて、日本資本主義發展の過程に於て發展をとげたが、歐洲大戰を期として情勢は著しく變化した。

歐洲大戰の結果、我國資本主義は高度の發展を遂げ、それは必然に労働運動の進展を促進せしめた。而して、ロシア革命の成功は一層この傾向に拍車をかけた。社會主義、共產主義の思想は、労働者農民及び知識階級の間著しく浸潤した。デモクラシーの思想は急速に發展した。

而して、一時沈潜してゐた國家主義運動もかゝる客觀的情勢の、殊に社會主義思想の急速なる發展に刺戟されて再び擡頭してきた。然しこの再生した國家主義運動の分野は明確に二分される形に於て表はれた。その一は「國粹會」(大正八年十月)、「大和民勞會」(大正十

一年一月)、「赤化防止團」(大正十一年十一月)、「大日本正義團」(大正十四年二月)等の反社會主義、反共產主義を以て目的の全部とするもので、黒龍會や浪人會も同一の行動をとつた。他の一つは、社會主義共產主義に對しては無論絶対反對の立場をとるが、そして對外的には黒龍會の目的するところと同じく大亞細亞主義に出發するが、單に亞細亞政策のみに止まらず、更に日本の國內改造にまで進まんとした「猶存社」によつて代表される運動であつた。

2 老壯會

猶存社發生の事情については後に詳述するが、猶存社が創立される前の年、即ち大正七年十月、大川周明、滿川龜太郎氏等によつて起された老壯會の存在は見逃せない。何故ならば、老壯會は、期間にすれば僅か一年足らずの生命であつたし、又單なるクラブ的組織に過ぎず、月一回の講演會、座談會、討論會の外みるべき業績ものこされてゐないが、そ

のメンバーが左右兩翼の思想家、社會運動家から將官級の軍人にまでも及んでゐたし、現在の國家主義運動と色々な意味に於て内面的に極めて密接な關聯をもつものと思はれるからである。老壯會に参加したメンバーは次の如き顔振れであつた。

大川周明、滿川龜太郎、中野正剛、高島素之、堺利彦、佐藤鋼次郎、上泉徳彌、北原龍雄、遠藤無水、島中雄三、下中彌三郎、山元龜次郎、鹿子木員信、沼波瓊音、笠木良明、島野三郎、岩田富美夫、長谷川光太郎、細井肇、田鍋安之助、伊達順之助、大竹博吉、金内良輔、小原達明、小栗慶太郎、川島清治郎、高尾平兵衛、佃信夫、草間八十雄、山口正憲、長瀬鳳輔、中村高一、工藤鐵三郎、松延繁次、權藤成卿、宮島大八、水野梅嶺、北一輝、宮川一貫、清水行之助、茂木久平

然し、この老壯會は會員の範圍が餘りに雑多に過ぎた爲め、遂に明確なる存在意義を示すに至らずして前記の如く一年餘にして自然消滅の形になつてしまつた。

3 猶存社

北一輝氏を主盟とし、大川、滿川の兩氏を兩翼として猶存社が起されたのは、この老壯會が設立された翌年、即ち大正八年であつた。當時北氏は支那革命援助の爲め上海にあつたが、大川氏は態々上海に出向いて北氏の歸還を勧誘した。北氏は「支那革命外史序」の中に於て當時の事情を次の如く記してゐる。

「不肖は此書が極めて限られた範圍の配布なりしに係らず、これによりて滿川龜太郎君を得た。大川周明君を得た。五年に來訪を受けたゞけの滿川君に「ヴェルサイユ會議の最高判決」を書き送り得る信頼の大節義を見た。一面識だにない六尺豊かな大川君が、日本が革命になる、支那よりも日本が危いから歸國しろとワザ／＼上海にまで迎へに來た大道念に刎頸の契を結んだ。此書が大隈寺内氏等に誤り讀まれても、斯く炎々焔の如き魂を以て此書が何を欲し何を目的とするかを看破したものがあつた。若し此書にして更に幾十人かの大川公滿川伯を得ば、日本の事、大亞細亞の事、手に唾して成すべしである。」

この結果、北氏は遂に岩田富美夫、清水行之助、辰川龍之助（靜夫）氏等と共に、日本に歸り猶存社を起したのである。

猶存社の名稱は、陶淵明の「雖三徑就荒松菊猶存」からとられた。同人としては鹿子木員信、安岡正篤、笠木良明、岩田富美夫、清水行之助、松延繁次、島野三郎、金内良輔氏等が居た。そしてその綱領は、

- 一、革命日本の建設
- 一、日本國民の思想的充實
- 一、日本國家の合理的組織
- 一、民族解放運動
- 一、道義的對外策の遂行
- 一、改造運動の連絡
- 一、戰闘的同志の精神的鍛練

以上であつた。

右の綱領からも直ちに判明する様に、猶存社も大亞細亞主義を主張する點に於ては黒龍會と同様であつたが、「革命日本の建設」を期する點に於て黒龍會とは相違してゐた。猶存社が、かる綱領をかゝげたことは、支那革命の實踐に参加した北一輝氏の影響を受くること甚大であつた。

猶存社は機關紙「雄叫」發行、北氏の「大日本改造法案」頒布の外、實際運動としては大正十年攝政官御渡歐阻止運動以外格別の運動もなさなかつたが、かゝる急進國家主義の主張が、現在あるが如きファシズムの思想的地盤をなしたことは注目されるべきである。

4 行地社の誕生

かくて、猶存社の前途は非常に刮目されたものであつたが、北、大川兩氏の意見の對立から、次第に分裂の傾向を示し、鹿子木博士の洋行等が動機となりついに大正十二年解散の止むなきに至つた。かくて大川氏等は、その翌十三年四月行地社を創立した。

猶存社が解散された當時、舊本丸内に社會教育研究所なるものがあり、こゝでは小尾晴敏氏が愛國的學生の教導に當つてゐたが、大川氏がこれに關與するに至り、名稱を大學寮と改め、安岡正篤、滿川龜太郎、中谷武世、松延繁次の諸氏が教師として専心之に携はり、西田稅氏も朝鮮羅南から引上げて之に参加した。行地社はこの大學寮を中心に創立されたものであつたが、こゝには軍部少壯派も多く出入した。荒木、秦等の軍部少壯派と大川氏との結合はこの時代に於てなされた。

行地社は大川周明氏を統務委員長に、滿川龜太郎氏を主事におき、笠木良明、綾川武治、高村光次、金内良輔、松延繁次、中谷武世、島野三郎、安岡正篤の諸氏を各専門部長とし、月刊雜誌「日本」を發行する外、「日本文明史」、「日本及日本人の道」、「日本精神研究」等大川氏の著書を次々に刊行し、日本主義の普及に努めたが、綱領として次の七項が掲げられた。

綱 領

- 一、維新日本の建設
- 二、國民的理想の確立
- 三、精神生活に於ける自由の實現
- 四、政治生活に於ける平等の實現
- 五、經濟生活に於ける友愛の實現
- 六、有色民族の解放
- 七、世界の道義的統一

行地社の本質は右の綱領に於てすでに明瞭な如く、猶存社のそれと全く背馳するところなかつたが、唯猶存社に於ては單に「日本國家の合理的組織」として表現された國內改造に對する意見が、行地社に於ては「二、精神生活に於ける自由の實現 三、政治生活に於ける平等の實現 四、經濟生活に於ける友愛の實現」と、極めて抽象的乍ら改革に就いての方針と目標を示した點に於て、國內改造については行地社に多少の積極性がみられる。

大川博士の行地社の辭は殆んど國內改造に對する意見でつくされてゐる。即ち――

「行地社の名は古人の所謂則天行地に由來し、ひとしく天に則り地に行はんとする同志の團結である。天に則るとは明らかに理想を認識し、堅くそれを把持することである。地に行ふとは、この理想を現實の生活に實現することである。然るに天即ち理想は、此處にあり彼處に在りと探し求む可きものに非ず、實に潜んで吾等の魂の裏に在る。而して我等は日本の民なるが故に、我が魂に求め得られたる天は、必然日本の理想でなければならぬ。魂の奥深く探り入れば入る程、此の理想はいやが上にも日本的となる。かくて我等が則る天は純乎として純なる日本の理想である。

日本の理想を行ふ可き地は、云ふまでもなく日本國である。然るに現實の日本國は、斷じて日本の理想の具體的實現でない。それ故に、吾等は是の如き國家の改造革新に拮据する。従つて行地運動は國家改造運動である。」

右の如く、行地社は、國內改造の緊急性を強調したが、その實行に就て大川氏の理想は、飽くまで大衆運動によらず、軍部の少壯分子による×××主義であつた。大學寮に

於て、大川氏が荒木、秦等の急進分子と談合し軍部少壯派との提携に努めたことは前記の如くである。

か様に行地社の運動は専ら軍部中心主義的傾向にはあつたが、無論軍部以外にも働きかけ、大阪、京都、山形等に次々に支部の結成をみた。然るに大正十五年、安田生命誠首事件、宮内省怪文書事件(註)が起るに及び、同人の間に溶け難き反目を生ずるに至り、大川派と北派は完全に分離し、遂に、西田、滿川、笠木、綾川、中谷の諸氏は相亞いで行地社から脱退した。

註 1 安田生命事件とは行地社員千倉武夫氏がその勤務先安田生命から誠首された事に起因するもので、行地社にその解決を依頼してきたのに對し、大川氏は之を承諾、安田生命との間に交渉を始めたが、その間北派及その一派は此の大川氏の態度に反對した、而してその間色々の事情が起り大川派は北派を「裏切者」と呼ぶに至つた。

2 然るに丁度同じ時期に、宮内省の樺太山林拂下問題に關する宮内省怪文書事件なるものが起つたが、之については當時大川氏は牧野内府と親交あつたため却て北派から裏切者呼ばはりされ

る結果となつた。

かくて行地社の運動は一時全く沈滞し切つてしまつたが、間もなく金内、松延氏等を中心に見直し、津田光造氏について狩野敏氏が本部に入り、見るべき活動としてはなさなかつたが、神武會の發會される迄機關誌「日本」に據り日本主義及び亞細亞民族解放の啓蒙的運動に従事した。現在の神武會機關紙「日本」はこの行地社の機關誌だつた「日本」が、昭和七年、神武會が創立され「行地社もその中に發展的合流する事となつた」結果「提供」されたものである。

5 國家社會主義運動の發生

猶存社——行地社は何れもその綱領に於て國內改造の項目を掲げはしたが、それは決して科學的社會主義思想に出發するものでなかつたことはいふまでもなく、復古的日本主義の上に立つての改造意見にすぎなかつた。歐洲大戰後國民大衆の排外的愛國主義の昂憤は

さめ、資本主義の高度化と慢性的經濟恐慌の發展に労働爭議小作爭議の波は遽に高まり、社會主義の思想は急速に進展しつゝある時期に於て、かゝる復古的精神主義運動が大衆性をもつことの困難であることは殊更にいふまでもない。

こゝに高島(素之)氏は、マルクス主義の修正——國家社會主義の理論を掲げ、國家主義運動の大衆化を期して大正十年「大衆社」を起し、週刊紙「大衆運動」を發刊した。然るに當時はサンチカリズムの全盛期であつたため、却て反動と罵しられ、關東大震災の結果個人的各種の事情により同人矢部周、神永文三兩氏が大阪に去つてからは一時全く沈滞してしまつた。

これよりさき、岩田富美夫氏は大化會を創立したが(大正九年四月)、上杉慎吉、高島素之氏の接近はこの大化會を通じて緊密となり、大正十二年の頃兩者の提携によつて「經綸學盟」が創立された。上杉博士の憲法論を基礎とする國家主義にも此の頃から多分に國家社會主義的色彩が加はつた。

6 建國會の創立

現在に於ける建國會の存在は、前述した國粹會や正義團と同じく反社會主義を以て唯一の使命とする反動團體に過ぎなくなつてゐるが、創立の當初に於ける建國會の理想は多分に國家社會主義的傾向をおびてゐた。赤尾敏氏（理事長）により建國會が創立されたのは大正十五年三月で、頭山滿、平沼騏一郎、山川健次郎、一戸兵衛、上杉慎吉、永田秀次郎氏等を顧問格とし、高島一統の國家社會主義理論を指導理論の基底とした。當時に於ける同人中には、神兵隊事件の前田虎雄、鈴木善一氏等の外現在國民協會に屬する津久井龍雄氏（書記長）等もあり、その前途は當時の國家主義運動のうち最も注目されてゐたが、財政難と、幹部間に於ける對立が激化していつた結果、次第に衰微し、上杉、高島兩氏の死後は、全然暴力團的反動と化してしまつた。血盟團事件の盟主井上昭氏は前田氏との友好關係から當時群馬縣の郷里に於て建國會運動に盡力した。

尙今日東京で年中行事の一となつてゐる建國祭は、大正十五年二月十一日この建國會によつて創められたものである。

綱 領

- 一、我等は普通選舉の實施と共に全國民をあげて天皇に直接し建國の精神に立脚せる眞正なる日本民族の日本國家を建設せんことを期す。
- 一、我等は日本民族が有色人種の先頭に立ちて全人類の世界文明を實現するの我が歴史的使命を成就せんことを期す。
- 一、我等は日本民族の傳統的道德を維持し輕佻浮薄を排し質實剛健の美風を作興せんことを期す。
- 一、我等は國家によりて國民生活を統制し日本國民の天皇の赤子として平等なる所以を徹底し同胞中一人の不幸不平なるものなからしめんことを期す。
- 一、我等は各人の有する財産、地位、階級、職業、知識、技能、筋肉が皆國家社會のために存在することを確信し犠牲の精神に依りて極度に之を國家社會に奉ぜしめんことを期す。

7 教化運動の擡頭

社會主義思想の進展は上述した如く政治的經濟的部面に於て反社會主義運動の擡頭を刺戟したと同時に、白色倫理化運動の發生を促した。既述した國家主義團體の何れもが國粹主義乃至は國家主義の題目を表面に押立て、社會主義運動阻止の爲めの實行運動に携つたに對し、教化團體は、表面左様な題目を掲げることはしないで、例へば修養團に於けるが如く「流汗鍛鍊同胞相愛の二大主義に基き同志相提携して各自修養を圖り社會の風教を矯正し以て皇國に貢獻する」てふ倫理的的目的を持つて生成した。修養團の此の目的は次の「誓願」に於て一層明瞭にされる如く、立派に社會主義反對、資本主義擁護の目的に沿ふものであつた。

修養團の誓願

- 一、同胞相愛 人よ醒めよ、醒めて愛に歸れ、愛無き人生は暗黒なり、共に祈りつゝ總ての人と親しめ、我が住む郷に一人の争ふものなき迄に。
- 一、流汗鍛鍊 人よ起てよ、起ちて汗に歸れ、汗なき社會は墮落なり、共に祈りつゝ總ての人と

働け、我が住む里に一人の怠る者もなき迄に。

従つて、修養團は、創立されたのは明治三十九年二月であつたが、社會主義運動が急鍊な發展傾向を示す様になつてから、政府、資本家、政黨の協力を得て、一層進展した。

代表的教化團體の運動は何れも主に此の時期に發祥し、それ以前から存在して居た團體も亦、此の時期に於て根を張つた。次に代表的なもののみについて、發生した順に名稱を並べてみよう。

中央報徳會（明治三十八年十一月）

修養團（同三十九年二月）

斯道會（同四十五年七月）

大東文化協會（大正三年二月）

大日本奉公團（同三年九月）

乃木講（同四年）

- 國士館（同六年二月）
- 希望社（同七年）
- 働く會（同年七月）
- 國風會（同九年十一月）
- 皇國修養會（同十年）
- 奉仕會（同上）
- 帝國文化協會（同十三年）
- 大日本國民思想善導會（同上）
- 國本社（同上）
- 大日本護國會（同十四年）
- 金鷄學院（同十五年）
- 勸皇聯盟（同上）

大日本殉國會（同上）

日本魂聯盟（同上）

明德會（昭和二年）

右の諸團體のうち、國本社並金鷄學院——實際には學院關係者を中心に創立された國維會の運動として表はれる——は最近所謂官界、實業界、華胄界に隱然たる勢力を扶植するに至り、本來の目的たる思想教化の線から次第に遠のいて、政治的社會的勢力を形成しつつあるが、次にこの兩國體の發生事情を簡單にみておこう。

國本社 國本社の前身は興國同志會であるが、興國同志會は大正九年、社會主義思想が急激な發展をとげた當時、學生思想團體のうちでも最も活潑な活動をなしつつあつた帝大新人會に對立して創立されたものであつた。この運動は更に竹内賀久治氏の奔走によつて擴大發展し、名稱を國本社と改め、平沼男を顧問に機關紙「國本」を發行して日本主義の鼓吹に努めた。然るに偶々大正十二年の大震災に會ひ、平沼男は山本内閣に司法大臣と

して入閣したが、當時宣布されたる「國民精神作興」の詔勅中に國本の二字を拜するに及んで深く感激するところあり、下野の後自ら進んで國本社の會長となり國本運動に専心するに至つた。其後國本社の勢力は著しく伸張し、滿洲事變前後よりファツシズムの思潮が進展するに隨ひ、その存在は愈々政治的社會的勢力を増大するに至つた。

金鷄學院 安岡正篤氏は大正八年帝大出の少壯學徒で、早くより論語を研究して、孔子主義をかざして精神運動を主唱した。安岡氏が大學寮、行地社から分離したことは全く安岡氏のかゝる精神主義が大川派の××的實行主義と相容れなかつたが爲であつた。直接的動機をなしたものは安田生命事件、宮内省怪文書事件に絡まる大川派、北派の對立であつたが、國維會の機關紙「國維」に於て述べられて居る安岡氏の思想——「日本主義とは何ぞ、曰く言ひ難し、それは論ず可きものに非ずして體得すべきものである」——から觀れば、大川、安岡の背馳は當然のことであつたことが理解される。

金鷄學院は安岡氏が行地社から分裂してから、彼の支持者であつた酒井忠正伯の邸内に

彼の理想とする松下村塾、藤田東湖の塾を再現せしむる意圖を以て創立された。かくて彼の影響力は漸次官界、華胄界に伸展し、斷然たる支持と信頼を博し、更に昭和七年一月、吉田茂、松本學、後藤文夫氏等進歩的新官僚と共に國維會を創立するに至り、その色彩は國本社と同様多分に政治的社會的濃度を加へ、隱然たる勢力を形成するに至つた。神野信一氏によつて結成された、石川島自彊組合を主盟とする日本産業労働俱樂部が、金鷄學院と密接な關係にあり、安岡氏を以てその最高指導者とせる點は注目されねばならぬ。

8 愛國學生運動の擡頭

我國社會主義運動發展の初期に於て、インテリゲンチヤの果した役割は大きかつた。デモクラシー、社會主義思想の紹介宣傳は無論殆んど學者、學生によつてなされたし、實際運動に於ても、社會運動の初期に於ては、殆んど之等インテリゲンチヤがその指導に當つた。かくて、當時學校といふ學校に思想研究團體があつた。中でも最も著名なのは東京帝大

の新人會、早稻田大學の早大文化同盟（後の早大社會科學研究會）等であつたが、慶應にも、立教にも、明治にも、東京外語、等にも、社會科學の研究團體が生れた。

愛國國家主義學生運動は全く之等の社會主義思想團體と對立して結ばれたものであつた。従つてその運動も、社會主義反對、阻止の爲めの——暴力的運動に表れる位のものであつた。次に最も著名なもののみを摘記してみよう。

帝大七生社（大正十四年二月創立、上杉慎吉、松岡平市、杉木吾一）、帝大日ノ會（大正十四年創立、笠木良明、綾川武治、古閑潔）、早大國防研究會（大正十五年六月創立、青柳篤恒、後藤辰夫）、早大潮の會（大正十一年十二月創立、松永材）、慶大國防研究會（昭和五年一月創立、新館正國、天川勇）、京大猶興學會（大正十五年四月創立、石田眞平）、五高東光會（大正十一年四月創立、八波則吉）、拓大魂ノ會（大正十二年創立、平田九郎）、日大國司會（昭和四年十一月創立、武藤賢、立田勇雄）、明大興國同志會（昭和四年十一月創立、赤神良讓、石井勇）

備考 括弧内人名は團體の中心人物

第五節 後期Ⅱ恐慌期に於ける運動

1 國家主義社會運動のファツシズム化

「云ふまでもなく、資本主義社會は一つの矛盾の體系である。従つて資本主義の發展は、その中に含まれてゐる一切の矛盾の發展に外ならない。資本主義的生産は、無秩序無計畫性のうちに出来るだけ大きな利潤を獲得すべく資本は躍動する。この利潤獲得のための資本の躍動は資本の集中となつて現はれ、獨占的金融資本支配の時代を作り出す。この獨占的金融資本の時代は、また帝國主義の時代であり、戦争の危機の時代である。かゝる資本の高度なる發展は生産の技術的進歩なくしては行はれない。この生産の技術的進歩は失業の機會を増大し、労働者は労働條件の劣悪化に伴ふ生活水準の極度の低下、更らに不斷の失業群への轉落、それに大資本に壓迫された中小商工業者の窮迫と

倒産によるプロレタリア化、こゝに刻々と社會的動搖と不安を増す。この時中間社會層は、國民主義的な超階級的第三權力に依る現状打破を希求する。こゝにファツシズムの勃然たる擡頭の機が醸成されるのである」(「日本労働年報」第一輯、第二章 日本に於けるファツシズムの發展)。

日本に於ける愛國運動・國家主義運動がファツシズムとして規定されるに至つたのは、正しく右の如く、資本の獨占的寡頭支配が進展し、その必然の結果として恐慌が現れ、中間層の急激な没落傾向がみえ出してからのことである。中間層が没落傾向にある時期に於て労働階級の狀態がどんなになつていつてらうかといふことは殊更説明の要もない筈だ。

かくて、従來單なる民族主義的・排他的・國粹的スローガンを掲げてゐた國家主義運動は、そのまゝでは當然大衆の支持をうる事が出来なくなつた。即ち、國家主義運動は從來の共產主義排撃のスローガンと共に資本主義打倒乃至は修正のスローガンを掲げねば進めない程に、客觀的條件が進んできたのである。

軍閥・官僚内部に於て急進的革新運動が表れてきたのも實にこの時期に於てであつたが、それは言ふまでもなく、階級没落過程に於て必然に起こるべき現象だつたのである。中間階級の中堅として、明治以來政治的に社會的に資本の代表と同列に、否むしろそれより優位な地位にあることを自信してゐた軍閥・官僚は、資本の制肘が加重されるにつれ、反撥の力を増していつた。

かくて、軍閥・官僚の内部には不平と不満が増大し、それは次第に反資本主義的色彩を表すに至つた。

ロンドン條約による軍備縮少とそれに絡まる所謂統帥權干犯問題は遂に軍部をして憤激せしむるに至り、軍部内の少壯革新派をして一層急進化せしめた。而して、この傾向は、その後、萬寶山事件、中村大尉事件、滿洲事變等が相亞いで頻發し、國民の戰時的愛國熱が次第に高まるにつれ、一層増大されていつた。

かゝる國家主義思想の進展は、無産階級運動の分野にも影響し、無産政黨、労働組合か

らの轉向を促したが、この轉向派は多く國家社會主義に據つた。かくて大正七、八年頃それが高島、上杉氏等によつて首唱された當時に於てはサンチカリズムの思想に押されて一顧だもされなかつた國家社會主義の運動は、この時期に於て急速に進展した。

かくて、我國國家主義運動は五・一五事件前後に於いて最高調に達したが、齋藤内閣の出現——既成政黨の沈黙——インフレーションの進行——經濟界の小康現象の過程は、國際關係の一時的安定化と共に、國民の戰時的昂奮を消却せしめ、資本の逆襲となつて現はれてきた。かくて、經濟的基調を有せず、單なる復古主義に出發した國家主義運動は、必然に衰頹の傾向をみせてきた。

2 急進愛國黨並に急進愛國労働者總聯盟の結成

初め國家社會主義を指導理論として出發した建國會は高島、上杉氏等の死後全く社會主義的色彩を失ひ單なる反動團體と化したことは前述の如くであるが、書記長津久井龍雄氏

は建國會のかゝる傾向に嫌らず、赤尾氏と分れ、昭和四年の初め高島門下の矢部周、神永文三、小栗慶太郎氏等と共に雑誌「急進」を再刊し、同七月建國會の中堅勢力たりし福島佐太郎、伊知地義一、長澤九一郎氏等と共に急進愛國黨を結成したが、その後労働運動の分野に進出し、同年六月急進愛國労働者總聯盟をおこした。その綱領・主張として掲げたところは次の如くであつたが、實際活動に於ては労働組合運動の妨害程度以上に出でなかつた。

綱 領

- 一、本聯盟は天皇中心主義の旗の下に忠良なる全日本労働大衆の日常の利害を最も忠實に代表し之が擁護と伸張とを期す。
- 一、本聯盟は労働者團結の威力によつて非國家的資本主義の徹底的改革を斷行し、以つて搾取なき國家の確立を期す。
- 一、本聯盟は労働者解放の擬裝の下に國家の存立と發展とを拒否する一切の賣國的労働運動の克服を期す。
- 一、本聯盟は國際的プロレタリアとしての日本の地位を自覺して國內對立の掃蕩と相俟つて國際的

大進出の政行を期す。

主張

一、國際労働會議反對 一、國家的労働組合の團結權、罷業權、團體協約權の確立 一、八時間労働制確立 一、失業、傷害、老廢労働者の生活の國家保障 一、最低賃銀制の確立 一、完全なる労働法の獲得

この愛國労働者總聯盟は、昭和七年津久井氏が大日本生産黨に合流するに及んで同黨支持團體として之に解消した。

3 日本國民黨の結成

普通選挙の實施——無産政黨の進出は、國家主義政治運動の組織化を促した。第一次普選の施行された翌年、昭和四年五月長野に、信州皇民黨なる地方政黨が結成されたが、之を契機として愛國團體によつて全國的日本主義政黨の結成が企圖され、同年十二月遂に日本國民黨の結成をみるに至つた。國民黨の掲げた政綱は

- 一、一君萬民の大義の徹底と君民同治の政治的大本の確立を期す。
 - 一、財産土地の無制限的私有に對する限度制の確立を期す。
 - 一、重要生産家の國家的統一を期す。
 - 一、階級的組織を改革して國民生存權の確立を期す。
 - 一、法制及税制の根本的改正を期す。
 - 一、教育制度の根本的改革と國民信念の統一激成を期す。
 - 一、軍備の徹底的整理充實を期す。
 - 一、農民労働者及小市民大衆の生活權の擁護を期す。
 - 一、道義的外交を以て國家生存權の國際的確立と有色人種の世界的解放を期す。
 - 一、東西文明を融合統一し、日本文化の世界的開顯宣布を期す。
- といふにあり。頭山滿、内田良平氏を顧問とし、寺田稻次郎(執行委員長)、八幡博堂(書記長)、鈴木善一(書記次長)、西田税(統制委員長)、津田光造、長野朗氏等を以て首腦部を構成しその將來はかなり發展性をもつものと見られてゐた。ところが、結黨後間もなくして寺

田、八幡兩氏の間に意見の對立が生じ、その結果先づ寺田氏去り、次いで宮内省の怪文書事件で西田氏亦脱黨する始末に、見るべき活動もなせず、昭和六年内田良平氏を中心に日本生産黨が結成されるに至り之に合流した。尙血盟團事件の小沼正、菱沼五郎、川崎長光、黒澤大二諸氏はこの日本國民黨の青年分子として活動してゐた。

4 愛國勤勞黨の結成

之より先、行地社から分れた中谷武世、綾川武治氏は、天野辰夫氏等と共に昭和二年全日本興國同志會を結成してゐたが、日本國民黨の結黨前後に於いて、更に高島一統と稱せられる矢部、小栗、神永、津久井氏等と提携し、日本主義單一政黨の結成を企圖し愛國大衆黨組織準備會を組織した。此の準備會は天野氏の財政的負擔と中谷、津久井氏等の奔走で遂に結實し昭和五年二月愛國勤勞黨として結黨されるに至つた。然るに之亦結黨後幾ばくもなくして幹部間に對立を生み、天野、中谷氏等の獨斷的態度に嫌らざる津久井、口田氏

先づ去り、次いで矢部氏脱退し、綾川、神永の諸氏亦諸種の事情から次第に黨との關係を消極化し、中谷氏等亦滿川龜太郎氏等を通じて日本國民社會黨準備會（新日本國民同盟の前身）に合流するに至り、その存在は殆んど有名無實な状態に陥り、その後、同黨の中堅として活動してゐた前田虎雄氏、並に委員長天野氏が何れも神兵隊事件に連座して檢擧されるに至り、自然消滅の形となつた。尙愛國勤勞黨の綱領は次の如くであつた。

- 一、吾黨は天皇と國民大衆との間に介在する一切の不當なる中間勢力を排撃し、一君萬民君民一家の大義に基き搾取なき國家の建設を期す。
- 一、吾黨は天皇政治を徹底し個人主義を基調とする諸般の組織に根本的改革を加へ、産業大權の確立によりて全産業の國家的統制を期す。
- 一、吾黨は勤勞日本の實現を意圖し、農村勤勞者、都市勤勞者、諸海上勤勞者の利害の調和を期す。
- 一、吾黨は資本主義の傀儡たる特權政黨と國性を無視せる無産政黨とに鋭く對立し、之が克服を期す。
- 一、吾黨は日本民族の世界的使命を高調し人種平等資源衡平の原則の上に國際正義の確立を期す。

5 全日本愛國者共同闘争協議會

かかる間に社會的諸情勢は著しく進展した。濱口内閣によつてなされたロンドン條約（昭和五年）は軍部革新派の大急進化を促し、同じく濱口内閣が強行した緊縮政策——昭和四年の金解禁準備期を経て、五年の解禁後に於いて強行され、六年には遂に官吏減俸まで行はれた——は、殊に中間階級以下の社會層の生活を極度に窮迫せしめた。かかる傾向は我國國家主義運動の大衆化に與つて力あつた。

全日本愛國者共同闘争協議會（略稱「日協」）はかかる情勢の下に於て結成された。これは初め行地社の狩野敏氏によつて提唱され、日本國民黨（八幡博堂、鈴木善一、奥戸足百）、建國會、急進愛國黨、急進愛國労働者總聯盟（津久井龍雄、伊地知義一）、國民戰線社（馬場國義馬）の参加を以て昭和六年三月成立をみたが、結成早々東京に「亡國議會××民衆大會」を開いて當時開會中の議會に代表をおくつて決議文を手交する等、活潑に活動を開始し、其の

後「亡國政黨抹殺大演說會」の開催を機に（四月）之を恒常的組織たらしむべく役員を決定し（建國會は此時より離脱した）、同五月一月より機關紙「興民新聞」を發刊するまでに至つた。日協はかくて

- 一、我等は亡國議會政治を覆滅し天皇親政の實現を期す。
- 一、我等は産業大權の確立に依り資本主義の打倒を期す。
- 一、我等は國內階級對立を克服し、國威の世界的發揚を期す。

との綱領を掲げ、演說會、示威運動等によつて、滿蒙獨立運動の強調、對支積極外交等の對外硬運動をなすと共に、議會否認、財閥腐敗の國內改造のスローガンを掲げて相當活潑な活動振を示したが、何より日協の果した最も大きな成果は、之等のカンパニアを通じてそれまで對立状態にあつた國家主義運動の三派——玄洋社系（黒龍會、浪人會系）、猶存社系、經綸學盟系（高島、上杉系）——を統一的傾向に向はしめた事であつた。

日協の運動には右の如く相當みるべきものがあつたが、構成團體の變動によつて之は約

一年程にして解散の止むなきに至つた。その間機關紙「興民新聞」は六年十月號から、日協から獨立した「興民新聞社」に移され、行地社の狩野敏氏がその代表者となつてゐたが、昭和七年四月神武會機關紙「日本」に「發展的解消」をなした。

尙日協は、その行動隊として狩野敏氏を隊長、奥戸足百、伊地知義一氏を副隊長として日協前衛隊を組織したが、小沼正、菱沼五郎、川崎長光、黒澤大二氏等も當時日本國民黨より之に参加した。

6 大日本生産黨の結成

黒龍會の本質については既述せる通り、それははじめ單なる國粹主義・民族主義の領域を一步も出でないものであつたが、叙上の如き社會情勢の變化は必然にその方向轉換を促した。大日本生産黨は、黒龍會のこの轉換方針の政治的表現主體として結成されたものであつた。

生産黨は昭和六年六月大阪に於て結黨式をあげ、同年十一月東京赤坂三會堂に於て第一回大會を開催したが、結黨當初に於ける同黨の指導方針は次の主義、政綱に於てみられる如く未だ全く國粹主義に因るものであつた。

主 義

一、大日本主義を以て國家の經綸を行ふにあり。

政 綱

- 一、欽定憲法に遵ひ、君民一致の善政を徹底せしむること。
- 二、國體と國家の進運に適合せざる制度法律の改廢を行ひ、政治機關を簡易化せしむること。
- 三、自給自足立國經濟の基礎を確立すること。

尙第一回大會に於ける參加團體は次の十八團體で、日本國民黨も此の大會に於て生産黨に合流した。(その結果日本國民黨の機關紙であつた「改造戦線」は生産黨の準機關紙として併合された)

黒龍會、明德會、回天時報社、日本國民黨、大日本青年黨、本地日本同盟、大阪同仁會、

大阪北濱自治會、大阪印刷職工組合經親會、大阪市電自動車親友會、日本光風會、洛北青年同盟、公德會、京都市電自動車組合、古神道實行團、神州護國黨、三木組、興良會
然るにその後、七年一月津久井氏一派の急進愛國黨が之に合流し、更に大衆黨長野縣聯合會の秦數馬氏、大阪の陸軍勞働組合、九州高尾坑の立野、佐々木氏等の一派、大阪の堂前孫三郎氏、横濱自治革新會等が相次いで入黨合流するに至り、從來の黒龍會にみられた封建的國粹主義的事大主義は、次第に國家社會主義的色彩を加味し、黨の運動を一步前進せしめた。中でも、津久井氏一派の合流は生産黨の傾向を著しく急進化せしめた。

7 神武會の誕生

行地社の大川周明博士は、前述せる如く、大學寮の當時から、國內改造の斷行は、××革新派を中心としそれに民間××分子を加へた××××より外なし、との意見を堅持し、それ故に××との緊密なる提携維持に主力を注ぎつゝあつたが、滿洲事變以後急激なる國

家主義思想の擡頭を觀て、遂に大衆的政治運動への轉換を企圖し、七年二月犬養内閣の下に於て行はれた總選舉を機に、菊池武夫中將、實業家石原廣一郎氏、元關東軍參謀で××××事件で止めた河本大作大佐等と共に神武會を結成した。行地社は無論神武會に「發展的解消」を遂げ、その機關紙「日本」も七年四月から神武會機關紙として提供された。

神武會は「神武建國の精神を發揚し、誠忠を皇室に誓ひて神聖なる國體を無窮に護持し天業を四海に恢弘するの覺悟を堅固にして先づ有色民族の解放指導に任じ、更に世界の道義的統一に向つて勇往邁進す」との主義を掲げ、「神武會は政黨に非ず、國民全體の力を以つて現存勢力を×し、國民全體の力を以つて建設に當らんとする目的の下に國民を糾合動員せんとするものであり、他山の石としてレーニン、ムツソリーニ、ヒットラーに範をとり、革新の範圍をロシアの右傾、ドイツの左傾に標準する」との立場をとり、總選舉に於ては全國的遊説を行ふと共に新聞廣告によつて財閥、既成政黨排撃の主張を強調し、七年四月下旬大川博士を會頭とし陣容を整備してより、愈々活潑なる活動を開始した。

かくて神武會は國家主義運動の中心勢力として大いに爲すところあらんと觀られたが、五・一五事件によつて大川會頭を奪はれ、又それまで同會の財政的方面を負擔してゐた石原廣一郎氏が次第に遠ざかり、××との關係も稀薄化するに至り、勢ひその活動は困難となるに至つた。

8 日本社會主義研究所

歐洲大戰後、國際關係が一應安定するに及び、排外主義的愛國主義的昂憤は、漸次國民から消失したが、その反面に於いて、資本主義の高度化とそれに伴ふ慢性的經濟恐慌の襲來・發展の爲めに、勞農階級の窮乏化は益々加はり、階級對立は尖鋭化し、勞働爭議・小作爭議の波は次第に高まりつゝあつた。

かくて従來の國家主義團體はそのままでは遂に資本家の便衣隊的存在となり了はらんとする状態であつたが、茲に高島素之、上杉慎吉氏等の大衆社（大正七年）、經綸學盟（同八年）

の國家社會主義運動が生れてきた。然し、我國思想界はサンデカリズムによつて風靡されてゐたため、之は殆んど顧みられずに終つた。

しかるに、滿洲事變前後から極東の政局が險惡化するに及び、再び國民の愛國的昂憤は高まり、無産階級運動はあげて不振状態に陥るに及び、國家社會主義は再び擡頭してきた。然しそれは當時、未だ何等體系づけられたものではなかつたため、その實踐に於ては、在來の反動國粹團體と何等擇ぶところなき状態にあつた。

日本社會主義研究所が創立されたのは昭和六年九月であつたが、國家社會主義はこの研究所に於いて一應體系づけられた。この研究所は、松延繁次氏等行地社の一部、石川準十郎、津久井龍雄氏等高島系の人々及び社會民衆黨の赤松克麿氏一派によつて設立されたが、創立の翌月十日から機關誌「日本社會主義」を刊行し、發刊の辭に於て「我等の『日本社會主義』とは、日本に行はるべき社會主義の謂ひである。我等は、日本に行はるべき社會主義は國家社會主義ならざるべからずと信ずる。蓋し我々は、國家社會主義こそは、

近世社會主義の理論的及び實踐的發展の歸結であり、日本民族共同精神の歸結であると信するからである。而して出来るだけ急速にこれを実現せしめんと欲するものである……」と宣言し、一、日本の改造、二、天皇制の徹底、三、資本主義の撤廢、四、統制經濟の樹立、五、國民的平等、六、有色人種の結合、等を内容とする十ヶ條の綱領を掲げ、國家社會主義理論の確立と、國家主義團體間の連絡統一の爲めの機關として活動した。

9 日本國家社會主義學盟の誕生とその改組

日本國家社會主義學盟は昭和七年四月「端的に言へば英國社會主義運動に於ける『フェビアン協會』の如き役割を果さんとする」意圖のもとに左の如き綱領を掲げて創設されたが、役員の顔振に於てもみられる如く之は日本社會主義研究所の延長擴大されたものとみて差支えない。

綱 領

- 一、本學盟は國家社會主義の理論及び方法を學術的に研究し且之を全國民に徹底せしめんことを期す。
- 二、本學盟は國家社會主義を否定し或は之に背反する一切の思想を排撃せんことを期す。
- 三、本學盟は國家社會主義の實現を目的とする諸運動を支持し極力之を援助せんことを期す。

役 員

▲顧問 下中彌三郎(國民社會黨)、島中雄三(社民黨脱退派)、大川周明(神武會)、▲幹事長 林癸未夫(國民社會黨顧問) ▲常任幹事 佐々井一晁、近藤榮藏、矢部周(國民社會黨)、小池四郎、赤松克磨、平野力三(社民黨脱退派)、山名義鶴(大衆黨脱退派)、津久井龍雄(生産黨)、松延繁次、狩野敏(神武會)、石川準十郎、五十嵐隆(日本社會主義研究所) ▲事務局 主事石川準十郎、今里勝男、藤本正義、田代耕三、別府峻介、五十嵐隆

然るにその後、七年十月頃よりその内部に於て、早くも國家主義と國家社會主義の對立が生じて來た。國家主義派は國家社會主義を以てマルクス主義の修正であり眞正國家主義に非ずと排撃し、一方國家社會主義派は、單なる反動的國家主義に終るべきに非ずと云

ひ、兩者は盛んに理論闘争を展開したが、かゝる理論的對立は、人的結合の不調と相俟つて遂に日本社會主義研究所並に日本國家社會主義學盟の分解作用を導き、七年十二月兩團體は合體改組され、國家社會主義派のみによつて新たに日本國家社會主義學盟が組織されるに至つた。従つて赤松、津久井、松延氏等は學盟より絶縁し、林、石川、近藤、平野の諸氏が新學盟の中心となつた。

かくて新學盟は機關誌「日本國家社會主義」を發行し、國家社會主義理論の研究と、ナチスの研究、紹介等、専ら理論的指導機關としての役割を果してゐたが、八年に入り日本國家社會黨内部に日本主義派（赤松派）と國家社會主義派（日本労働同盟派）との對立が激化するや、愈々實際運動に乗り出し（六月）、同盟より分裂した國家社會主義派を以て日本國家社會主義全國協議會を結成し、學盟を中心として新黨結成の準備を進めた。然るに九年となり、突如新黨準備會内部に資金問題、役員問題等に原因し、石川氏等と近藤、五十嵐氏等との間に對立を生じ、その間石川氏を支持する福田狂二氏等の策動もあり、昭和九

年三月石川氏は齋藤隆衛、三奈島愛一、別府峻介氏等と共に、大日本國家社會黨を結成し、學盟は大日本國家社會主義協會と改稱した。

かくて、一方取り残された形の日本労働同盟派は石川氏等の新黨樹立後間もなく（九年四月二十九日）松谷與次郎氏を「總理」に推し勤勞日本黨を結成した。

10 無産黨の分裂と日本國家社會黨

既に屢々述べた如く、恐慌の深化と共に勞農階級、中間層の状態は益々劣悪化していつたが、それにも拘らず労働組合、農民組合、無産政黨の勢力は一向に進展しないどころか、殆んど行詰り反對に却て沈衰していつた。そしてこの傾向は國際關係の險惡化に隨つて一層助長された。

かくて、無産階級運動の分野から會つては異端視し、侮蔑してゐた國家主義運動へ轉向する者が相次いで續出した。

社會民衆黨書記長であつた赤松克麿氏が日本社會主義研究所の同人として之に参加したことは前に述べたが、昭和七年一月開かれた社會民衆黨全國大會は、同氏の起草になる國家社會主義を内容とする新方針書を決定した。然るに、一方同大會は、労働組合側から提出された三反主義——反資本主義、反共產主義、反ファツシズム——による戦線統一方針をも決定した。この二つの決定はやがて同黨内部に赤松氏を中心とする黨本部書記局、日本農民組合一派の國家社會主義派——赤松氏等は大會後國家社會主義による黨の改組を主張した——と片山哲、松岡駒吉、吉川末次郎氏等労働組合派との對立を激化せしめた。而して同年四月十五日の中央委員會に於いては、六十一對五十二を以て赤松派敗北の結果をみるに至り、敗れた赤松氏等は即時脱黨して新黨組織の準備にとりかゝつた。一方之より先全國労働大衆黨に屬する全國労働組合同盟の今村等、藤岡文六、安藝盛、望月源治、岩内善作の五氏は三月十一日大衆黨執行委員會に對し意見書を提出し、共同戦線黨の揚棄と國家主義的方針の採用を要求してゐたが、四月十一日、社民黨の國家社會主義派と「時局

研究会」を組織し、事實上大衆黨から離脱するに至つた。この研究会には大衆黨側から前記諸氏の外大矢省三、熊本與市、白鳥廣近、山名義鶴の諸氏も参加したが、研究会が結成されて間もなく大衆黨は今村、望月の二氏を統制を亂すものとして除名した。而して五月四、五日に開かれた全國労働組合同盟の中央委員會は亦、七對六で轉向派の敗北に了つた。かくて、赤松、平野、小池、陶山、山元氏等社民黨脱派は、山名、今村、藤岡氏等大衆黨離脱派と提携して國家社會主義新黨準備會を結成した。然るに一方この運動と並行して進められてゐた下中、近藤、佐々井氏等の日本國民社會黨準備會は、この新黨準備會に對して、國家社會主義單一政黨の樹立の希望を傳へ、兩派の綜合準備委員會を開催したが、その結果、黨名を國民日本黨とし、五月二十九日結黨式を擧げる事となつた。然るにこの兩派の合同は、結黨當日の最後の準備會に於いて、黨名、役員割當等の問題で遂に決裂するに至り、國家社會主義新黨準備會のみ單獨結黨式を舉行するに至つた。而して、綱領、主張等次の如く決定した。

綱 領

一、一君萬民の國民精神に基き搾取なき新日本の建設を期す。
主 張

一、我黨は國民運動により金權支配を廢絶し、皇道政治の徹底を期す。

一、我黨は合法的手段に依り資本主義機構を打破し、國家統制經濟の實現に依り國民生活の保障を期す。

一、我黨は人種平等資源衡平の原則に基きアジア民族の解放を期す。

この新黨に参加した團體は次の如くであつた。

日本農民組合、遞友同志會、社會青年同盟の大部分その他社民黨支部の一部、全國勞働關東合同勞働組合、同大阪聯合會の一部、同高知縣聯合會の大部分、九州聯合會の大部分かくの如く日本國家社會黨は、五・一五事件により國家主義思潮の最も高調された時機に於て、非常なる期待の中に出發したが、結黨後に於ける活動は殆んどみるべきものとしてなく、一年も経たぬ間に内部對立——赤松對小池、赤松對平野、等——を來した。そして

それは遂に八年五月遞友同志會の中央委員會に於いて赤松氏が從來の指導方針「國家社會主義を廢棄し、日本主義・全體主義の方針を提示したのを動機として、表面化するに至つた。即ち、赤松氏の日本主義への轉換は遂に遞友同志會を分裂にまで導いたが、之は必然（赤松氏は遞友同志會の會長であり國社黨の黨務長であつた）國家社會黨にも影響し、先づ日本農民組合が支持を取消し（六月二十四日）皇道會に走り、七月二十三日の同黨全國中央委員會に於ては遂に國家社會主義派の退場をみるに至り、八月三日その中心勢力たる日本勞働同盟が分裂するに及び、愈々四分五裂の状態に陥つた。赤松氏を失つたあと日本農民組合に去られた國社黨は茲に又勞働同盟を失ひ、その後幾何もなくして遞友同志會が中野正剛氏の下に走るに及び、その勢力は殆んど取るに足らぬ存在となつた。かくて、殘留派は神武會等と提携して愛國々民會議の提唱をなし、愛國團體戰線統一の運動に専心しつゝあつたが、「日本國家社會黨」の名稱は、戰線統一のための障害となるといふので昭和九年度大會に於て、黨名を愛國政治同盟と改稱した。

一方脱退したる赤松氏等は日本通信従業員組合（選友同志會分裂派）を率ひ、生産黨より離脱したる——實際には統制を亂すとの理由で除名された——津久井龍雄氏と提携し、日本主義文化運動に専心することを宣明し、國民協會に據り、機關誌「國民運動」を創刊したが、その後、政友會を脱退せる松岡洋右氏の政黨解消聯盟の運動と提携するに至つた。尙日遷は津久井氏の率ひる大日本青年同盟と共に青年日本同盟を組織した。

11 日本國民社會黨準備會（新日本國民同盟）

前記國家社會主義新黨準備會が出来ないまへ、昭和六年十一月社民黨の下中彌三郎氏は、佐々井一見、滿川龜太郎、杉田省吾、高橋忠作氏等と共に、（一）大權の發動による經濟統制、（二）私有財産の徹底的制限、（三）搾取によらざる後進國開發、（四）勞働力の全國的動員、の綱領を掲げ經濟問題研究會を組織した。然るにその後この研究會を中心に新黨樹立の計劃が進められ、之より先大衆黨の支持を取消し右翼轉向の態度を表明してゐた

日本勞働組合總聯合（阪本孝三郎、高山久蔵、森榮一、皆川利吉、近藤榮蔵の諸氏）の外、前記愛國勤勞黨、日本村治派同盟（津田光造、村井弘信氏等）、大衆黨京都聯合會の神田兵三、半谷玉三氏等の支持を得て昭和七年一月二十五日正式に日本國民社會黨準備會第一回準備會を開くに至つた。後この準備會は赤松氏一派の國家社會主義新黨準備會に働きかけ、兩派を打つて一丸とする「國民日本黨」の結成を圖つたが、前記の如く結黨當日に至つて交渉決裂した結果、赤松氏等の新黨と別個に一大國民的政黨組織の運動を開始することとなり、結黨までの暫定組織として、新日本國民同盟を結成し、左の如き聲明書を發表した。

〔聲明書〕 祖國日本は今文字通りに未曾有の非常時局に直面してゐる。この非常時難を打開して國運民命を輝ける明日にまで導くべく、我等は同志と共に日本國民社會黨準備會を形成し、更に社會民衆黨並に全國勞農大衆黨脱退派の諸勢力を糾合して純乎たる國民の黨としての國民日本黨の結成に努力し來つたのであるが、不幸にしてこれ等社會民主主義の轉向派がその心事においても其思想に於ても依然として從來の似而非無產黨的

舊態を脱し得ざるの事實を發見し、これ等の諸勢力と提携する事の無意義を痛感したるを以て、此の種似而非無産黨的諸勢力を基調として新黨を組織するの意圖を全く斷念し、こゝに「新日本國民同盟」を結集して廣く天下同憂の士と共にこの非常時の國運を負擔せんとするものである。

12 新日本建設同盟、社會自由黨

之より先、勞農大衆黨所屬代議士松谷與次郎氏は、昭和六年末議員視察團と共に渡滿し、滿洲事情を視察したが、その結果同氏は從來の帝國主義戰爭反對の主張を放棄し「滿蒙問題に關する意見書」を發表するに至り、遂に昭和七年八月大衆黨より脱退し、一、國家統制經濟の確立、一、議會政治の徹底的改革、一、日滿經濟ブロックの確立、一、一君統治の東洋國建設、一、國家主義勞農組合の創設、を標榜し、新日本建設同盟を結成した。然るに之は、全國勞働關東合同勞働組合の極く一部分の勢力を除き何等の組織的勢力も

たなかつたため、結成早々國家社會黨への合流が傳へられたる如き始末であつたが、同年末遂に安達謙藏氏の國民同盟に参加した。

之と相前後して、舊勞農黨支持團體日本勞働組合總評議會關西地方評議會の青柿善一郎、小田孝、飯石豐市氏等は、昭和七年三月國家社會主義を基調として大阪に社會自由黨なる地方政黨を起したが、間もなく、その一部は（小田、飯石）國家社會主義學盟と、他の一部（宮本純一氏等）は神武會と提携するに及び、有耶無耶の裡に解消してしまつた。

社會自由黨の政策

- 一、國民外交の確立
- 一、財閥政治の打倒
- 一、反動恐怖獨裁政治の排撃
- 一、金融機關の統制
- 一、國民生活を基礎とする産業の保護と統制
- 一、滿蒙利權の國民的確保
- 一、選舉公營
- 一、投票機關の廢止

13 國難打開聯合協議會（略稱「國協」）、國體擁護聯合會の誕生

五・一五事件前後に於て最高頂に達した、我國々家主義運動は、その後次第に退嬰的傾向に向つたが、この傾向は、國家主義團體相互間に結合の氣運を促進せしめ、國難打開聯合協議會、大同俱樂部、國體擁護聯合會（註）等の結成を促した。

註 國體擁護聯合會については別項「現勢篇」を参照。

國難打開聯合協議會は昭和七年六月、日本國家社會黨、神武會、大日本生産黨、勤皇維新同盟（永井了吉氏）の四團體によつて結成され、「新滿洲國即時承認」、「國民生活窮乏打破」のスローガンを掲げ、新日本國民同盟其の他の國家主義團體にも参加を勧誘した。かくて「國協」は、國家主義團體の恒久的協同體として、共同闘争を通じて戦線の統一まで導くべく企圖され、事務所を神武會本部に設置し、明糖脱税問題、司法官赤化問題に對し糾弾闘争を行つたり、又國際聯盟脱退促進運動を起こしたりして、一時相當活潑なる活動をなしつゝあつたが、構成團體相互間に於ける人的關係の複雑化から、一時参加の態度を示した新日本國民同盟は間もなく離脱し、生産黨も有志的形に於ける参加となるに至り

一年も經ずして殆んど有名無實な存在となつた。

然るにその後、國家主義退潮の傾向は益々顯著となり、戦線統一の機運は再び表れてきた。中にも、昭和八年七月の分裂以後支持團體の殆んど全部を失つた國社黨殘留派は最も積極的に戦線統一の必要を叫び、執拗に愛國々民會議の提唱をなしてゐたが、之は遂に昭和八年十二月永井了吉、松延繁次氏等によつて提示された愛國一致運動協議會（略稱「愛協」）の結成によつて結實した。愛協には國社黨、神武會、勤皇維新同盟の外生産黨、國體擁護聯合會の一部も参加した。

14 大同俱樂部

大同俱樂部は前記「國協」と並行し、「國協」の目的する戦線統一の促進を期して、國協参加團體の外數團體の青年層によつて、昭和七年十一月創立された。創立當時に於ける委員（世話人）は、

鈴木善一、影山正治(生産黨大日本青年同盟)、鈴木欽、平田九郎、柳原文史郎、川俣孔義、大石茂(神武會)、藪本正義、菊池一雄(國社黨)、大森一廉(維新同盟)、中山裕(洛北青年同盟)、坂本八郎(日本社會主義研究所)、杉田省吾、西郷隆秀、吉元俊熊、藤村又次郎(無所屬)

以上十六名で、五・一五事件農民決死隊員温水秀則君の國民葬、國際聯盟退促進運動等を通じて、各團體間の人的融合を圖りつゝあつたが、昭和八年七月神兵隊事件によつて世話人の多數が之に連座して檢舉されるに至り、その後遂に自然解消の状態となつた。

第六節 國家主義と農民運動

恐慌の進展と共に、さらでだに過重なる租税と龐大なる負債の壓迫とに呻吟してゐる中小農民は益々窮迫した状態に追ひ込まれた。かゝる農民の經濟状態の悪化は、他方戰時的に高まつた愛國熱と一致して、國家主義に基調する政治的農民團體の發生を促した。

その中最も代表的なものは護國堂、愛郷塾、日本村治派同盟——自治農民協會である。護國堂は昭和五年二月茨城縣大洗に井上日召(本名昭)氏を中心として、日蓮の「唯我

一人能爲救護」の信仰に立ち、又日蓮の「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船にならむ」の三大誓願をその本領と掲げて建立された「修養道場」であつたが、この思想はやがて現實の政治、經濟情勢に對する不滿を増大せしめ、遂に實行運動にまで發展するに至つた。

愛郷塾は大地主義、兄弟主義、勤勞主義、の三位一體的精神生活に基く愛郷精神に出發し、自作農園藝農作、共同組合等によつて農村再建設を期して設立された自營的農村勤勞學校で、昭和四年九月塾頭橋孝三郎氏によつて水戸市外常磐村に開設された。設立の當初に於ては、専ら農村青年の教養教化を兼ね、農本自治の精神涵養といふ目標のみを掲げてゐたので、縣或ひは村當局の援助をも受けてゐたのであるが、その後前記護國堂と同じく激烈な農業恐慌の影響を受けて、建設的な教化運動だけの範圍に止まることが出來ず、急激に急進化して行つた。

日本村治派同盟は、昭和六年末津田光造、下中彌三郎、長野朗、口田康信、村井弘甫、

古谷榮一氏等古いアナキストを中心に、權藤成卿氏の農本自治主義に基いて結成され、七年一月農本聯盟として擴大改組されたが、同じく農業恐慌の影響を受けて急進的政治運動を主張する一派と建設的經濟運動のみに限定せんとする一派との對立を生じ、前者は同四月長野朗氏を中心に和合恒男（長野縣日本農民協會）、宮越信一郎（解放戦線社）、橋孝三郎（愛郷塾）、稻村隆一（全國農民組合新潟縣聯合會）氏等によつて自治農民協會が組織された。（機關紙は「農村新聞」）。

以上、井上日召中心のグループ、愛郷塾及び自治農民協會の三者は相互に連絡があり、理論的には略々權藤成卿氏の農本自治主義に則り、實踐的には井上日召がこれを指導し、學生及び陸海軍軍人の間にも知己を求めて、世間周知の血盟團事件、五・一五事件等の中心グループを結成したのである。

一方、従來指導精神としてはむしろ社會民主主義に近かつた農民組合の中にも、國家主義を採用して、運動の一大轉換を企圖する一派が出て來た。平野力三、稻富稜人、北山亥

四三氏等を中心とする日本農民組合の人々がこれである。（日本農民組合については後述を参照のこと）。尙、最近では、もと全國農民組合の幹部であつた吉田賢一氏（辯護士）が大阪府及び兵庫縣を中心に皇國農民同盟を組織した。

第七節 國家主義的労働組合運動

労働組合運動は謂はば社會運動の本隊であるが、國家主義運動にして労働組合を組織したことは、極めて最近以外にはない。古く、行地社の松延繁次氏は鐵道従業員組合（國有鐵道の従業員の組合）の書記となつて此の組合を統制しようとしたことがあるが、組合は却つて共產黨の勢力が大きくて全く失敗してゐる。赤尾敏氏や津久井龍雄氏も労働者の組織運動に従事したが、それは何れも多くはルンペン的な分子だけで、大衆的な労働運動とはなり得なかつた。

國家主義が大衆的労働組合運動に浸潤したといふ意味で、實に劃期的な意味を持つもの

は、何といつても矢張り赤松克麿（逓友同志會會長）、野口英治（總同盟中央合同労働組合幹部）、山名義鶴、今村等、藤岡文六、安藝盛、望月源治、白鳥廣近、大矢省三、熊本與市（以上何れも全國労働組合同盟の幹部）、飯石豊市、青柿善一郎、小田孝（以上労働組合總評議會の幹部）、阪本孝三郎、高山久藏（日本労働組合總聯合の幹部）等在來の労働運動家の轉向である。この人々の轉向は、無産政黨運動にとつても非常に大きな問題であつた。無産政黨が合同して現在の社會大衆黨が出現するに至つたのは、全くその反動であると言へるのであるが、それは同時に、労働組合運動の分野にも從來の右翼改良主義と左翼マルクス主義との對立以外に全く新しいものを導入したのである。全國労働組合同盟から分裂した日本労働同盟、（及びそれから更に分裂した日本産業軍）、日本労働總同盟から分裂した逓友同志會（及びそれから更に分裂した日本通信従業員組合）並に全日本製氷従業員組合、總評議會から分裂した大阪木材労働組合など即ちそれである。

労働運動に於ける國家主義は二つの方向をとる。急進主義と穩和主義がそれである。兩

者ともに、國家主義を原理とする以上、階級闘争主義には絶對反對であるが、前者は「君民一如、搾取なき新社會」の實現を企圖するといふ方面から、資本主義に對する反對、労働者階級の地位の向上を力説し、後者は國家全體主義、勞資一體主義といふ方向から、産業平和、國家産業の發展に對する労働者の責任を高調する。前述の日本労働同盟——所謂國家社會主義の労働運動は前者であり、日本通信従業員組合——所謂日本主義の労働運動は後者である。しかし、勞資一體主義の最も典型的なのは故神野信一氏の創造した神野式労働運動であると言はねばなるまい。神野氏は日本労働組合評議會（左翼労働組合）の運動に痛憤して、自分の勤務してゐた石川島造船所で乃木講を作り、自彊組合を作つて、終に左翼組合を工場から驅逐した後、浦賀工愛會（浦賀船渠）及び横濱工信會（横濱船渠）と提携して武相聯盟（後日本造船労働聯盟と改稱）を形成し、日本労働組合會議の創立にも與つたが、昭和七年の國家主義運動勃興の機運に乗じて終に組合會議を脱退し、昭和八年五月日本産業労働俱樂部を結成したのである。

日本産業労働俱樂部それ自身の勢力は比較的大きくはないが、それはその結成の準備工作として昭和七年の暮れ造船労働聯盟を中心に總聯合その他の組合を糾合して「國防献金労働協會」を組織し、海軍労働組合聯盟や日本製鐵労働組合聯合會（八幡製鐵）その他就中多くの會社組合に影響を及ぼし、間接には赤松克麿氏等の日本主義労働運動に多くの暗示を與へたのである。その効果は、矢張り神野氏の發意によつて敢行された愛國労働祭に結集された。これはメーデーに對抗する意味を持つもので、昭和八年には愛國飛行機献納式と同時に天長節の當日國防献金労働協會員によつて行はれたが、九年以後は、更に範圍を擴大して、神武天皇祭の當日に日本労働祭として舉行されることになつたのである。

國家主義運動は、次章に述べる様に、一般的には最近頹勢を示してゐるが、この勞資一體主義のみは頹勢どころか益々發展の傾向を示してゐる。即ち前述以外に、東京瓦斯工組合は昭和七年末に分裂して、職場別の小組合が分立するに至つたが、神武會が支部を作つたのみでなく大部分は階級闘争の原理を拋棄し、東京市従業員組合も亦これに倣ひ、最近

では海軍聯盟も明白にその國家奉仕主義を聲明するに至つたのである。

第八節 軍部關係の革新派

軍人關係の團體としては、陸軍に偕行社があり、海軍に水交社があるが、これは何れも單なる社交機關であつて、固より何等政治的背景を有してゐない。又大正十三年に木田伊之助少將等によつて創設された恢弘會なる團體も、主として在郷軍人の思想善導を目的として組織されたものにすぎない。

然るに、昭和五年濱口内閣當時、ロンドン軍縮條約が締結され、それに絡んで統帥權干犯問題が惹起されるに及び、軍部内には非常な不満が醸成され、陸海軍の尉官級によつて「小櫻會」が組織され、將佐官級によつて「櫻會」が結成され、又それまでは單なる海軍豫備役將校の社交機關に過ぎなかつた洋々會等も著しく政治的色彩を表すに至つた。

加ふるに、一方では、經濟恐慌が益々深化するに拘はらず、財閥、既成政黨の政策は徒

らに資本主義的獨占を強化し、利權を漁り、窮民を苦しむるにすぎず、他方では、滿洲事變が勃發して國際的危機切迫するに拘はらず、彼等は尙黨利を國利よりも重く見、國防を輕視し、政黨政治の弊はますます加はつて行つた。こゝに於いて軍部内に於ても國家革新の必要を痛感するもの多く、五・一五事件の如き青年將校を主體とする非常時變の突發を見るに至つたのである。

五・一五事件以後に於いては、滿洲事變と國際聯盟脫退問題とに絡まる國際的事件の要素が國民の軍事的愛國的熱情を刺戟したのと相俟つて、軍部に國家革新の斷行を期待する空氣は國民の間に充溢して來た。

同時に、財閥、既成政黨がこれと同じ意味で軍部を畏れ憚ることも非常なものであり、軍部の御機嫌をとるためなら爲さざるところなしといふ有様であつた。

固より現役軍人は、國防及び軍備に關すること以上に、政治問題に關與するを得ない立前であるが、實は現役軍人は何等自ら活動するを要しなかつたのであつて、在郷軍人なり

或ひは國家主義團體なりは思ふ存分にその意思を表現し、活動したのであると言つてよ
し。

主として在郷軍人を以て會員とする明倫會及び皇道會といふ、二つの有力なる政治團體が結成されたのは、正しくこの國家主義思想の國民的高揚期に於いてであつたのだ。

第三章 國家主義社會運動の現状

—— 頽勢の現状と將來 ——

昭和六年秋の滿洲事變前後から、枯野を焼く野火の様に、我國の社會運動を捲き込んだ國家主義運動は、八年の後半以後に至つてすつかりその勢威を落してしまつた。一時今にも政權を掌握しさうに勢ひ込んでゐた國家主義團體も、大部分は團體の維持そのことにさへ四苦八苦の態たらくである。その理由を數へ挙げたら一にして足りまいけれども、經濟

的には軍需活況や輸出旺盛乃至時局匡救事業の影響を受けて國民生活の窮迫が多少なりとも緩和せられ、又は緩和の希望を抱くに至つたこと、政治的には滿洲事件以後の國際的危機が廣田外交によつて稍々小康の状態にあり、一九三五、六年の軍縮條約改訂の危機も何とか打開の道がないでもない様に思はれて來た一方、政府は凡ゆる手段を盡して急進的社會運動の抑壓に努めたこと、社會的には既成政黨及び財閥も亦この状態に對應して「轉向」の方向を取らうとしてゐること等、たしかに大きな理由であらう。

しかし、國家主義社會運動そのものの持つてゐる弱所缺點自身も亦看過することは出来ない。何となれば、我國の國家主義運動は沿革的に一人一黨的な運動であつて、大衆的基礎に立つたのは僅かに從來労働組合運動の幹部であつた赤松、山名、今村、藤岡、大矢、白鳥、熊本等の諸氏が社會民衆黨或ひは全國勞農大衆黨を脱離轉向して以來のことであるといつても過言ではないのであるが、しかもこれらの幹部は、轉向以後その大衆運動の經驗を十分に新運動の中に生かすことが出來ず、大勢としては相も變らず一人一黨的もしくは

は親分子分的傾向がリードしてゐるのである。國體擁護聯合會とか國難打開聯合協議會とか愛國一致運動協議會とか、いろいろ統一運動も行ははしたが、それは何れもほんの名目だけで、看板だけの統一以上には出ないのである。

統一は先づ措くとして、大衆運動としては單なる觀念的な宣傳や激勵だけではなく、國民の實質的利害を代表するといふことがなければならぬのであるが、どの團體をとつても抽象的觀念的な綱領又は政策をお義理に掲げてゐるにすぎず、具體的な内容を持つものは殆んどないと言つてもよい。その點で、日本労働同盟及び日本農民組合はたしかに部分的であるとはいへ大衆の現實的利害のために運動してゐるのであるが、しかしその運動の範圍で言へば、一般労働組合又は農民組合と殆んど相違はないか、もしくは多くの場合これに劣つてゐるのである。

國家主義社會運動が、國家非常時に際して著るしく軍事的色彩を帯びる場合には、かくの如き弱點は殆んど掩はれてしまふが、そらいふバックがなくて、自分の實力で獨歩しな

ければならぬとなると、弱點は全く赤裸々に現はれる。況んや、國家主義運動がその當初の對立物として目指してゐた左翼社會運動、即ち共產主義的社會運動が優秀な警察力に依つて殆んど壊滅せしめられたとなれば、左翼牽制のために國家主義運動に與へられてゐた資本家の財政的援助も殆んど絶たれてしまうことになるのである。

そこで、運動は無氣力となるか、さもなければブルジョア反對黨——國民同盟あたりとの提携を策しなければならぬといふことになつて来る。皇道會の内部に國民同盟及び明倫會との三派合同が計畫されたこと、選友同志會が中野正剛氏を統令に推戴したこと、勤勞日本黨が松谷與次郎氏を總理に推戴したこと、等はその明白な現はれである。一人一黨的團體が既成政黨や既成政客の便衣隊的存在に還元したことにについてはいふまでもあるま

う。

勿論これで我國の國家主義社會運動が全く駄目になつてしまふといふことは考へられな

い、よかれ悪しかれ、我國には國家主義社會運動が必然に生起しなければならぬ事情が嚴存してゐるのである以上、そしてまた國家非常時なる國際的國內的情勢は決して永久に解消し去つたものでない以上、近い將來には必ずまたフアツシヨの嵐が、急進的國家主義運動の擡頭が来るであらう。現存の國家主義團體の何れがその情勢に適應して成功し得るであらうか。もしくは、現存の群小團體は全てが駄目になつて全く新しい要素が出現するか。それは未知の問題であるが、その邊の情勢に對する基礎知識の一部として、現存の主要な國家主義社會運動團體の輪廓を概略紹介することにしよう。

1 大日本生産黨

生産黨は内田良平氏の黒龍會を中心とし、昭和六年六月二十八日大阪に於て結黨式を擧げた。結黨當時に於ける同黨は從來の國粹的愛國主義から一步も出てゐなかつたが、昭和七年一月津久井龍雄氏の急進愛國黨が合流するに至り多分に國家社會主義的色彩を加味してきた。次の政策は、津久井氏の入黨後間もなく發表された。

政 策

- 政治 一、國體觀念を缺如せる政治家の根絶
- 二、金融寡頭專制政治打破
 - 三、金融財閥の寄生蟲、政、民兩黨排撃
 - 四、國賊共產黨、全協、亞流共產主義黨(全國勞農大衆黨)、社會民主々義黨(社會民衆黨)擊滅
 - 五、國民共存共榮政治の建設
 - 六、大日本主義政權に立つ強硬外交展開
 - 七、滿蒙獨立國家建設促進、滿蒙權益の國民化
 - 八、支那の誘導開發
 - 九、侵略的白人勢力の驅逐、新興亞細亞の建設
 - 十、精銳なる國防機關の充實、賣國的軍縮論排撃
- 經濟 一、亡國的資本主義經濟組織の根本的改善
- 二、生産者立國の國家統制新經濟政策確立
 - 三、我利的金融資本家打倒、金融機關の國家管理

- 四、産業の國家本位的統制
 - 五、勤勞國民大衆の生活保證
 - 六、勞働權の保障、耕作權の確立、居住權の保障
 - 七、生活必需品に對する消費稅撤廢
 - 八、一切の大衆負擔稅の輕減撤廢
 - 九、生活必需品(瓦斯、水道、電氣)供給停止反對
- 社會 一、一國一家主義の徹底
- 二、一切の階級的利己主義排撃、家族的國民道德高揚
 - 三、不合理なる社會的諸制度の撤廢
 - 四、日本の勞働組合法の確立
 - 五、一切の勞働者に對する失業、疾病、災害保險制度の確立
 - 六、誤れる一切の現行爭議調停法の根本的改正
 - 七、施設施設の徹底
 - 八、徵兵其他公務奉仕による失業災害並に窮乏家族保險制度の確立

- 九、教育の機會均等、建國精神に立脚する國民教育の徹底
- 十、宗教、教育の營利化禁壓
- 十一、自主的愛國青年團建設
- 十二、移民政策の確立

かくて、生産黨は労働組合の組織にも積極的に乗り出し、大阪紡織労働組合(天野雅夫)、全國鐵道構内立賣従業員同盟(大林翁太郎)、大阪借家人協議會(藤田進)、大阪合同労働組合(北田勝三)等を組織し、昭和八年二月之等を統一して日本主義職業組合評議會(堂前孫三郎)を結成し、又大阪製材従業員向上會(田實猛)、大阪雜種産業労働組合(田實猛)其他によつて結成されてゐる日本産業労働同盟(榎本佐市)を併せ、又東京海員同盟を結成し活潑な活動を展開した。

然るに、昭和八年七月の所謂神兵隊事件は、生産黨にとつては二重の打撃を與へた。生産黨の中堅分子は該事件の首謀者であつたため殆んどが之に連座して擧げられた。それに

今一つは津久井龍雄、三宮維新兩氏を失つたことである。兩氏共神兵隊事件に對し「直接行動排避」の態度を示したことが原因し、遂に除名處分にあつた。之によつて生産黨は大日本青年同盟を失ひ、産業部主事として同黨の調査部門を一手に引受けてよく活動した三宮氏を失つた。

要するに神兵隊事件は内田良平氏の病氣と相俟つて、生産黨の將來を甚だ悲觀的なものにしたが、八年末頃より漸く陣容の整備を行ひ最近は又比較的活潑な活動をなしつゝある。本部は東京市麴町區永田町二ノ八六、準機關紙「改造戦線」(新聞大、月刊)。役員は左の如し。

顧問 頭山滿、總裁 内田良平、黨務委員長兼財政部長 吉田益三、黨務委員兼組織部長 八幡博堂、總務 萬生能久、小幡虎太郎、松田禎輔、池田弘、吉田益三、立花良介、關東本部書記長 平館信夫、關西本部書記長 柴山滿、山本千一、黨務局相談役 池田弘、齋地盤夫、坂井六輔

尙生産黨では、昭和八年八月、五・一五事件被告の減刑運動を機に、一般愛國運動の犠牲者救援の目的で愛國戦士救援會を結成したが、その役員は次の如くである。

顧問 頭山滿、内田良平、角岡知良、花井忠、細川潤一郎、委員長 八幡博堂、常任委員 井上四郎、永富以徳、林國雄、山本昌彦

救援會は事務所を東京市四谷區新宿一丁目坂井ビル改造日本社（改造機關發行所）内に置き、毎月「愛國戰士救援會報」を出してゐる。

2 神武會

大學寮、行地社を通じて大川周明博士は××との提携に努力したが、滿洲事變の後國家主義思潮の急激な發展に伴つて、大衆運動への轉換を企圖し——だからとて××中心主義を放棄したわけでは無論ないが——菊池武夫中將、元關東軍參謀長河本大作大佐、實業家石原廣一郎氏等の協力を得、昭和七年二月の總選舉を期に神武會を結成した。

××との關係が緊密であること、資本が豊富であること、この二つの條件を具備してゐた神武會は、創立後間もなく國家主義運動の中心勢力を形成するに至つたが、大川會頭が

五・一五事件に連座して檢擧されてからは、石原氏次第に遠ざかり、××との關係も漸次稀薄化する状態に、その運動は次第に沈滞の傾向に向つた。その後は日本國家社會黨（愛國政治同盟）、勤皇維新同盟と共に國難打開聯合協議會、愛國一致運動協議會の結成を提唱し、その中心勢力として各種のカムバニヤを通じて愛國運動戦線の統一を主張してゐる。現在の機關紙「日本」（月刊、新聞半頁大）は行地社の機關紙だつたもので、本部は東京市麹町區内山下町一ノ一東洋ビル内に置く。

主張

一、神武建國の精神を宣揚し、誠忠を皇室に誓ひて神聖なる國體を無窮に維持し、天業を四海に恢弘するの覺悟を堅確にして先づ有色民族の解放及指導に任じ、更に世界の道義的統一に向つて勇往邁進す。

綱領

一、日本建國精神、日本國家の本質、及び國民的理想を闡明し、本來主客を顛倒せる形式的教育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべく皇國的教育組織の實現を期す。

一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を従とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に恢弘すべき皇國的政治組織の實現を期す。

一、一君萬民の國風に基き、私利を主として民福を従とする資本主義經濟の擯取を排除し、國民の生活を安定せしむべき皇國的經濟組織の實現を期す。

役員

會頭 大川周明、總務部長 狩野敏、勞働部長 松延繁次、調査部長 金内良輔、組織部長 片岡氣介、法務部長 宇都宮良久、青年部長 日野月末廣、編輯部長 雪竹榮

3 國體擁護聯合會

國體擁護聯合會は、所謂赤色ギヤング事件——昭和七年十月共產黨員の大森川崎銀行襲撃事件——に續いて起つた一〇・三〇事件——共產黨の一齊檢擧が行はれ、中央部は殆んど壊滅に近い状態に陥らされた——に刺戟され、直接的には司法部内の赤化事件を動機として結ばれた愛國團體の戰線統一機關である。初め、この聯合會組織を提唱したのは政教

社の五百木良三氏で、十二月二日（昭和七年）日比谷松本樓に於て開催された滿洲國侍從武官次長工藤忠氏の歡迎會散會後、五百木氏が中心となり、入江種矩、實川時治郎、増田一悅氏等と共に愛國團體の代表者會議を開き、司法部内赤化事件について各自の所見を述べ合つた結果、今後は國體擁護の立場にたち、日本精神の昂揚を旗印に打つて一丸となり、目的貫徹に邁進しようぢやないかと、申合せが出来たのが、そもそもの初まりであつた。その後二回の協議會の結果、同月十三日正式に聯合會の結成をみたのであるが、その時決定せる常務實行委員は左の如くである。

常務實行委員 五百木良三、入江種矩、小山内大六、須藤理助、齋藤磐夫、松浦市十郎、鹽谷慶一郎、増田一悅、薩摩雄次、鈴木勇、瀨尾榮太郎、實川時治郎、小山田劍南、佐藤慶次郎、津田隆司、高畑正、原藤右衛門、馬場國義馬、深澤源造、金子力三、千々波敏太郎、荒牧退助、小島高踏、鈴木善一、下澤秀夫、田村萬治、佐藤天風、田中七五三、原田政治、林逸郎、角岡知良、平野鐵舟。

この聯合會には規約も、役員も特定されて居らぬが、主として入江種矩、増田一悅兩氏

がその指導に當つてゐる。參加團體は黒龍會、愛國社、明德會、愛國法曹聯盟、大統社等東京市内に本部を有する團體のみならず、全國では七十有餘にも上つてゐるが、終局の目標たる戦線統一といふことは現在の情勢では尙中々困難とみねばならぬ。本部は芝區田村町二、内田ビル内、機關紙としてはない。

4 新日本國民同盟

日本國民社會黨準備會は、赤松克麿氏等社會民衆黨退派と合流し、黨名——國民日本黨——まで決定してゐたのに、結黨式の當日（昭和七年五月二十九日）に至り黨の名稱、役員の振當等で衝突し、赤松派と別個に新日本國民同盟を結成した。

然るに結黨後間もなく財政上の困難に當面し、中心人物であり創設者である下中彌三郎氏去り、中谷武世氏亦去るに及び人的にも行き詰り、愛國勤勞黨、急進愛國黨は離反し、勞働組合總聯合も次第に消極的な態度を示す様になり一時は殆んど有名無實な状態に陥つ

た。

然るに昨年（八年）秋頃から漸く勢力を挽回し、××との關係が××××××××、他方在郷軍人の間に組織をのぼし、總聯合も再び支持關係を復活するに至り、國家主義運動が擧げて不振状態に陥らされてゐる中に地味ながら比較的健實な發展を示してゐる。毎月二回「錦旗國民軍」（新聞大）を發行する外月刊雜誌「錦旗」を發行してゐる。本部は東京市中野區昭和通一丁目七。盟誓、綱領、役員左の如し。

盟 誓

建國の本義に基き搾取なき新日本の建設を誓ふ

綱 領

- 一、我等は合法的國民運動により金權支配を廢絶し以て天皇政治の徹底を期す。
- 二、我等は資本主義機構を打破し國家統制經濟の實現により國民生活の確保を期す。
- 三、我等は人種平等資源衡平の原則の上に新世界秩序の創建を期す。

役 員

△中央總務委員長 佐々井一梟、△中央常任總務委員會委員 國際部長滿川龜太郎、組織部長・機關紙部長神田兵三、青年部長皆川利吉、財務部長・企劃部長野本義松、教育部長神永文三、△本部書記局委員 佐々井一梟、滿川龜太郎、野本義松、神田兵三

5 明倫會

明倫會は皇道會と相並んで、在郷軍人を包容する特異な團體であるが、皇道會に比較すると高級將官が會の中心を成し、國家主義團體の中では貴族的地位を占めてゐる。昭和七年初頭から田中大將を中心として創立計畫が進められてゐたが、同五月一日左の主義綱領を發表した（創立大會にて多少修正されたもの）。

主義綱領

- 一、皇祖肇國の神勳を奉戴して天壤無窮の我國體を尊重し忠君愛國及献身奉公の至誠と道義的觀念との普及徹底を期す。
- 二、既成政黨の積弊を打破して天皇政治の確立及國家本位の政治の遂行を期す。

三、退嬰追従外交を排して自主と正義とを基調とする外交を斷行し以て國威國權の宣揚發展を圖り且つ大亞細亞主義の實現を期す。

四、統帥大權の發動並國際的軍備平等權を確保し以て自主的國防の安固を期す。

五、根本的行政財政及税制の整理を斷行し且つ産業の振興中正なる經濟政策の遂行民族の海外發展に依て國力の充實及國民生活の安定を期す。

昭和八年五月十六日東京會館に於て發會式を舉げた。本部は東京市丸の内海上ビル内に置き、機關紙「明倫」（菊版六十頁内外）を毎月發行してゐる。支部は、東京を始めとして旭川、函館、札幌、青森、弘前、山梨、滋賀、京都、奈良、愛媛、松山、八幡、熊本、鹿兒島、都城等全國に亘つてゐる。幹部は次の通りである。

役員

△總裁 陸軍大將田中國重

△理事 陸軍中將伊丹松雄、實業家石原廣一郎、元全權公使堀口九萬一、海軍中將東郷吉太郎、法學博士大山卯次郎、陸軍中將奥平俊誠、伯爵山田英夫、實業家松尾忠二郎、陸軍中將二子石官太

郎、同安齋晉、同佐藤清勝、元全權公使清水精三郎

△幹事 實業家井上勝好、海軍大佐原道太、同橋本才輔、陸軍少將新山福治、同二宮久二、海軍少將岡本郁男、陸軍中將渡邊良三、陸軍少將加藤惣次郎、同中村四郎太、同中頭新左衛門、同工藤豪吉、同安井義之助、同荻澤敬策、同齋藤瀧、海軍少將原達胤次、元外交官二見甚卿

この幹部の顔ぶれでも分る通り、明倫會は在郷軍人と密接な関係があるわけだが、それだけに又在郷軍人會との関係については微妙なるものがある。田中總裁はこれに關して説明して曰く、「在郷軍人會は修養團體として設立せられたるものなるを以て、吾人は同會が此設立の趣旨に基き行動し、軍人本來の使命を完うせん事を衷心より希望す。若し同會の幹部が此主旨を没却して政治的に行動せむとするが如き事あらむか、軍人會の結束は忽ち破れて同會の成立を危うするに至るべきを恐る。故に明倫會は其目的達成の爲め在郷軍人會を利用せむとするが如き行爲は絶対に之を避けざるべからず。雖然、參政權は在郷軍人に附與せられたる正當の權利たるを以て、假令在郷軍人會に籍を有する者と雖も、個人

として政治運動をなすは毫も支障なきのみならず、何人と雖も職權を以て此權利に干渉すべき限りのものに非ざるなり。故に在郷軍人が個人として明倫會に入會し、政治的行動をなすは自由の權利にして、毫も違法に非ざるなり。斯の如く明倫會と在郷軍人會とは毫も兩立し難き性質のものに非ず。兩者各々其本分を嚴守する以上兩者の衝突を來すが如き事は絶対に有り得べからざるものと信ず」と。

更に、明倫會々員の選定について田中總裁の説明するところによれば、「愛國の志を抱き相當の地位あり、或は職業あり、或は名望ある者にして會員たるの資格を具備すると認むる者」といふ一項があり、此の點から見ても、明倫會が大衆的な社會運動團體といふよりもむしろ、既成政黨的な性質を帯びてゐる。従つてその財政上の支持者も、一般大衆ではなくて特殊の金持階級である。就中理事の一人である石原廣一郎氏（石原汽船、石原興業の社長で、その事業は軍部と特殊の関係がある）がその重なる出資であることは著聞してゐる。

6 皇道會

皇道會は大觀して二つの流派から成つてゐる。元來皇道會の發起人の顔ぶれで分る様に、陸軍少將黒澤主一郎、陸軍少佐水谷吉藏、海軍大佐社本弟三等の豫備將校が在郷軍人を主體として結成計畫をしたのであるが、間もなく（昭和七年暮）當時國家社會黨の内部にあつて一勢力を形成してゐた日本農民組合の平野力三氏一派が組合を擧げてこれに合流したものである。結成大會を擧げたのは昭和八年四月五日、本部は東京市芝區琴平町二虎ノ門會館内、機關紙は月刊「皇道」（菊版六十頁前後）及び皇道新聞（月二回、新聞型）。宣言、綱領及び役員は左の如し。

宣 言

皇統三千年の光輝ある歴史を有する日本の現状は今や未曾有の危機に直面せり。即ち國民の生活は益々窮迫し産業は停廢して勤勞大衆は餓死線上に彷徨し、思想は益々惡化して極右極左共に跳梁

し、國民道徳は弛緩して輕佻浮華の風日に盛となり、列強は名を國際平和に藉りて帝國の正當なる權益を抑壓せんとす。此の如くんば皇國の前途爲に殆く、吾人の痛憤措く能はざる所なり。

惟ふに事態の茲に至れる由て來る所遠しと雖も、要するに明治以降歐米の個人主義及階級闘争的思想漸次我國に侵潤し、日本の傳統たる皇道精神を汚濁して、毫も國家の興隆發展を念とせず、或は私利私慾を追求して更に國民民福を顧みず、或は思想の動搖に昏迷して其歸趨に惑ひ、不正不義の徒其間隙に乗じて權勢利福を壟斷し、至誠愛國の士は屏息して其志を伸ぶるの餘地なきに至りたること蓋し其最大原因たらざるばあらず。

茲に於てか吾人は座視するに忍びず、奮然崛起して時弊を肅正し國運を恢弘して聊か君國に報ずる所あらんとす。吾人は須く財閥と黨閥との野合的勢力を打倒し階級闘争を根絶して秩序と安寧とを確保し、皇道精神を振興して道徳及理智を涵養し、國防を充實して列強の壓迫に對抗し、國際正義を確立して之を四海に宣布せざるべからず。此の如くして初めて内外の國難を匡救し國體の精華を發揚することを得べきなり。

吾人は如上の目的を貫徹するに當り常に公明正大なる心事と正々堂々たる方法とを堅持せんとするものにして、近時世上に頻發せる陰謀暴力其他非合法手段の如きは斷じて採らざる所なり。吾人

は帝國國民として當然享有する一切の權利を活用し、吾人と志を同じくする憂國僉世の諸士と共に精神一到何事か成らざらんの意氣を以て勇往邁進せんことを期す。

綱 領

皇道政治を徹底し以て金匱無缺なる我が國體の精華を發揚するを主眼とす。

- 一、既成政黨の積弊を打破し、以て公明なる政治の確立を期す。
- 二、資本主義經濟機構を改廢し、國家統制經濟の實現を期す。
- 三、國民道德の振興を圖り、以て綱紀の肅正を期す。
- 四、軍備を充實し、以て國防の完備を期す。
- 五、國際正義の貫徹を圖り、世界資源の衡平を期す。

役 員

△總裁 陸軍中將等々力森藏、△副總裁 海軍中將山下鏡八郎、陸軍少將黒澤主一郎、△幹事長 陸軍少將富家政市、△副幹事長 海軍大佐小島錦一郎、△常任幹事 社本第三(庶務部長兼會計主任)、塚越照(出版部長)、平野力三(遊説部長)、相田信吉(組織部長)、山崎仁而(宣傳部長)、瀧澤操六(情報部長)、島中雄三、市川節太郎、高橋時吉、河田弘、北山亥四三、鍋倉一、守田貞記、

森田宏、中村中郎、奥野小太郎、恒次東洋雄

以上の現幹部の中には創立者中の有力者たる水谷少佐がはいつてゐないが、これは氏が明倫會及び國民同盟との合同を策し、日本農民組合の反感を買つたがために、去らざるを得なかつたのだと言はれてゐる。それ程に皇道會は日本農民組合によつて左右されてゐるのである。尙、本年度の第二回大會の運動方針書によれば、現内閣打倒運動は積極的に行はないとか、廣田外交を支持するとか、極めて妥協的な態度をとつてゐる。

7 日本農民組合

皇道會の唯一最大の大衆的基礎が即ち日本農民組合である。見様によつては、日本農民組合がその政治活動の手段として皇道會を利用してゐるのだとも言へる。この組合の基礎は平野力三氏の率ゐる山梨縣聯合會と稻富稜人氏の率ゐる福岡縣聯合會とであるが、平野氏はもと舊日本農民組合(現在の全國農民組合)の幹部であつたが、大正十五年に分裂して

全日本農民組合同盟を結成、日本農民黨を作つた。その後昭和三年に稻富氏等の筑紫農民組合その他と合同して全日本農民組合と改稱、更に昭和六年片山哲氏等の日本農民組合總同盟と合同して現稱に改め、社會民衆黨の支持團體であつたが、赤松克麿氏が國民社會主義を唱導するやその最有力なる支持者となり、日本國家社會黨の創立に協力した。しかし間もなくこれから離れて皇道會の創立に盡力したことは前述の如くである。(社會民衆黨脱黨の際に片山哲氏等舊農民總同盟は分裂し去つた。)

昭和九年度大會(三月五日)に於て改正乃至採用された宣言、綱領及び役員は次の如し。

宣 言

我が日本農民組合が兵農一致の農民運動を展開するや、我國農民運動陣營に一大旋風を捲き起し、全國農村よりマルクス主義を驅逐し、いまや我等の運動は我國農民運動の主流を形成するに至つた。惟ふに昭和維新の斷行は農民の奮起に依らざれば不可能である。實に農村の興亡こそは國家の興亡にして農民の解放を完うして後初めて我が國政の安定がある。

我等は昭和九年度全國大會を茲に開催し、同志の結束を堅め、一君萬民の國體原理に基ける擡取な

き社會建設のため一層精力的に闘ふことを誓ふものである。右宣言す。

綱 領

- 一、皇道政治の徹底を期す。
- 一、資本主義機構の改廢を期す。
- 一、農村文化の建設を期す。

役 員

會長 平野力三、主事 北山玄四三、會計 河田弘、常任幹事 稻富稜人(政治部長)、北山玄四三
 (組織部、機關紙部長)、松澤一(宣傳部長)、小野永雄(争議部長)、今里勝雄(教育部、調査部長)、
 河田弘(青年部長)、恒次東洋雄、(産業部長)、須藤淳二(法律部長)

尙、本部は皇道會と同じく芝區琴平町二虎ノ門會館内にあり、機關紙「日本農民新聞」(月一回)を出してゐる。

8 國民協會

昭和八年六月日本國家社會黨から分れた赤松克麿氏は、同年八月、已にその以前から關係を噂されてゐた津久井龍雄氏が、大日本生産黨から分離するに及び（實際には黨の統制を素る者として除名された形になつてゐる）相提携して、

我等は日本精神の國民的浸透化を以て眞日本建設の基礎工作と認め、これが實現のため奉仕せんことを期す。

との綱領を掲げ、國民協會を設立した。國民協會の性質は右の綱領だけでも大體理解されるが、下記「設立趣意書」によれば一層明瞭になるであらう。それによれば要するに國民協會は政黨でも經濟團體でもなく文化團體だといふにあるが、松岡洋右氏が政友會から脱退し政黨解消聯盟を創立するや、赤松、松岡の個人的關係もあり、積極的に之を支持してゐる。

雑誌「國民運動」は、日本社會主義研究所から分離した日本主義派——赤松、津久井、松延（繁次）氏等——によつて、愛國運動の統一合同を促進する爲め、その理論的指導機

關として創刊（昭和八年四月）されたものであつたが、國民協會が創立されてからは、協會の機關誌（月刊菊判、百頁内外）となつてゐる。

國民協會創立趣意書

建國以來未曾有の重大時局に當面しながら、しかも混沌として歸する所なき現下の祖國日本に於て、最も緊要なることは、日本精神の國民的浸透化であると信じます。行詰れる國內の改造も、滿洲國の健全なる成長も、大亞細亞主義の確立も、對英對米對露の國策斷行も、すべて日本精神を絶對基調とする國民的覺醒より出發するのであります。實に日本精神の國民的浸透化こそは、日本國民が今後偉大なる民族的使命を遂行するための基礎工作でなければなりません。

いふまでもなく日本精神は日本民族固有の傳統的性質を有すると共に時代の進運に伴ふ前進的性質を有します。日本精神の國民的浸透化は、國民精神を建國の精神に立ち還らしむると共に、現下の一切の國家惡を排除し、以て眞日本民族の光輝ある發展の原動力となるものであります。長く國民を毒して來た利己主義、自由主義、共產主義、社會民主主義等の非日本的思想とこれに基く非日本的制度とは、日本精神の昂揚によりて雲散せらるべき運命にあります。

われ等は日本精神の國民的浸透化のために微力を盡すことが國家奉公の道なりと確信し、茲に從來の政黨關係を離脱して國民協會を設立し、同志と共に献身的努力を致すことになりました。國民協會は政黨ではありません。また經濟團體でもありません。純乎たる國民文化運動の團體であります。われ等の運動が何程か祖國に貢献する所あらしめたいと念願するわれ等の微意を酌まれ、今後格別の御指導と御資助を賜りたく切に御願致す次第であります。

役員

理事長 赤松克麿、常任理事 出版部長津久井龍雄、同文藝部長倉田百三、同研究部長森清人、常任理事 大木雄二。

9 青年日本同盟

昭和八年七月の所謂神兵隊事件は鈴木善一氏其他大日本生産黨の青年分子を中心に計畫されたものであつたが、當時大日本青年同盟を率ひて生産黨の幹部の地位にあつた津久井龍雄氏は、ひとり之に對して否認的態度を表明した。そして一方日本國家社會黨から離脱

した赤松克麿氏一派と提携し、新青年運動の展開を企圖し、神兵隊事件の後間もなく正式に兩派の懇談會をもつた。津久井氏のとつたかゝる反黨的態度は、當然黨本部派の反感を刺戟した。生産黨青年幹部會は津久井氏の除名を決議し八月十二日の黨最高理事會に上申したが、理事會は遂に之を承認、正式に津久井氏の除名を執行した。

註 津久井氏と同時に、當時生産黨産業部主事であつた三宮維新氏も除名された。理由は、大體津久井氏と同様な神兵隊事件に對する反黨的意見の發表にあるが、津久井氏と關係があつたのでは全然なす。

その間津久井氏は赤松氏との協働で國民協會を創立し、一方大日本青年同盟と赤松派青年分子とによつて青年日本同盟を組織し、九月十八日滿洲事變記念日を卜して結盟式を擧げ機關紙大日本新聞を青年日本新聞(月二回發行、新聞半頁大)と改題した。青年日本同盟は國民協會の行動隊、前衛隊といふことが出来る。本部は國民協會と同じく、東京市麴町區内幸町一ノ六商興ビル一號館内。

綱領

我等は全國青年の日本精神による結盟を通じて新興大日本の建設を期す。

經綸

- 一、一君萬民の本義に則り皇道政治の確立を期す。
- 一、一國一家の精神に基き皇道經濟の樹立を期す。
- 一、忠孝一本の大義に従ひ皇道教育の徹底を期す。
- 一、八紘一字の理想に基き日本民族の雄飛を期す。

宣誓

忠誠皇室を尊び勇烈邦家を護る
友愛同胞と交り信義同志と結ぶ
篤實上長を敬し無私統制に従ふ

役員

顧問 赤松克麿、會長 津久井龍雄、主事（缺員）、副主事 森本耕

10 日本通信従業員組合

前記逓友同志會から分裂した赤松克麿氏は、

我等は日本精神に基き通信事業の發達に貢献すべき國家的責任を自覺すると共に従業員の生活安定と社會的地位の向上を期す。

との綱領を掲げ、昭和八年六月十一日、逓友同志會の分裂派を中心に日本通信従業員組合（略稱「日通」）を結成した。結成後に於ける日通の運動としては特記すべきものもないが、全國産業團體聯合會の團體生命保險會社設置に對し、昭和九年四月頃より執拗な反對運動を遂行したことは注目に値する。本部は國民協會と同じく東京市麴町區内幸町一ノ六商興ビル一號館内。機關紙「日本通信新聞」（新聞半頁大、月刊）。

役員

會長 赤松克麿、主事 石塚幸次郎、會計 高地俱喜、執行委員 森本耕外十一名、會計審査委員 田口董三外六名

11 愛國政治同盟

愛國政治同盟は日本國家社會黨がその第三回大會（昭和九年一月二十四日）に於て改組改稱したものである。日本國家社會黨は舊社會民衆黨から赤松克麿、小池四郎、平野力三氏等、舊全國勞農大衆黨から山名義鶴、今村等、藤岡文六、大矢省三氏等が分裂合體して、昭和七年五月二十九日結成されたものであるが、昨年の第二回大會（一月二十二日）以後、黨内に國家社會主義と日本主義との對立が起り、加ふるに赤松、平野、小池三幹部の間に融和し難いものが生じて、赤松氏は去つて國民協會を、平野氏は去つて皇道會を、大矢氏、白鳥氏等は國家社會主義全國協議會を、それぞれ別個に樹立すると同時に、遞友同志會（及びそれから分裂した日本通信従業員組合）、日本農民組合、日本勞働同盟、全日本製氷従業員組合等の大衆團體も亦四散し去つたのである。かくて、後に残つた人々は小池四郎氏を中心とし、従來の機關紙「日本國家社會新聞」を「維新日本」と改題、國家社會主義的色

彩から急激に日本主義的色彩に移行し、最後に黨名自身をも變更したのである。

第三回大會によつて選ばれた役員は、

總務委員長 小池四郎、總務委員 陶山篤太郎、森直次、山元龜次郎、大槻正秋、今村等、山名義鶴、藤岡文六、相談役 五十嵐治孝

の諸君であるが、そのうち山名氏の如きは殆んど絶縁状態にある。綱領及び主張は、日本國家社會黨の當時と同じい。

綱 領

一 君萬民の國民精神に基き搾取なき新日本の建設を期す。

主 張

一、我黨は國民運動により金權支配を廢絶し、皇道政治の徹底を期す。

一、我黨は合法的手段により資本主義機構を打破し國家統制經濟の實現により國民生活の保證を期す。

一、我黨は人種平等資源衡平の原則に基きアジア民族の解放を期す。

現狀に於ては、代議士小池四郎氏が陶山篤太郎氏、大槻正秋氏等と共に孤軍奮闘の形であり、今村等氏、藤岡文六氏等が日本産業軍を結成して僅かにこれを支援してゐる。本部は東京市芝區田村町二ノ一内田ビル内。

12 維新青年隊

愛國政治同盟は昭和九年度運動方針に於て、「多樣的組織の太陽の如き灼熱せる中心」として愛國青年隊を組織する必要を力説してゐる。この方針に則り、四月十五日結成されたのが維新青年隊であり、隊長に佐々木武雄、副隊長に大川兼一、參謀部長に藪本正義の諸君が擧げられた。即ち愛國政治同盟の青年前衛隊である。その隊員は三十歳以下、七名を以つて一班とし、二ヶ班以上を以つて支隊とし、支隊は連絡機關として府縣別支隊聯合會議を開く、といふことになつてゐるが、今日までのところまだ見るべき活動はない。

隊 誓

我等は愛國政治同盟の綱領を信奉し、維新運動の先驅的實踐に献身す

隊 律

- 一、國士の誓は死を以つてするも之に悖るべからず
- 一、よろしく大勇につき徒らに功を争ふべからず
- 一、後進は身を以つて先進に代り先進は克く後進の爲に謀るべし
- 一、困苦缺乏彈壓に堪へ従容挺身以つて部署に任ずべし
- 一、君を念ひ國を憂ふ生死何かあらむ、至誠一貫よく天下の難に赴くべし

13 日本産業軍

日本國家社會黨は、日本主義か國家社會主義かの問題で、昭和八年七月遂に分裂をみるに至つたが、その結果同黨の最も有力な支持團體であつた日本勞働同盟も當然黨に對する去就の態度を決定せねばならなくなつた。昭和八年八月三日この問題を協議する爲め、大阪に中央委員會が開催されたのであるが、その結果は、果して、同盟を脱退して黨を支持

せんとするものと、黨を脱退して同盟を維持せんとするものとの二派に分れたが、結局兩者は仲よく共同聲明を發表して袂別した。即ち前者は同盟を脱退して日本産業軍準備會を組織し、九年二月國社黨第三回大會の翌日（二十五日）、東京市芝區田村町飛行會館内に於て日本産業軍準備會全國代表者懇談會を開催し、事實上産業軍の結成を遂げた。その現有勢力は約二千五百といふが、労働同盟の大阪の一部、九州の大部分が之に参加してゐる。現在非常に行き詰つた状態にあり、機關紙も出されて居ない。尙本部は愛國政治同盟本部（東京市芝區田村町二ノ一内田ビル）内に置く。

綱領

一、君萬民の建國精神に基き、産業大權を信奉して、國家産業の發展興隆に努め、皇道日本の確立を期す。

主張

一、我等は、日本國民たるものは、皇國の礎たる全活動の終局の目的とする日本精神に基き、私益

を追求する階級的利己主義の思想、行動の排撃を期す。

一、我等は、國家奉仕の一元的觀念に基き、日本の共同産業形態の確立によつて、資本主義産業の反皇道性の打破を期す。

一、我等は、君民一致共同體の本義により都市、農村の對立を排し、生産消費の合理化により國民經濟の更正を期す。

附記 日本産業軍は、祖國を熱愛する同志の全人格的結合體にして日本精神の發現による終生奉公の献身的實踐力によつて、綱領、主張の貫徹を期す。

役員

會長 今村等、理事長 陶山篤太郎、常任理事 森口作間、森直次、松下彦一、理事 米村長太郎、藤崎清五郎、小林秀雄、光吉悦心、山本龍助、松尾國一、森登守、邊見爲男

14 勤勞日本黨

昨年七月、日本國家社會黨（現在の愛國政治同盟）から脱退した國家社會主義派は國家社

會主義全國協議會を結成し、また新黨準備會を組織して、一路眞正國家社會主義黨の結成に邁進しつゝあつたが、この準備會は日本労働同盟（關東、關西）、國家社會主義學盟の兩者が主たる構成要素であつた。しかるに今年に入つて、結黨期日もほど紀元節當日と豫定される様になつてから、労働同盟の方では松谷與次郎氏を黨首に迎へる策戦を立て、近藤榮藏、五十嵐隆兩氏が積極的にこれを支持した。その理由が財政上にあることは諸やすいことである。準備委員長石川準十郎氏及び學盟ではこれに反對であり、學盟で編輯を引受けてゐた日刊「進め」が短刀直入に近藤五十嵐兩氏を誹謗したために、抗争は表面化し、石川氏一派は急遽別派として大日本國家社會黨を結成した。一方近藤、白鳥、五十嵐氏等は松谷氏とも協議を重ね、松谷氏はその所屬する國民同盟を圓滿脱黨することとなつて、四月二十九日天長節をトして結黨式を舉行したのである。本部は神田區美土代町二ノ一、機關紙は「國民戰士」（旬刊、小型新聞四頁）。

綱領

- 一、我黨は國體の本義に基き金權政治の介在を排除し君民一如理想國家の實現を期す。
- 二、我黨は行詰れる資本主義機構を合理的に改廢し國民生活の改善を期す。
- 三、我黨は愛國精神に基く國民道徳を振興し以つて社會惡の克服を期す。
- 四、我黨は世界平和の基礎に立ち人種の平等を期す。
- 五、我黨は社會改造の根本原理として國家社會主義を信奉す。

役員

總理 松谷與次郎、黨務長 近藤榮藏、常任執行委員 白鳥廣近、齊藤武彌、熊本與市、川出雄次郎、五十嵐隆、深田吟次郎、宇佐美藤次、相談役 大矢省三、顧問 馬島側、島中雄三、古野周藏、賀川豊彦、山崎今朝彌

松谷與次郎氏は國民同盟の中では左程重要な地位を占めてゐたわけではないから、今改めて新黨の總理となつたとて、新黨と國民同盟とが因縁を生ずるものでもあるまいが、中野正剛氏や風見章氏が選友同志會の運動に乗込んだと同じ意味が、即ち國民同盟が社會運動の支持を得んとする傾向が、こゝにも矢張りその一端を現はしてゐるものと解すること

は、左まで失當ではあるまい。

15 日本労働同盟

前記日本國家社會黨の創立に當り全國労働組合の幹部山名義鶴、大矢省三、今村等、望月源治、藤岡文六、熊本與市、白鳥廣近等の諸氏が「時局研究会」を設立して陰に陽にこれに参劃したことから、五月四、五兩日（昭和七年）の全國労働中央委員會に於いて政黨支持に對する態度を投票に附するに至り、一票の差を以つて國家主義派は敗退して組合を脱退したが十一月二十日この脱退派（關東合同労働組合の一部、大阪聯合會の一部、九州聯合會の全部）は日本労働同盟を結成した。

綱 領

一、我等は一君萬民の日本建國の精神に基き、労働階級の生活を絶對に保證する搾取なき新國家の建設を期す。

二、我等は労働組合が資本主義打倒の全面的政治闘争に於ける經濟的闘争部面を擔當することを認識し、これが完全なる使命の遂行を期す。

三、我等は強固なる團結と勇敢なる戦術とを以つて資本家階級の彈壓に抗争せんことを期す。

全國の組合員二萬五千と號したが、翌八年の夏日本國家社會黨の内部に日本主義派と國家社會主義派との對立が生ずるや、労働同盟も亦その影響を受け、八月三日の中央委員會に於て今村等、藤岡文六、陶山篤太郎、光吉悦心氏等日本主義派（日本國家社會黨支持派）は分裂し去つた。尤も脱退組合員數は今村氏の九州聯合會を除くといふに足りないが、元來左程大きくもなかつた組合であるから、相當の打撃であり、最近では日本労働總同盟との合同談が進行してゐる。分裂後の役員は次の如し。

會長 大矢省三、主事兼會計 白鳥廣近、中央委員 山本富嘉、野口晋松、關根喜四郎、矢尾喜三郎、熊本與市、本多滋二、岡五郎、安藤盛、其他

16 大日本國家社會黨

國家社會主義の理論上の指導者として長年苦闘して來た石川準十郎氏は、昨年來日本労働同盟を中心にして新黨結成に努力して來ながら、最後のところで、近藤榮藏、五十嵐隆、白鳥廣近等の諸君と袂別、急遽、昭和九年三月十日結黨した。従つて、大衆的な基礎らしいものは殆んどないと言つてよいが、福田狂二氏の「進め」社（機關紙は日刊「進め」）及び大日本國家社會主義協會（機關紙は月刊雜誌「國家社會主義」並「建設」を左右の翼黨として大いに論陣を張つてゐる。機關紙は「國社黨報」（新聞型四頁、月一回）、本部は東京市芝區田村町二ノ一〇赤門屋ビル内。

同黨が單獨結黨の理由は、推測すれば色々であるが、松谷與次郎氏を黨首とすることに反對であつたといふことから見ても、多分に「潔癖な」ところがあるようで、財政上は主として福田狂二氏の負擔が大きいだらうと考へられてゐる。左に黨誓、綱領、結黨宣言及び役員を紹介しよう。

黨 誓

光輝ある建國の本義に基き、君民一如搾取なき新日本の建設を期す。

綱 領

- 一、我等は我國古來の天皇制を以つて我國最適上の國家體制と信じ、之が絕對遵奉の下に我が國家及び國民の一大歴史的更生を期す。
- 二、我等は現行資本主義の無政府經濟組織を以つて現下の我が國家及び國民生活を危うする最大なるものと認め、公然の國民運動に依りこれが改廢を期す。
- 三、我等は現下の我が國民生活の救済は國家に依る集中的計畫經濟の施行に依るの外なきものとし、合法的方法に依りこれが達成を期す。
- 四、我等は凡ゆる國民はその生存の自然的基礎（土地及び資源）に於いて平等の權利を有するものと信じ、我が國民の生存に必要な土地及び資源を公然世界の過當占有國民に向つて要求す。
- 五、我等はアジア民族及び有色民族の解放を以つて世界人類に負ふ我が國民の與へられたる使命なりと信じ、一大民族運動に依りこれが實現を期す。

役 員

總理 石川準十郎、中央黨務局長 海軍少佐齋藤直幹、組織部長 同上、宣傳部長 勝谷爲友、資
金部長 宮川千之助、機關紙部長 別府峻介、調査部長 鷲野半太郎、書記長 關俊二、顧問 海
軍少佐金子忠吉

17 選友同志會

選友同志會は元日本労働總同盟に所屬し社會民衆黨を支持してゐたが、同黨の分裂に際し會長赤松克麿氏に従つて分裂し、日本國家社會黨を支持した。然るにその後、赤松氏は國家社會主義から日本主義に再轉換し、昭和八年五月選友同志會の中央委員會に於て日本主義による新運動方針書を提示した。之より先、已に同會の内部には、主事當清氏その他の反赤松運動が行はれてゐたのであるが、五月三十日の委員會に於て赤松氏の方針書は否決され、赤松派は遂に同會より脱退するに至つた。同時に反赤松派たる當主事も會計不始末の責任で辭任した。

然しこの分裂による影響は極く小部分に過ぎなかつたので、浦山隆行氏を中心に直ちに

本部を再建し、昭和八年七月國家社會黨の分裂に際しては、國家社會主義をとり日本労働同盟（の大部分）と共に之より脱退し、新に國家社會主義全國協議會（日本國家社會主義學盟）に参加してゐたが、財政的な問題でこの準備會からも次第に離隔し、昭和八年十月八日第九回大會に於て、突如國民同盟の中野正剛氏を統令に推し、完全に社會主義的主張を放棄した。中野統令の就任早々行はれた幹部誠首問題は、選友同志會の敗北に終つたが、その後同會の活動は全く沈潜して居り、最近では又赤松派の日本選信従業員組合との接近が傳へられてゐる。綱領並に役員は次の如くである。本部は東京市芝區今入町一五、機關紙月刊「選信労働新聞」（新聞紙半頁大）。

綱 領

- 一、我等は協同一致の組織を以つて生活の向上福利の増進並に知識の啓發を期す。
- 一、我等は着實なる手段方法を以つて選信事業の公共性を擁護し進んで其の健全なる發達を期す。
- 一、我等は一君萬民の精神に基き亡國資本主義機構を打破し搾取なき新日本の建設を期す。

役員

統領 中野正剛、中央執行委員長 浦山隆行、書記長 戸島豊治、會計 北村仁藏、法律顧問 杉浦武雄、執行委員 櫻井彦郎、安川省三、福壽清二外二五名、會計監査 山口松三、柴田新六、塚原高保

18 日本産業労働俱樂部

日本造船労働聯盟の中心をなす石川島造船所の石川島自彊組合は、元來舊日本労働組合評議會の撲滅を目的として生れた乃木講の後身で、故神野信一氏によつて組織されたものであるが、その主張するところは勞資一體主義であり、日本主義である。日本労働俱樂部（現在の日本労働組合會議の前身）の結成以來これに参加してゐたが、日本労働組合會議が創立されるや（昭和七年九月）全國労働や東電従業員組合等と行動を共にすることは出来ぬといふので、遂に脱退した。

爾後組合會議に對立し、日本主義労働組合の全國的統一を企圖し、そのカンパニアとし

て重金屬工失業對策全國協議會を提唱し、日本労働組合總聯合や海軍労働組合聯盟あたりにまで働きかけたが、海軍聯盟は動かさず、總聯合亦組合會議を脱退するの意なく、その企圖は中途挫折するの止むなき状態に至つた。こゝに於て國防献金の一大カンパを通じて日本主義労働組合の統一結成が企圖され昭和七年末國防献金労働協會が組織された。この運動は極めて時宜を得たため陸海軍當局の應援を得て献金運動としてはかなりな成果をあげたが、日本主義労働組合の統一結成といふ目的からすれば、總聯合——主に關東方面——との關係が緊密化したほか大した効果もなかつた。

然し、ともかく、献金協會としては陸海軍に各々飛行機一臺宛を献納したことによつて目的は達したので、昭和八年五月二十一日海軍機の献納を了るや即日これを解消し、協會参加の團體のみによつて日本産業労働俱樂部の結成を申合せ、六月八日早くも正式に俱樂部結成の聲明書を發表した。

現在この俱樂部に参加する團體は下記の如くであるが、昭和九年から神武天皇祭當日舉

行されることになつた日本労働祭は、この俱樂部によつて提唱されたものである。昭和八年四月二十九日、陸軍機の献納に際して行はれた愛國労働祭には参加を控へた總聯合も、九年の第一回日本労働祭には二百餘名が参加した。

尙、この俱樂部は金鷄學院の安岡正篤氏を以て最高指導者としてゐるが、従つて國維會や協調會等とも多少の關係を有する點、注目に値する。

現在本部は東京市京橋區新佃西町二丁目七、自彊組合内に置く。機關誌は月刊（菊倍版）「日本産業労働」。加盟組合並に役員は次の如くであるが、自彊組合、工愛會（浦賀船渠）、工信會（横濱船渠）を以て組織されてゐた日本造船労働聯盟は九年二月、日本産業労働俱樂部に「發展的に解消した」。

役員

理事長 石井熊蔵（工愛會）、副理事長 東條喜七（自彊組合）、常任理事 西山仁三郎（同上）、大久保秀治（同上）、長嶺運一（中正會）、森昌示（秀英労働）、小出道生（勇信労働）、長谷川忠二（自揚組

合）、森本晃一（靴工組合）、佐藤修次（港愛組合）、城戸房雄（興進労働）、田代政平（時工會）、横地福三郎（山中従業員組合）

加盟團體

自彊組合（三、〇〇〇）、秀英労働組合衛生會（八〇〇）、シチメン時工會（二五〇）、勇信労働組合（二〇〇）、東交乗合自動車中正會（九五〇）、浦賀工愛會（二、五〇〇）、横濱工信會（一、五〇〇）、興信労働組合（三〇〇）、日本靴工組合（一五〇）、自立組合（一三〇）、日本産業労働協進組合（一、二〇〇）、山中従業員組合（三〇）、自揚組合（一五〇）、芝浦工愛組合（一八〇）。

尙昭和九年四月三日第一回を舉行し相當な成績を挙げた日本労働祭は、この産業俱樂部——特に自彊組合——の提唱にかゝるもので、今後毎年神武天皇祭當日に舉行されることになつた。

19 國維會

國維會は、安岡正篤氏の金鷄學院の實行團體ともいふべきだが、國本社を新しき××で

あると言ふならば、國維會は新しき官僚閣と呼ぶべきであらう。主要メンバーを挙げれば、國本社と同様その性質は直ちに瞭然となる。

理事 岡部長景、吉田茂、近衛文麿、大島辰次郎、松本學、香坂昌康、酒井忠正

幹事 橋本清之助、町田辰次郎、湯澤三千男、富田亥之七、安部十二造

國維會の中心思想は安岡正篤氏の孔子主義にあるが、滿洲事變前後から國家主義思想が據頭するに伴ひ、この思想は上流階級並官僚の間に著しく進展し、それは一つの新官僚閣ともいふべきグループを形成するに至つた。

國維會の創立されたのは昭和七年一月十七日で、その趣旨に曰く。

「我が國近來の内憂外患は其の重大深刻なる殆んど有史以來未曾有と云ふべし。

明治の驚異すべき國民的緊張と躍進との反動に由る惰風は今や容易に改むべからず。

且前代文化の急進速成は政治經濟教育等百般に破綻續出し來り、而も之に處すべき内省

と忠恕との創造的精神は廢れ、一切を偏に客觀的唯物的にのみ批判し去らんとし、私怨盛んにして公義衰へ、國內到る處階級的反感抗爭尖銳にして物情洶々たるに、更に隣邦の友誼全く破れ國際信義毫も恃むべからず。經濟的恐慌と政治的動搖との世界的黒雲は方に朝夜を暗澹たらしめつゝあり。今にして斷然、在來因循の風を排脱せずんば遂に收拾すべからざる禍亂に陥らん。

不肖等此の情勢を座視するに忍びず、自ら揣らずして奮然身を挺し、至公血誠の同志を連れ、敢て共產主義インターナショナルの横行を擅にせしめず、排他的シヨルヴィニズムの跋扈を漫にせしめず、日本精神に依つて内、政教の維新を圖り、外、善隣の誼を修め、以て眞個の國際昭和を實現せんことを期す。」

今年（昭和九年）の初め、内務省系新進官吏により國家主義團體の結成がなされる如く傳へられたが、それは言ふまでもなくこの國維會の影響下にあるものである。元社會局長官現協調會理事長吉田茂、前警保局長松本學、現東京府知事香坂昌康氏等はその中心をなす

ものとみられる。

尙故神野信一氏によつて結成された日本産業労働俱樂部が、金鷄學院を通じてこの國維會と關係をもつてゐることは注目に値する。本部は東京市麴町區内幸町一ノ三、大阪ビル二號館。機關紙「國維」。

20 國本社

國本社が創立されたのは大正十五年三月であるが、その名前が有名になつてきたのは、滿洲事變前後からファツシヨ熱が昂まつてきてからのことである。現樞密院副議長平沼騏一郎男がその會長であるが、政變が問題となり政權の歸趨が論議される場合、必ずそのうちに平沼男の名前が見出されるのは大體同氏がこの國本社といふバックをもつてゐるからだといつても過りない。

元來教化團體として創立された國本社は、その綱領に於ては單に「國民精神の涵養振作

に努め國本運動を助長し、教化運動の徹底を期す」とのみ掲げてゐるが、その役員の顔振をみれば、之が單なる教化團體にあらざることは一目瞭然である。即ち左の如し。

會長 平沼騏一郎

顧問 齋藤實

理事 竹内賀久治、大田耕造、荒木貞夫、加藤寛治、本多熊太郎、原嘉道、池田成彬、川村貞四郎
田邊治通、小山松吉、樺山資英、鹽野季彦、鈴木喜三郎、結城豊太郎、菊池武夫、小磯國昭、眞崎甚三郎、大角岑生、後藤文夫、小原直、河田烈、有馬良橋、外十二名

要するに、國本社は財閥、官僚、軍人の合作になるものであるが、それは本質的には財閥のXXXXXX、XXXXXの爲めのXX的XXであるときで、逆にいへば、ファツシヨ的風潮XXXXXX、XXXX、XXの財閥とのXXXXであるともみられぬことはない。言ひ換へれば國本社とは、新しきXXであり、又XXであるともいひ得る。

現在本部は東京市麴町區平河町六ノ三六にあり、月刊雜誌「國本」の外「國本新聞」を

出してゐるが、會の内容については極めて秘密主義であり、會員は殆んどが中間層以上の階級に屬する。

國家主義團體現勢一覽表 (昭和九年五月現在)

| 團體名稱 | 本部所在地 | 創立 | 機關紙 | 主要人物 |
|---------|------------------|-------|---------------|--------------------------------------|
| 國體擁護聯合會 | 東京市芝區田村町二ノ一内田ビル内 | 昭七・一二 | — | 入江種矩、増田一悦、五百木良三、岩田愛之助、實川時治郎 |
| 黒龍會 | 東京市麹町區永田町二ノ八六 | 明三四・一 | 亞細亞時報、論、改造、戦線 | 内田良平、葛生能久、小幡虎太郎、齋地盤夫、坂井六輔、鈴木一郎、川原信一郎 |
| 愛國社 | 東京市芝區白金臺町一ノ八一 | 昭三・八 | — | 岩田愛之助 |
| 政教社 | 東京市神田區猿樂町二ノ一五 | 明二三・二 | — | 五百木良三、雜賀博愛、森洲生、皆川三陸、松林亮 |
| 回天時報社 | 東京市赤坂區青山南町五ノ五四 | 大一一・〇 | — | 池田弘、香渡信 |
| 大統社 | 千葉縣東葛飾郡八幡町 | 大一一・三 | — | 吉田三郎 |
| 大化會 | 東京市牛込區加賀町二ノ五 | 大九・四 | — | 岩田富美夫、小山大嶽、荒牧退助 |

表一 勞務團體主義家圖

| | | | | | | |
|--------------------------------|---|--------------------------|--|---|----------------|--|
| 大和民勞會 | 健國會 | 原理日本社 | 對外同志會 | 愛國青年聯盟 | 愛國學生聯盟 | 愛國勞働聯盟 |
| 東京市目黒區上目黒五七一 | 東京市荒川區三河島六ノ七五 | 東京市世田谷區若林二七八 | 東京市世田谷區三軒茶屋七五石光方 | 東京市麩町區有樂町一ノ六大正ビル内 | 東京市澁野川區田端五六五 | 東京市麩町區有樂町一ノ六大正ビル内 |
| 大・一〇・一 | 大・一五・二 | 大・一五・一 | 昭・四・一 | 昭・七・三 | 昭・六・〇 | 昭・八・四 |
| 民勞法律世界 | 皇道 | 原理日本 | | | | 愛國新報 |
| 藤代善山、城島藤太郎、根本健光、石川唯庸、福島士郎、佐藤伍作 | 赤尾敏、深澤源造、中野七生、河野康男、村田藤吉、道本萬吉、三島助治、伏見清、鈴木博、杉森政之介 | 養田胸喜、松田福松、宮崎五郎、三井甲之、上領一郎 | 大井成元、小林順一郎、五百木良三、葛生能久、入江種矩、石光眞臣、菊池武夫、田鍋安之助、内藤順太郎 | 林逸郎、兒玉信夫、柳町茂道、神保幸三郎、山野邊瀧、服部豊、松井秀雄、野崎義雄、淺野逸郎 | 樋口喜走、山田昇、坂本保之介 | 伊藤清、木下好太郎、青山憲史、日高末藏、原田恭博、倉岡利夫、島田三、鈴木惣一、本田四郎、荒井貞治、林百市、佐伯聰 |

表一 勞務團體主義家圖

| | | | | | | | |
|--|--|-----------------------------------|--|--------------------------------|----------------------------|----------------------|--------------------------------------|
| 愛國法曹聯盟 | 勤皇聯盟 | 大正赤心團 | 大同聯盟 | 勤王會 | 明德會 | 新日本建設同盟 | 昭和同志會 |
| 東京市麩町區有樂町一ノ六大正ビル内 | 東京市四谷區南寺町四二 | 東京市深川區平久町一ノ一三 | 東京市目黒區上目黒九八七 | 東京市麻布區六本木二七 | 東京市赤坂區青山南町五ノ八四 | 東京市下谷區茅町二ノ二〇 | 東京市芝區田町八ノ一 |
| 昭・七・五 | 大・一三・一 | 大・七・二 | 大・一四・〇 | 昭・七・八 | 昭・二・三 | 昭・八・三 | 昭・六・二 |
| | 勤皇 | | | | 明德論壇 | | |
| 角岡知良、五十嵐治孝、伊藤清、木下好太郎、福田秀一、草野正慶、兒玉信夫、中里義夫 | 菊池武夫、佐藤清勝、久世爲次郎、菅澤重雄、豊田朝喜、鈴木勇、吉田勝逞、鈴木庸之助 | 森健二、米山義夫、原田君次、渡部武夫、高橋四吉男、小林信、赤羽廣州 | 小島高踏、金子力三、下澤秀夫、本田葵堂、芳川哲、原義顯、佐藤守文、笹本一雄、松本守正 | 角岡知良、若宮卯之助、紀平正美、三井甲之、川手忠義、養田胸喜 | 鹽谷慶一郎、庄司野利一、淺井正純、平野善三、川口政好 | 笠原幸八、笠原正成、福田長太郎、宮下裕治 | 小川良一、川瀬由太郎、小池元男、田中市三郎、宮坂武雄、吉川正曉、百瀬若雄 |

| | | | | | | | | |
|--------------------------------|------------|------------------|-------------|---|-----------------|-----------------------|-----------------|---------------|
| 大日本國士黨 | 大日本俱樂部 | 大義社 | 大道社 | 大乗會 | 鶴鳴莊 | 汗山莊 | 關東支洋社 | 立憲革新青年黨 |
| 東京市牛込區山吹町一三三小四方 | 東京市牛込區河田町一 | 東京市澁谷區代々木富ヶ谷一五六二 | 東京市麻布區六本木二七 | 東京市小石川區小日向臺町一ノ六三 | 東京市麴町區內幸町一ノ六 | 東京市四谷區永住町二入江方 | 東京市芝區芝公園二一號ノ八 | 東京市日本橋區濱町二ノ八九 |
| 昭八・二 | 大・一四・六 | 不詳 | 昭四・四 | 大九・三 | 昭六・三 | 大五・四 | 大・一四・三 | 昭二・一一 |
| | | | | 大乗 | | | | |
| 伊藤公明、山岸純一郎、伊藤武志、宮永辰治、小澤啓志、初田龍藏 | 增田一悅 | 渡邊豊 | 角岡知良 | 吉田無染、光山百川、中島啓三 | 田中弘二、武田豐四郎、本田廣善 | 摺建甫、村上芳英、摺建克夫、嘉納信、高木普 | 入江種矩、川島浪速、五百木良三 | 岡安三郎、田中正次郎 |
| | | | | 佐藤正吾、堀之内高潔、樋渡彦九郎、宮下學、大崎駒治、細貝泉吉、瀧川一益、山口甚三郎 | | | | |

| | | | | | | | | |
|-------------|------------|---------------|------------------|---------------------------------|-------------------------|---------------|--------------------|-------------|
| 地湧日本社 | 東洋共存會 | 東亞社 | 東亞聯盟義會 | 日本國民軍 | 白王社 | 殉國會 | 神州護國團 | 昭和義塾 |
| 東京市澁谷區原宿二〇九 | 東京市中野區文園町一 | 東京市赤坂區青山南町六丁目 | 東京市芝區田村町二ノ一内田ビル内 | 東京市中野區大和町二ノ二七四 | 東京市芝區田村町二ノ一内田ビル内 | 東京市澁谷區上通り四ノ二〇 | 東京府八王子市千人町一三八 | 東京市芝區新橋六丁目四 |
| 不詳 | 大・一三・四 | 不詳 | 昭三・二 | 昭七・四 | 昭四・二 | 昭八・一一 | 昭三・四 | 昭八・二 |
| | | | | 轉換時代 | | | | 後威 |
| 內田剛藏 | 望月義人、大竹貫一 | 內藤順太郎 | 須藤理助 | 小山田劍南、松林亮、入江種矩 | 石井敬三、馬場政一、山中伊平、四宮二郎、澤田謙 | 入江種矩、松林亮 | 野口幹、番場源太郎、小林健雄、馬場清 | 前田芳藏 |
| | | | | 村田義一、國井篤、水石壽、倉田金吾、中里歲雄、北島章、小林春雄 | | | | |

| | | | | | | | |
|----------------|-------------------------------|---|-----------------|--|-------------------------------------|---|--------------|
| 大日本國輝會 | 大日本守國會 | 大日本殉國會聯 | 大日本愛國義團 | 大日本經國聯盟 | 大日本古神道實行團 | 大日本護國青年黨 | 大日本遊興俱樂部 |
| 東京市麹町區內幸町一ノ六 | 名古屋市南區熱田旗屋町二九二 | 東京市本郷區森川町一 | 東京市本所區葉平橋二ノ四 | 東京市赤坂區福吉町二(二條家別邸內) | 大分縣別府市外朝日村小倉大平山麓 | 東京市豊島區池袋二ノ八五三 | 大阪市西成區長橋通二ノ七 |
| 昭四・二一 | 昭八・四 | 大・一五・二 | 昭五・一〇 | 昭三・一一 | 大・二・四 | 不詳 | 昭七・九 |
| — | 守國 | 殉國 | 愛國義團報 | 經國新聞 | — | — | — |
| 岩城隆德、肥田琢司、龍加壽惠 | 與吳鋼二、三上長三、伊藤倉藏、藤井茂行、伊藤清藏、服部鈴吉 | 增井潤一郎、保田太一郎、安岡正篤、中野亨、富田郡三、志村信治、加藤傳、大島助治 | 松岡林造、加藤重太郎、渡邊正良 | 一條實孝、吉富庄祐、瓜生喜三郎、大島高精、小林錦、座間止水、增田具治、三文字正平、澤田壯吉、中里義美、森山知可、阿部民次 | 奧村愛子、山本豊國彦、中村良助、坂本寛之、中村俊作、和田義彦、須藤理助 | 佐々木藤松、宗川勝、淺田泰司、平野伊三郎、廣瀬義一、若林吉雄、伊藤眞三、福井泰次郎 | — |

| | | | | | | | | |
|------------------|------------------|-------------------------------------|-----------------|-------------------------------|---|----------------------|---------------------|---------------------------------|
| 大日本奉公團 | 大亞細亞民族會 | 內外更始俱樂部 | 原理日本軍 | 風雲俱樂部 | 國志同盟 | 國家主義東亞聯盟 | 皇維會 | 皇國擁護會 |
| 東京市麹町區土手三番町三〇蓮井方 | 東京市麹町區內幸町一ノ五幸ビル內 | 東京市牛込區原町一ノ四九 | 東京市淀橋區西大久保二ノ三四五 | 東京市芝區三田功運町八光風塾內 | 東京市目黒區三田一五 | 東京市赤坂區青山北町一ノ八香渡方 | 東京市麻布町本村町一五二 | 東京市荒川區日暮里町九丁目一〇九 |
| 昭三・九 | 不詳 | 昭三・八 | 大八、不詳 | 昭五・一一 | 昭六・一二 | 昭八・一一 | 昭八・一二 | 大・一三・七 |
| — | — | 革新時報 | — | — | 東北春秋 | — | 皇維 | — |
| 蓮井繼太郎 | 高鍋日統 | 入澤吉次郎、森谷天洞、畑中光珠、平野小劍、西村泰藏、影山知二、角田清彦 | 鬼倉重次郎 | 千々波敬太郎、美間坂剛太、久保田晴士、星野末吉、六田武八郎 | 中川功、岩崎修三、竹田重正、千田貞清、中村彌平、稻益辰五郎、松井弘大、澤村敏雄 | 義田胸喜、香渡信、壁經平、池田弘、林逸郎 | 原田政治、大崎嘉一、藤原雄次、松尾友太 | 本多輝雄、秋草愛一、田邊普八、山越長七、並木彌十郎、朝比奈秀徳 |

| | | | |
|--------|-------------------|-------|---|
| 與國社 | 東京市四谷區笹筒町五 | 不詳 | 井口越南 |
| 興國義會 | 東京市芝區田村町二丁目一内田ビル内 | 昭四・一 | 松林亮 |
| 光風塾 | 東京市芝區三田功運町 | 昭七・一〇 | 千々波敬太郎、津布久重久、川内 織三郎、鳥田正藏、村本實藏、美 間坂剛太、伊藤鶴松、那須保雄、 久保田晴士、松田一人 |
| 更始一新會 | 東京市品川區大井鐙町三五四五 | 昭七・九 | 角田清彦 |
| 愛國青年同盟 | 東京府八王子市千人町一三八 | 昭七・二 | 野口幹、小林健雄、番場源太郎、 山田聖洲、新庄昌、井上孝太郎、 小川清、寺田勝之、又吉、山口孝、横溝 泰山、浦部武夫 |
| 愛國皇民黨 | 東京市小石川區指ヶ谷町一四六 | 昭三・不詳 | 浦部武夫 |
| 五月黨 | 東京市中野區沼袋南一ノ一五一五 | 昭八・五 | 畠山清身、松本親敏、畠山清行、 岡澤三能、山田眞一、後藤學三、 生出仁、山本浩、關英太郎 |
| 舊邦社 | 東京市麻布區田島町三 | 昭二・二 | 友野直二、増田忠雄、宮川守善、 後藤一男、野田培夫 |

| | | | |
|-----------|-------------------------|--------|--|
| 民力振興會 | 東京市板橋區中新井四丁目 | 不詳 | 湯本一、半田一郎 |
| 神州青年連光會 | 東京市品川區西品川五ノ一〇一六 | 昭八・不詳 | 望月源治 |
| 聖日本學會 | 東京市澁谷區原宿三ノ二三〇 | 大二三・一一 | 伊藤武雄、井筒節三、稻葉一也、 林五助、西川光二郎、補永茂助、 富田照野、中貞、金丸吉治、山崎 猛、田尻隼人、山本信哉、天野辰 夫、雨谷毅、永井了吉、大森一 友納早一、中村傳 |
| 洗心莊 | 東京市澁谷區氷川町一五 | 昭九・三 | 佐藤德太郎、鈴木謙彰、三瓶倉治、 青柳治三郎、國吉良吉、西野秀銀 |
| 原青年部 | 東京市芝區今入町一五和合クラブ | 昭八・一一 | 池延繁次、金内良輔、狩野敏、小 井了吉、五山篤太郎、今村等、永 寺田龍助、井邊見爲雄、宮本純一、 山本能助、高橋喜藏、淺井敬吾、大 山俊雄、高次昇、木本榮 |
| 愛國一致運動協進會 | 東京市麴町區内山下町一ノ一東拓ビル内神武會本部 | 昭八・一二 | 錄田昌純、高次昇、木本榮 |

| | | | | | |
|--------|---------------------|------|------|---|---|
| 神武會 | 右 | 同 | 昭七・二 | 日本 | 大川周明、狩野敏、松延繁次、金内良輔、片岡氣介、宇都宮良久、日野月末弘、橋原文史郎 |
| 愛國政治同盟 | 東京市芝區田村町二ノ一内田ビル内 | 昭七・五 | 維新日本 | 小池四郎、陶山篤太郎、藤岡文六、山元龜次郎、今村等、山名義倫、森直次、大槻正秋、五十嵐治孝 | 今村等、陶山篤太郎、森口作間、森直次、松下彦一、米村長太郎、光吉悦心、山本龍助、松尾國一、森登守 |
| 日本産業軍 | 右 | 同 | 昭九・二 | — | 佐々木武雄、大川兼一、藪本正義 |
| 維新青年隊 | 右 | 同 | 昭九・四 | — | 永井了吉、田尻隼人、三浦大寛、大森一輝、石渡山達、三浦延次 |
| 勸皇維新同盟 | 東京市小石川區水道場町二ノ六四直心道場 | 昭七・一 | — | — | 頭山滿、内田良平、吉田益三、八幡博堂、葛生能久、小橋虎太郎、松田龍輔、池田弘、立花良介、齋地盤夫、坂井六輔、平信夫、柴山滿、山本千一、井上四郎、鈴木善一、西郷隆秀 |
| 大日本生産黨 | 東京市麹町區永田町二ノ八六 | 昭六・六 | 改造戦線 | — | — |

註一 大日本生産黨では現在正式の機關紙は出されて居らぬ。「改造戦線」は準機關紙で、改造之日

本社から出されてゐる。

註二 大日本生産黨は愛國一致運動協議會に参加するほか、國體擁護聯合會にも加盟してゐるが、便宜愛國一致運動協議會のみに加入した。

註三 大日本生産黨の加盟並に支持團體は次の如し。

東 本 部

黒龍會、明德會、回天時報社、改造日本社、全國改戦聯盟、王子電車従業員組合、臺灣研究會、大日本青年同盟會、大日本國輝宣揚會、皇民同盟、愛國青年同盟、東京海員同盟、神州護國團、大日本青年同志會、南町塾、新興青年同盟、梨郷村農民青年同盟、大日本學生聯盟、全國大日本主義同盟、皇道力俠會、大日本護國聯盟、青年運動社、海國日本社、新文學會、中信土木労働組合、老兵團、北海道青年社、大義社、愛國勤勞組合

西 本 部

神州護國黨、三木組、金森組、大阪木履工組合、國防普及同志會、愛國前衛隊（以上在大阪）、興國青年同盟、洛北青年同盟（以上在京都）、愛國青年興民會、日本産業労働同盟、關西建築交友會、愛國社、北濱自治會、黒龍會支部、大阪市電交通俱樂部（以上在大阪）、古神道實行團（大分）、南寅組（大阪）、彩管報國黨、東亞青年同志會、大日本青年黨（以上在兵庫）、仁俠

社、親隣會、健昭會、皇國青年同盟、義高社、生産日本社、美乃華社、相和會、愛國勤勞青年同盟、集義塾(以上在大阪)、愛國社、神州報國會(以上在京都)、立正社、七生報國會、籌導社(以上在兵庫)

註四 愛國一致運動協議會加盟團體は右表の外、左記の如き地方團體がある。名稱と代表者のみを記録する。

東京

興民會(工藤勝市、日堂至)、昭和義塾(前田芳蔵、吉野憲太郎)

静岡

建設青年社(荻倉勝巳)、碧色同盟(井田三郎、高田教一)

愛知

在名日本主義聯合會(松田家守、沼田善太郎、原田庄次郎、生駒一生、三浦延治)

福岡

大日本護國軍(木本榮、隅田渉)

長野

信州皇民同盟(淺井教吾、寺澤良治、吉野福一、關口龜吉、山峯新一)

| 一般國家主義 | 國本社 | 國維會 | 大亞細亞協會 | 大亞細亞建設社 | 玄洋社 | 國粹大衆黨 |
|---|---|---|----------------------|-----------------|---|--------------|
| 東京市麹町區平河町六ノ三六 | 東京市麹町區內幸町一ノ三 | 東京市麹町區內幸町一ノ三 | 東京市麹町區內幸町大坂ビル六五三號 | 東京市澁谷區千駄ヶ谷五ノ八七〇 | 福岡市西職人町 | 大阪市東區北濱一丁目二八 |
| 大・一・三・三 | 昭・七・一 | 昭・七・一 | 昭・八・三 | 昭・八・六 | 明三・不詳 | 昭・六・三 |
| 國本新聞本 | 國本新聞本 | 國維 | 大亞細亞主義 | 大亞細亞 | — | 國粹大衆 |
| 平沼騏一郎、竹内賀久治、大田耕造、荒木貞夫、池田成彬、小山松吉、結城豊太郎、鈴木喜三郎、菊池武夫、矢萩富橋 | 岡部長景、大島辰次郎、吉田茂、松本學、近衛文麿、香坂昌康、酒井忠正、湯澤三千男、橋本清之助、町田辰次郎、富田亥之七、安部十造、安岡正篤 | 中谷武世、鹿子木貞信、下中彌三郎、角岡知良、鈴木貞一、近衛文麿、松井石根、廣田弘毅、德富猪一郎、菊池武夫、末次信正 | 笠木良明、馬場國義馬、口田康信、高村光治 | 喜多島淳、頭山滿 | 征川良一、藤吉男、高田忠志、岡田太三郎、菊地一部、平井新治、笹川春二、板倉彌三郎、竹越卯一、藤原常吉、丹田重雄 | |

| | | | | |
|-----------|--------------------|--------|------|---|
| 大日本國粹會總本部 | 東京市堺町二條上ル中安方 | 大八・一〇 | 會報 | 中安信三郎、高山元三郎、床次竹次郎、頭山滿 |
| 關東國粹會 | 東京市麹町區內幸町二ノ四虎ノ門ビル | 大八・一〇 | 會報 | 高山公道、中山友藏、梅津勳兵衛、小島長治郎、金井米吉、松本清太郎、篠信太郎、中村三吉、平松兼三郎、倉持直吉、鈴木榮太郎 |
| 大日本正義團 | 東京市芝區高輪南町二九 | 大・一四・二 | 正義時報 | 酒井榮藏 |
| 維新同盟 | 東京市澁谷區榮通り一ノ二 | 昭七・七 | 維新公論 | 西澤公雄、大林一之、吉永侃、伊藤金五郎 |
| 彌榮會 | 東京市麹町區九段三ノ四 | 昭四・七 | 皇道新報 | 白川資七、木村平太郎、大橋常三郎、宮入清四郎、相馬由也、李東雨、曾根朝起 |
| 勞働黨國會 | 東京市澁草區山谷町三丁目一〇 | 昭八・四 | — | 建部皓正、清岡長言、伊藤末尾、吉田茂、塚崎直義、安藤正純 |
| 白血球聯盟 | 東京市澁谷區戸塚町二ノ三一 | 大九・二 | — | 福田長太郎、森吉義旭、小林政彦、上里親二、高野芳信、五來欣造、笠原正成、向井秀法、政慶雄、御園生弘 |
| 日東義會 | 東京市麹町區內幸町一ノ六島ビル十五號 | 昭九・三 | — | 牧野務、武永利三郎、脇阪利徳、丹羽五郎、湯江次男、新居茂、河野 |

| | | | | |
|-----------|------------------|-------|------|---|
| 日本再建同盟 | 東京市芝區琴平町二小倉ビル内 | 昭七・五 | — | 利江、實間善兵衛、小橋一政、齋藤史郎、倉富金市、古川誠治、小宮山豐太郎、佐川宜堅、若木剛、實間耕三 |
| 大勸社 | 東京市麹町區永田町二ノ一 | 昭七・一二 | — | 板垣守正、田村秀吉、渡邊鬼子松、高岡大輔 |
| 大日本錦旗會 | 東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ三六三 | 昭五・三 | 錦旗公論 | 山本岩雄 |
| 大日本報國會 | 東京市京橋區銀座西七丁目五 | 昭四・四 | 報國評 | 本多葵堂、小橋正則、山田庄藏、小倉廣榮、小島高踏、小山六之助、野木正義、遠藤辰五郎、渡邊浩利、山田冬藏、庄司彦雄 |
| 全日本報國青年同盟 | 東京市京橋區銀座西七丁目五 | 昭九・不詳 | — | 經田順一郎、山本勝也、朝岡稻太郎、光山百川、峰間信吉、岡見花弘、山本武弘、齊藤常四郎、渡邊字野邦雄、德田健兒、富塚昌美 |
| 日本青年愛國同盟 | 東京市澁谷區千駄ヶ谷三ノ五一五 | 昭六・二 | — | 平沼誠一郎、尾野實信、大野豊四、石丸志都磨、河田正太、佐々木嘉三郎 |

| | | | | | | | | |
|-------------------------|---|-------------------------------------|---------------------|--------------|--------------------------------------|--------------------------------|------------------------------|--|
| 大日本學生聯盟 | 大日本青年聯盟 | 大日本青年同志會 | 青年日本同盟 | 大日本愛國青年同盟 | 大衆國成聯盟 | 祖國會 | 南町塾 | |
| 東京市淀橋區西大久保三ノ九一 | 東京市赤坂區青山南町二ノ一一 | 東京市赤坂區青山南町五ノ五四 | 東京市麹町區內幸町一ノ六商興ビル內 | 東京市澁谷區美竹町一三 | 東京市麹町區元平河町一〇 | 東京市杉並區井荻三ノ一 | 東京市赤坂區青山南町三ノ六〇宅野方 | |
| 昭六・五 | 昭二・二 | 昭七・一〇 | 昭八・九 | 昭七・九 | 昭二・二 | 昭三・七 | 昭七・一二 | |
| 神政 | | 大日本青年同志會 | 青年日本同盟 | | 大衆國成 | 祖國 | 日本第一新聞 | |
| 森清一、本田留男、清水英雄、松尾大魚、菊池弘泰 | 久保寺山之輔、梅谷利治、棚部一郎、秋山茂樹、石井製袋吉、高松幸三郎、加賀幸太郎、駒澤延三、中村重雄、熊谷要藏、岸野清藏 | 鈴木壽雄、稻垣鐵男、小崎一誠、河野策太郎、河野政美、寶玉一英、吉田重一 | 津久井龍雄、森本耕、田中近藏、赤松克廣 | 三宮維信、武井福造、森明 | 箕浦春浪、高梨芳岳、坂本憲三、山崎忠次郎、副島愛川、堤清、山田徹、階本樹 | 北吟吉、若宮卯之助、下位春吉、五來欣造、杉森孝次郎、荻田胸喜 | 宅野田夫(清征)、末永節、荻田胸喜、鈴木一郎、生田目經德 | |

| | | | | | | | |
|---|----------------|---|---|-----------------|------------|---------------|-------------------|
| 無名士俱樂部 | 靖國會 | 國士會 | 皇明會 | 皇生會 | 皇道振興會 | 皇道發揚會 | 皇國血戰團 |
| 東京市牛込區馬場下町三五 | 東京市麹町區九段坂上借行社内 | 東京市淺草區千束町二ノ三四 | 東京市豊島區巢鴨二ノ一 | 東京市淀橋區西大久保二ノ二四六 | 東京市四谷區左門町四 | 東京市神田區三崎町三丁目二 | 東京市神田區小川町二ノ二天下堂ビル |
| 昭七・九 | 昭九・三 | 大一一〇・九 | 大八・二 | 昭九・四 | 昭六・一〇 | 昭八・一〇 | 昭八・一 |
| 無名士新聞 | | 國士道 | | 皇國青年 | | | 血戰 |
| 直原豐四郎、依田孟、須一義雄、莊遺策郎、黒木秀夫、永藤一雄、加藤義一、國佛治、兼古毅一 | 今泉定助、荳津耕次郎、吉田茂 | 辻嘉六、志村吉雄、瓜生堪作、鈴木旭山、下山天龍、紅谷天洋、河村鐵雄、砂川天岳、石崎順一、中四宮憲章 | 吉田靈明、萬年良信、甲斐久邦、川龍夫、石北政男、賀茂弘榮、山林三郎、藤原慶隆、賀茂弘榮、山北小路資武、釜屋六郎、長澤小輔、志村國明、小倉俊德、大谷昌俊、新沼千代治、尼子止 | 今泉定助 | | | 大庭一 |

| | | | | |
|---------|----------------------|-------|----------|--|
| 皇民意識研究會 | 東京市淀橋區下落合四ノ二、一九八 | 昭七・一〇 | — | 長澤九一郎 |
| 興民會 | 東京市赤坂區福吉町一 | 昭六・一一 | 興民布告 | 日堂則義、佐川多門 |
| 興國統盟 | 東京市麹町區內幸町幸ビル内 | 昭九・一 | 興國運動 | 中崎辰九郎、鬼塚昌伴 |
| 愛國同志會 | 東京市麹町區下二番町七 | 大・四・二 | 愛國 | 一條實孝、大島高精、川口彦治、土屋龜一、安達房治郎、南輝吉、守屋源次郎 |
| 愛國戰士教授會 | 東京市四谷區新宿一坂井ビル改造之日本社内 | 昭八・九 | 愛國戰士教授會報 | 頭山滿、内田良平、八幡博堂、平信夫、吉田益三、山本昌彦、花井忠、角岡知良、細川潤一郎 |
| 愛國革新聯盟 | 東京市深川區本村町一六 | 昭七・一一 | — | 伊藤信司、篠塚彌作、高田純吉、田中榮吉、矢吹介良、張昌根、佐藤恒吉、伊東勇、中村八重見、宮原謙吾、荒井旭、町田富士八郎、石原道山 |
| 錦旗會 | 東京市牛込區原町三ノ五九 | 昭二・五 | 錦旗 | 遠藤友四郎 |
| 新政會 | 東京市本郷區駒込林町三五 | 昭五・三 | — | 神木駒之助、深澤滋、周山重太、鈴村義三郎、眞木高吉、石岡重治 |

| | | | | |
|------------|--------------------|-------|----------|--|
| 新日本國民同志會 | 東京市麹町區丸ノ内日清ビル六二一號 | 昭八・一二 | 新日本 | 高廣三郎、杉山謙治、保科治朗、二宮宗太郎、中島太郎、川原田政太郎、伊藤道機、吉村正、日影重、内田繁隆 |
| 紫雲莊 | 東京市麹町區內幸町一ノ六 | 大・一・三 | — | 橋本徹馬、佐藤儀藏、越智秀一 |
| 全國大日本主義同盟 | 東京市澁谷區常盤松二六 | 昭六・四 | 全日同盟ニユース | 松永材、米持格夫、石垣貞一、横井金男、鬼塚武彦、北村正、高瀬兼介、齋藤智勇、神谷英三、岩崎重喜 |
| 全日本護國聯盟 | 北海道小樽市稻穂町東五ノ五 | 昭五・八 | 護國日本 | 山本一郎、林貞四郎、田澤稔、小坂要一、平野定藏、菅野伊達雄、奈良深重市、青木靜二 |
| 新經濟國策研究會 | 東京市麹町區內幸町大平ビル五階 | 昭八・一一 | — | 小林順一郎、白井二郎、河村圭三、大井成元、渡邊滿太郎、松本勇造、佐藤卓藏 |
| 大亞細亞日本青年聯盟 | 東京市淀橋區百人町二ノ二〇二 | 昭八・八 | — | 山口一太郎、二村克己、三宅勉、青柳芳彦 |
| 大日本皇國會 | 東京市世田谷區玉川等々力町三ノ七六一 | 不詳 | — | 栗山勇 |
| 大民俱樂部 | 東京市世田谷區若林二八一 | 大五・不詳 | — | 柴田德次郎、眞藤義丸、山崎源二郎 |

| | | | |
|---------|---------------------|---------|-----------------------------|
| 大亞義團 | 東京市澁谷區大和田 | 昭七・一 | 三浦義一 |
| 天行會 | 東京市澁谷區常盤松三 | 昭七・不詳 | 頭山秀三 |
| 國防聯盟 | 東京市中野區文園町一 | 昭六・一一 | 望月義人 |
| 日本生産大衆黨 | 東京市荒川區南千住一ノ五二 | 昭五・五 | 神保孝三郎、小原榮治 |
| 興國青年同盟 | 京都市左京區八條內田町六一 | 昭五・二 | 柴山滿 |
| 日本皇政會 | 東京市小石川區駕籠町二・三・七・今泉方 | 昭四・一二 | 今泉定助、小谷文清 |
| 國防社 | 大阪市東區北濱一ノ元 | 大・一・三・三 | 笹川春二 |
| 東海聯盟 | 東京市目黒區三谷町九登 | 大・一・三・八 | 大杉精一 |
| 赤化防止團 | 東京市澁谷區柏木三二五 | 大・一・一・〇 | 米村嘉一郎、鹽谷慶一郎 |
| 護皇會 | 東京市牛込區市谷富久町一〇五 | 大・一・〇・〇 | 中山忠次 |
| 縱橫俱樂部 | 東京市澁谷區戸塚源兵衛町一五六 | 大・八・六 | 森傳、柏木三千三、結城源心、三枝孝三、宮田晉、佐々木貢 |

| | | | |
|---------|--------------------|------|---|
| 天業青年團 | 東京市下谷區上野櫻木町一 | 不詳 | 田中智學 |
| 皇民軍 | 埼玉縣川口市金山町三ノ六〇六 | 昭九・四 | 中島鐵之助、森中松吉、大田太郎、山崎盛安、伊藤政美、岩田源一、藤城所、野之助、佐藤覺次郎、西野、春日、好興、阿部武夫、栗原伸吾 |
| 殉國青年黨 | 東京市世田谷區北澤三ノ一〇三三吉村方 | 昭九・二 | 吉村剛、小林三、伊藤直器、今 |
| 日本新進青年聯 | 東京市小石川區武島町一三 | 昭七・三 | 國清之助、岩倉熊吉、本多傳道、小島修明、小岩林卯之助、中務武人、和泉正義、山崎新三、阿久津軍吉、今田鐵火、安藤哲文、大野則雪、河村帝城、青木世志加、永野忠直、筒井茂治 |
| 自治農民協會 | 東京市目黒區中根町一八四一 | 昭七・四 | 吉田治吾、平松亮輝、青島理明、石田信茂、田窪多理甫、李八龍、青島榮、金田光郎、梅原武張、宮司三雄 |
| 日猶協會 | 東京市澁谷區猿樂町三 | 昭七・二 | 長野朝、權藤成卿、酒井勝軍 |

表一 對現物國義主家國

| | | | | |
|---------|--------------------|-------|--------|--|
| 統天塾 | 東京市本郷區西片町一〇〇ノ一一 | 昭九・四 | — | 藤村又彦、鈴木款、大屋源幸 |
| 教化團體 | 東京市京橋區新富町一ノ三 | 大五・四 | 日本魂 | 後藤武夫 |
| 日本青年協會 | 東京市麻布區新龍土町步兵第三聯隊內 | 昭三・一二 | アカツキ | 清浦圭吾、宇垣一成、關原龍吉、永田鐵山、松本學、武宮邦茂 |
| 日本精神協會 | 東京市赤坂區澗池一三會堂內 | 昭八・一一 | 日本精神 | 菊池武夫、高須芳次郎、大關敬三、森清人、小池源太郎 |
| 大日本護國會 | 東京市本所區東駒形町三ノ二七 | 大一一・二 | — | 片岡君惠、川手忠義、渡邊志盛、谷田繁太郎、松本幸 |
| 大日本昭和聯盟 | 東京市麹町區內山下町一ノ一東拓ビル內 | 昭四・一一 | あかるい政治 | 水野鍊太郎、守屋榮夫、白上佑吉、山下謙一、森田福市、松村松盛、福島潤太郎、武井友次郎、熊谷直三郎 |
| 金鷲學院 | 東京市小石川區原町三 | 昭二・四 | — | 酒井忠正、安岡正篤 |
| 國風會 | 東京市牛込區東五軒町一 | 大九・一一 | 國風新報 | 上泉德彌、江藤哲二、江口鱒六、佐藤卓哉、渡邊汀、梨羽時介、大 |

表一 對現物國義主家國

| | | | | |
|--------|-------------------------------------|-------|------|---|
| 國民精神協會 | 東京市目黒區東町五四 | 大三・九 | 國民精神 | 久保高明、上田秀男、松原利左衛門、大中熊雄 |
| 皇民會 | 東京市赤坂區中ノ町一 | 大九・七 | 皇民 | 渡邊小洋、芳賀如水 |
| 皇道義會 | 東京市澁谷區千駄ヶ谷四ノ六五八 | 大七・七 | 自力 | 荒木貞夫、石井三郎 |
| 皇國國旗會 | 東京市澁谷區角筈三ノ一四三 | 不詳 | — | 近藤實、原口祐生、中村雅哉、島內正義、伊藤清、須田輝雄、尹壘、佐藤俊治、原俊司、關金太郎、岡村彦太郎、平井幸四郎、佐藤巖、和田準三、押見長作、增田一徳、岸一太 |
| 天長地久會 | 東京市杉並區高圓寺三ノ三〇一 | 大二・一〇 | 頂角 | 田中巴之助 |
| 明治會 | 東京市澁谷區大和田町九五 | 昭三・五 | — | 板倉傳吉、中村吉造、寺門敏雄、黒木俊雄 |
| 明會 | 東京府下武蔵町吉祥寺 | 大四・不詳 | — | — |
| 國會 | 本部 東京市杉並區馬橋二ノ一六四 事務所 東京市赤坂區表町一ノ四 | 昭四・一一 | 神武精神 | — |

表一 對現體主義家團

| | | | | | | | |
|--------------|---|---|--|--------------|---------------------|---------------|--------------|
| 赤誠會 | 國民共勵會 | 中央報德會 | 乃木講 | 中央乃木會 | 櫻華聯盟 | 大日本建國精神統率團 | 大日本神農會 |
| 四 東京市目黒區駒場八〇 | 一 東京市赤坂區田町六ノ | 東京市四谷區三光町八 | 六 東京市麹町區紀尾井町 | 三 東京市赤坂區新坂町六 | 一 東京市澁谷區櫻田三ノ | 東京市本郷區根津宮永町三八 | 六 東京市淺草區北田原町 |
| 昭 八・一 | 大 一三・九 | 明 六・一一 | 大 四・二 | 大 二・六 | 昭 六・一 | 昭 六・不詳 | 大 五・一一 |
| — | 縱横評論 | 新 民 | 乃木講友 | — | 櫻 華 | 國之礎 | — |
| 栗原勇 | 平沼賦一郎、宇佐美勝夫、徳富猪一、松波仁、鈴木喜三郎、山岡萬之助、正力松太郎、田中穂積、横田秀雄、宮野正雄、津島金重郎、和野衛 | 下村壽一、關屋龍吉、小倉正恒、有賀長文、四條隆美、赤星隆治、馬場鉄一、小平權一、水町製糖六 | 大庭二郎、摺澤静夫、寺垣猪三、竹上常三郎、貴志彌次郎、河西惟一、服部眞彦、長谷川正道 | 阪谷芳郎 | 佐藤卓蔵、内田虎三郎、二木謙三、加藤傳 | 香取信一郎 | 山田春雄 |

表一 對現體主義家團

| | | | | | | |
|---------------|----------------|------------------|---------------------|----------------|----------------|-----------------|
| 聖日本學會 | 國 柱 會 | 日 本 弘 道 會 | 修 養 團 | 奉 仕 會 | 新 日 本 協 會 | 興 國 同 志 會 |
| 東京市澁谷區原宿三ノ二三〇 | 東京市江戸川區一之江町申孝團 | 東京市神田區西神田二ノ一 | 東京市澁谷區千駄ヶ谷四ノ六八八 | 東京市麹町區富士見町二ノ一〇 | 東京市世田谷區代田二ノ六八一 | 東京市澁谷區西大久保二ノ二三六 |
| 大 一三・七 | 明 三・不詳 | 明 九・四 | 明 三九・二 | 大 一〇・一一 | 大 一〇・五 | 昭 七・六 |
| — | 大 日 本 | 弘 道 | 向 上 愛 汗 白 ゆ り | 奉 仕 の 友 | 共 存 | 興 國 新 報 |
| 田尻隼人 | 田中智學、保坂智實 | 徳川達孝、服部宇之吉、廣江萬次郎 | 平沼賦一郎、蓮沼門三 | 佐藤鐵太郎、葛生仁三郎 | 山本佛二郎、今井龍三郎 | 後藤静香、中崎辰九郎 |

註 教化運動を目的として創立された團體にして、現實には政治的經濟的實踐運動の分野にも進出してきてゐるものがかかりに多く、判然と區別し得るものは殆んどない。右教化團體の中には、現前の状態から大體教化團體とみなさるべきもののみを輯録した。故に、國本社、國維會、大亞細亞協會、大亞細亞建設社等は次の一般國家主義團體の中に入れた。